
vermilion **第 1 幕**

久蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

vermilion 第1幕

【Nコード】

N6723F

【作者名】

久蘭

【あらすじ】

続編連載開始しました ある宇宙の話。太陽系連邦とアストレーデ教圏という宗教を基盤とする諸国の二つに大別された世界。アストレーデ教圏諸国のうちの大国、若年にして王位についたラーフェドラス王国の王は、衰退する国力を憂慮しながら、半ば幽閉された暮らしを送っていた。そして、隣国ファーマール王国による侵攻作戦が開始される。人の思いと憎悪、悔恨と裏切りが満ちる陰謀の宮廷小説的一幕。

序

陛下、私はお恨み申し上げて宜しいか。

陛下と、この国にまつわる全てをお恨み申し上げて宜しいか。
この身とわが腹の御子の命を捧げ、この国を呪って宜しいか。

私の国は何処でありましょうや。

私はこの国に嫁いで参りましたものを、この国こそ祖国と思う事に致しましたものを。

陛下、御身はこの身を守ってはくだされませぬのか。

陛下がお守りなさいますのは、その妹君ばかりですか。

この眼から落ちる涙が国を満たしてよろしいか。

涙に国が沈み、民が溺れてよろしいか。

これは呪いでございます。

理に違反しながら、理を論ずる者に対しての制裁でございます。

この身と心は鬼神に喰われましょう。

そして、この思いを鬼神の心に宿し、鬼神の怒りに変えましょう。

地に戦が、そして天が炎と血しぶきで朱に染まる時、我が恨みはおさまりましょうや？

我が王よ、我が君主、御身をお恨み申し上げて、宜しいか？

ラーフェドラス王国の宮廷に、王妃ミスチアが嫁いで三年が過ぎた。

嫁いだ時は幼い身の上であつたが、ようやく王子の誕生を迎えようとしていた。

太陽系連邦と対峙するように、ファーマール王国とラジサンドラ王国が連合し、そしてそのラジサンドラ王国の第一の座に在る古家より嫁いだミスチアであつたが、太陽系連邦と、連邦より独立を勝ち得たアールシャド帝国の習俗をもてはやすラーフェドラス王国の宮廷にあつて、嫁いだ当初より王妃に対し、田舎くさい、だの、垢抜けない、だの、とかく一挙手一投足にまで居心地の悪い噂話の絶えぬラーフェドラス王国の宮廷は、ミスチアにとって針の筵のようだった。

嫁いだ時はわずか十三才。

その頃、宮廷の華ともてはやされていたのは、国王の妹であるフエイレンリーリア王女であつた。

活発な王女は、ミスチアより一つ年上であつたが、ファーマール皇太子に嫁ぐことが決まっていたも、即位前なのでまだラーフェドラスに留まることを許されていた。

王女は、表面は優しい年長者として接していたが、事あるごとに流行やセンスに対して持ち前の感性を発揮した。だが、それはミスチアにとっては、単なるひけらかしにしか取れず、そして、それに對比するように、ラジサンドラの厳格なしきたりで個性を消すべく育てられたミスチアの身なりを野暮ったさを際立たせた。

まだ幼い心のミスチアには、どれほど毅然としようと努力しても自ずと限界があり、そして、心許せる者は、故国より連れて来た数名の侍女の他はおらず、宮廷のどこにも、居場所を見つけることができなかつた。

ある日、顔を見にきた王に泣いて訴えた。

この宮廷に居るのが苦しいと。

すると、王はミスチアを守るところか、堅く閉じようとしている心を承知で、その花を手折った。

身体の痛みと、心の痛みで、涙が涸れるまでどれほどの時間がか

かったのだろう。

その後も、宮廷と王を恐れながら、それでも寵愛を得れば少しは変わるのだと信じて、昼は公私の別なく務めのために宮廷に身を晒し、そして夜は気紛れに訪れる王に心と身体を預けた。

ただ、王の恩情を信じる事こそ、ミスチアの支えだった。

そのうち、フェイレンリーリア王女は十六才となり、即位がなくても、王太子妃として嫁がねばならぬ日が近づいた。

王女さえ居なくなれば、少しは宮廷の風向きも変わるものと思っていたミスチアであったが、王女は意外な意外な行動に出た。

ラーフェドラス王国の古家、ルーサザン公爵の居城に単身で赴き、そして公爵に嫁ぐことを宣したのである。

ミスチアにとって、それは裏切りであった。

ミスチアが、フェイレンリーリア王女の、格上であるべき王妃に對する様々な無礼に耐えかねて涙を浮かべる時、「王妃様には、この国に身を捧げるべき義務を負ってお生まれに成られたのです。心を強くなさいませ」と追い打ちをかけるような事が茶飯事であった。王妃の義務を諭した者が、古家に生まれた姫としての義務を犯し、心のままに振る舞うとは。

王妃は王に再び訴えた。

だが、王は王女の我がままを寛容に受け止め、そして恋する少女の気持ちをわかってやれと王妃に云った。

王妃はさらに訴えた。

自分と、王女とが互いの決められた国に嫁ぐことで、ラーフェドラス王国、ファーマムール王国、ラジサンドラ王国の三国が、堅い同盟の絆で結ばれるのでは無かったのかと。

妃に立つべく命を受けて、時を経ぬならいざしらず、五年も経つて反故にするなど、ファーマムール王国の潰された体面はどうなるのかと。

ファーマムール王国とラーフェドラス王国が対立すれば、ファーマムール

マムール王国と連合関係にあるラジサンドラ王国にとっても敵となってしまう。

王族出身ならいざしらず、古家とはいえ、臣の家柄のミスチアとその実家の事など、ラーフェドラス王国にとっては斟酌する対象にはなり得ない。

ラーフェドラス王国の宮廷に頼る者も居ないミスチアにとって、親族すら安易に会うことが出来なくなる状況など、考えられなかった。

そして、もう一つの事がミスチアに追い打ちをかける。

王が、女子修道会の司教を還俗させ、妾妃に迎えたのである。

そして、その理由が遠くのほうより噂話で聞こえてきた。

王にとって、王妃は幼すぎるので、話し相手になどなりはしないのだと。

ミスチアは、その時、全てを失った。

人の良心への信頼と、そして、いつか向けられると思っていた愛情を。

その時、腹の中には命があった。

だが、王妃にとってそれはもう異物に過ぎなかった。

激しいつわりと、思うに任せぬ暮らしと。

王太后付きの侍女が、御子のつっがなない育成のために、手の平を返したように優しく接してくる事が疎ましかった。

そして、ことある毎に、ラーフェドラス王国の宮廷作法に従ってとか、前例によれば、とか、何代前の王妃の不摂生がどうした、など、唯一安らげるはずであった自室でのわずかな時間まで干渉してくるのが辛かった。

そして、難産の痛みの内に、王を呪い、国を呪った。
それではなければ、耐えられぬ痛みであった。

このような下種な者たちのために、命を捨てるなど、考えられなかった。

だから、国を呪い、王を呪った。

自分と、腹の子の命を捧げ、この世界の至高の神の一角の、鬼神に祈り、呪った。

我が王よ、我が君主、御身をお恨み申し上げて、宜しいか？ と。

そして、十八年が過ぎた。

第1話 ラーフェドラス国王の退廃

夜半を過ぎて、冷えた風が肌を撫でてゆくのに目を覚ます。
女と寝ているのに、この肌寒さには耐えられないのが不思議だった。

常夜灯のほのかな光が、青く室内を照らす。

迷宮のようなこの宮廷の、いくつもの隠し部屋のひとつ。

情交の余韻は唇にも、肌にも残るのに、焦燥感と氷が身体の奥に突き立てられているような心地に、耐えきれずにベッドから抜け出した。

着衣して、眠る女にもう一枚毛布を掛けて、そして空調が管理された設定温度になっているのを確認して、声も立てずに嗤う。

寒いのは気温じゃない。

自分の皮膚感覚が狂っているだけなのだ。

音も立てずに、その部屋を出る。

天窓から指す月の光。

天井が高すぎる回廊。

しんとした空気に、王はため息をつく。

小さい頃は、よく迷子になった。

侍女に手を引かれなければ、すぐに知らない場所に出てしまう。

途中で母親に会って、側に寄ろうとした時、母親はまだ幼かった少年を近づけず、すぐに側近に部屋に連れて行かせた。

なぜ、あんなに迷子になったのだろう。

侍女の手を離さなければ、駆け出さなければ迷わなかっただろうに、どうして。

そこは、西宮と東宮の中間の大ロビー。

現在、西宮はミスチア王太后、尊称リンガーレンディラの住まいであり、東宮は王と王妃の住まいである。

ロビーの中央に、噴水がある。

夜の間も、水は絶え間なく落ちる。夜間は幾分控えめになるように設計されているが。

床は大理石とタイルによって国土を現すデザインがされている。ラーフェドラス王国は聖アムルテパン修道会の総本山が置かれる。全アストレーデ教圏において宗主国の権を持つこの王国の主はまだ十七歳であるが、王位を継承してすでに七年。若年にして即位したが故に、王太后による摂政政治の弊害により宮廷及び議会の腐敗は酷く、そして宮廷人たちの権力争いと混乱する国政ゆえに、国情は荒廃していた。地域紛争の芽も絶えず、利権におぼれる軍人たちは役に立たず、各地の治安は修道会と騎士団によって辛うじて守られている状況だった。

国王は昨日紛争が起こった場所の地名のタイルの上に立ち、五体投地の祈りを捧げる。

流された血を思えば胸が苦しい。

無力感と寂寥感、思うことしか出来ない自分に憤怒する。

贖罪の思いは絶えず、自責の矢が己を苛むにしても、失われる命の尊さや悲しみに比べれば、どれほど小さなものか。

人の前で追悼の言葉も、祈りの姿も見せたことはない。

何も出来ないのなら、無慈悲で冷酷で、民を思いやらない愚鈍な王と誹られるほうがいい。そのどちらでも同じことだ。

費やされる命の量が変わるわけではないのだから。

「我が神ライドよ。

御身が太陽の光の情け、大地に降り注ぎたもう。

熱き矢をもって、地の厄災を払いたもう。

我が血、我が肉を御身にささげ、地に平安の満ちるを願う。

我、この地の国主なり。

我が名によって、地に贖う。

我が命によって、天に贖う……」

祈りの言葉は、水音にかき消され、何者もその祈りを聞くことは

ない。

祈りを終えて立ち上がり、床に描かれた国土を見渡す。
いくら物思いにふけても、そのような事が無意味な事を知っている。

必要なのは祈りではない。この荒廃を拭う力を、国王は必要としていた。

西宮から、人影がやってくる。

その姿に、国王は心当たりをつけた。

「ライル卿もお散歩ですか」

少年の方から呼びかけた。

「これは、国王陛下」

呼ばれた男は、その前に跪いた。

「母上様は、お休みになられましたか」

「はい。ごゆっくりお休みでございます」

シド・エルバン。まだ二十代前半だが、三年前ライル赤貴爵の地位を得て王太后付きの侍従となった。早い話が、愛人である。

「ライル卿は、今宵は不寝番ですか」

「はい。リン＝ガーレンディラのご命ですので」

「有能なのだな、卿は。母は、心の寂しい方だ。」

卿のような忠義の者が側に在るのは、きっと良い事なのだろう」

空虚に響く声は、それでも噴水の水音に消されている。

「陛下は、まだお休みにはなりませんので。」

夜更かしはお体に障ります」

「女官に寝かしつけてもらったが、目覚めてしまったね」

シドは、懷に手を入れ、一つの包みを取り出した。

「御前に参ります機会があれば、と用意しておりました。以前差し上げたお薬がもう無いのではと思いますして。」

これできつと良く眠れましょう」

国王は唇の端を噛みしめて、そしてその身の震えを押し隠して包みに手を伸ばした。

「気が利く奴。本当に良い下僕をお持ちだな、母上は」

言葉を口にするたびに、痛みを感じる。

それが何処なのかは解らない。

緩やかに、闇に捕らわれていく。

そう、此処は深い井戸の中だ。

寒いのも、焦燥感も、薬物依存によるものだ。

十五歳の頃までは、自分が成人したら少しでも国情を良くする事に対してまだ希望を持っていた。学者も積極的に招いて、知識を得る事にもどん欲だった。

だが、国王が政治に参与したいと願い出る度に、王太后はそれを諫めた。まだ経験が浅い事を理由にして。やがて形ばかりの閑職を与えられ、王太后は完全に国王を宮廷の中に閉じ込めてしまった。

本来の政治の場から興味を失わせようと、臆長けた女官が次々と東宮に配置され、芸人や様々な娯楽メディアを王に与える。

もし、女たちに手を付けなければ、今度は精神的に破壊する手段を取られ兼ねない。まさか薬物まで、とは思いたくもないが、王弟は今年十歳を迎え、自らが王位を継承した年頃になろうとしている今、己れを腐らせ、廃王に追い込む事を画策していてもおかしくない。

そして、何よりも、国王は王妃を守りたかった。

聡明な王妃は誰よりも活発に公務をこなす。今や、王室の存在感は彼女をもって支えられているといつてよかった。だから、王妃を諫める権利を持つ国王が、王太后の手の中に在ると思ひ込ませることとは、とても大切な事だった。

だから、享楽に溺れるふりをする。心の奥では、少しも楽しんではいないし、むしろ苦痛だ。難解な数式や理論に埋没するほうが、

いくらもマシである。

だが、国王に薬物をもたらしたシドの考えは別のところにあるように感じる。

シド自らの保身のみを考えるならば、息子にとって、母親の愛人は消してしまいたいほど嫌な存在である。よって、国王を薬漬けにして特別な立場を得る事で、追われぬように算段するつもりなのだろうか。

もし、自らの保身ゆえでないなら、背後にはもっと他の意志が働いているのだろう。

背後に居るのが王太后というのはあり得ない線ではないが、最も薄い。

なぜなら、王弟にアストレーデ聖典が開示される保証は無い。アストレーデ聖典が開示されなければ、王権は別の王位継承者に渡るからである。

現在のところ、国王には修道会の保証付きで確実にラーフェドラアストレーデが開示されており、そして心を許す権力を持つ側近は居ない。さらに王弟にアストレーデを継承させようとすれば、修道会の干渉を受けざるを得ない。現状を維持する事のほうが得策なのだ。

夜の宮殿の散策を終え、自室に戻る時、王妃のフロアに立ち寄った。

王妃の寝室の扉の前に両膝を付き、大理石の床にキスをする。

本心をこのような形でしか表せないにしても、王妃のみが、この宮廷においての少年の真実である。

少年が自室に戻ると、副女官長メイラ紅貴爵夫人が拝礼して迎えた。

「お着替えをなさいますか」

少年は言葉を言わず、ただ両手を方の高さまで差し上げた。

着衣を脱がせ、用意した夜着を着せる。細身で長身の少年の世話をするために、副女官長は少し背伸びをしなくてはならなかった。

「肌に紅がついておりますが」

「いいよ、放っておけ。」

さっきの娘には、いつもの通り手配を」

少年は、手を付けた女官はその夜のうちに宮殿を追い出させた。追い出す女官の親には、それなりの官位やら、事業やらが与えられるが、そこに感情が介在することは無かった。

「はい。侍従に申しつけておきます。」

今夜は御酒は嗜まれますか」

「ああ、軽いものでいい。ソーダ割にしてくれ」

副女官長は果実リキュールをソーダで割ったものを用意し、脱いだ服を衣装盆に入れて退出した。

ベッドの横に置かれたコップの中に、先ほどシドから手渡された包みを開け、結晶をひとかけら落とす。

泡立って溶けてゆくのを待つ間に、包みを引き出しの奥に仕舞う。そして、それを飲み干して、ベッドに横たわり目を閉じる。

王妃が笑う。夢に落ちてゆく向こうで、優しく少年に笑いかける。夢の中でしか、その笑顔を抱きしめることを許さない。それが自身に課した罰である。

「僕は明日もきつとあなたを怒らせる」

抱きしめた王妃の耳許で囁き、耳朵にキスをして、それから……

夜がまだ明けきらぬうち、国王は目を覚ました。

国が上げる悲鳴が聞こえたので。

アストレーデが開示されるという事、すなわち、国が己の血肉そのものとなる。

銃声も、悲鳴も、身のうちに起こる事だから。

第2話 アールシャド帝国皇太子の勤労

アールシャド帝国、帝都カルバート星。

その総合軍事商社『帝国工廠』第十二号ドッグ。

ラーフェドラス王国より赴いた聖アムルテパン修道会聖典騎士団長マーブリック大司教ルーサザン公爵ラヴィロア・ジャザイルと一行は、ドッグ内が一望できる統合監督室に入った。

ドッグ側の一面の壁が透明で工場内を一望できる。

建造中の母艦、発注ナンバーDD0098が巨大な全体像をほぼ現しつつあった。

「ようこそ、マーブリック大司教」

技師の服のままで、リオン皇太子は相手を迎えた。

「お元気そうで何よりです、殿下」

マーブリック大司教はリオンの前に片膝を付き、皇族に対する礼をした。

皇太子リオン・ルイは、帝国大学宇宙工学科の学生であり、そして民間企業帝国工廠の社長と主任造船設計士を兼任する将来を嘱望された技術者でもあった。

「ここではそれは結構です。ここでは僕は一設計士ですから。一緒に皇太子としての用件も済ませるにしても、今は……」

リオン皇太子の背後で、お目付けとして帝国議会議長フランツ女公爵と帝国親衛隊総司令官ブルジェキラ公爵夫人が立ったまま控えている。

「ええ、では、そのようにさせていただきます。

では、早速本題に。

ランバート五位修道士、こちらへ」

大司教に随員の一人が進み出た。

「DD0098の艦装士官に任じましたランバート五位修道士です。

以後は帝国教会の騎士団に出向し、建造中の艦の艤装は彼が担当しますので、些細は彼が承ります」

双方の担当技術者の顔合わせが完了し、その後建造中の艦船について二、三の確認事項を協議した。

一通りの打ち合わせの後、議題は政治的な内容に移行した。皇太子の背後に立つ二人の貴婦人を除き、周囲の一同を一旦下からせるようマーブリック修道士は依頼し、その後に通の図面を開いた。「本艦の建造に際して、修道会は今回、特に依頼したい事があります。」

艦の側面にこの徽章を。

艦名はガルディナーダ。徽章及び艦の名称は第一級の機密に属します。ですから、引き渡しまでは発注番号を名称とします」

その机上の紋章を見て、ブルジェキラ公爵夫人の顔が凍りついた。「それは、黒龍紋印でございますね」

「よくご存じでいらつしやる。さすが公爵夫人。ブルジェキラ家にはゆかりも深い印でございますから」

「その紋章を、修道会の艦艇につけると申されますか。」

しかも守護を謳う騎士団が、艦艇に戦の女神の名を与えるなど」

「聖典魔術師シエル＝ダル＝シャ＝ハールのご意向です。」

ですから、艤装士官の引き継ぎごときで私が参りました。

試験航行終了後の最終塗装でこの徽章を完成させて戴きたい。

そして図面は、その時までブルジェキラ公爵夫人のお手元でお願いいたします。

宜しいですか、殿下」

「……了解した」

リオンは思わぬ重責を負わされたと感じた。

「変革がくるのですか」

「はい、殿下。」

ラーフェドラス王国に大きな変動の時代が訪れます。

私も現在の地位に甘んじてられない。

だが、私はシエルⅡダルⅡシャハールの正体を知る、唯一動ける手足です。

まだ完成には当分時間を要しようが、これは今お渡ししておきます。

現状で、シエルⅡダルⅡシャハールと、私、艦装士官の他はこの紋章についての事は知りません。

たとえ、総教主猊下であっても、ご存じのない事です」

マーブリック大司教は、図面を取り、書類を封書に入れるとリオンの前に差し出した。

「以前、黒龍紋印をつけていたのは、帝国親衛隊でございました。

その時に起こりました事が、いま一度、ラーフェドラスにて起こります。

その変革の時代を乗り越えた帝国の皇太子であるリオン殿下には、この変革の意味を理解していただけるかと思ひまして、お願いいたします」

リオン皇太子は、図面を受け取った。

そして、その後、いくつかの外交的な職務を終え、リオン皇太子はドッグ周りを一周して艦の外周を観察できる回廊の案内を申し出た。

「本当は艦内を案内できたらいいのですが、まだ中は空洞に近いので。

それから、肝心のエンジンですか、新規の開発なのでまだ出力の安定性に不安があります」

「納期は問いません。書類上の納期は設定しましたが、あくまで一応の目安。まだ充分時間はありますから、殿下の納得のいくように好きに作っていただいて構いませんよ」

二人だけの場であった。

「ご子息、ギルはお元気ですか。きっと学院で勉学に励まれているのでしょうかね」

「ええ。とても元気です。この前はベスティボールのレギュラー選

手に選ばれたらしくて。

級友たちにも恵まれて、健やかに過ごしております。いずれ帝国大学での勉学の機会もあればいいのですが、今のところ、本人は騎士団の修道士になるつもりなのでしょう」

大司教は、修道会の学院に在学中の息子の事を問われ、そう返事をした。

「そうですか。一緒に過ごした頃はまだ幼さが残っていましたが、すっかりなさっているようだ。

時に、ラーフェドラス王国は不穏な状態が続いていると聞きますが、カーレル陛下はご息災ですか」

続けて問われた言葉は、リオンの本当に知りたい事だった。

「さあ、如何でしょう。

私の言葉でお察し頂ければと思います。

代わりに王妃様、リン＝ファムランティアはともご健勝であらせられますよ。外交にも積極的に取り組まれておいでです。

殿下がお気にかけていらっしゃることを知れば、お二人ともきつと喜ばれることでしょう」

大司教は、ラーフェドラス王妃ロイエンライラを王族の女性の称号であるリン＝ファムランティアと呼んだ。アストレーデ諸国では、王族の上位の女性は、神話の女神や賢女の名を称号として与えられ、尊称として使われる。

量かされた大司教の言葉は、リオンの心配を裏付けるものだった。「ええ、リン＝ファムランティアには先日書状を頂きました。ただ、カーレル陛下の近況にはあまり触れておいででなかったのです。ただ、型どおりにご息災だと。

カーレル陛下は私のように、自由じゃないから。会って、話して一緒に気張らしできたら良いのだけど。あの時のように」

「そうですね、ご学友も、今は私の息子一人になってしまいました。気の利かないところがあるので、陛下のお気持ちを晴らすこともできない」

リオンにとって、ラーフェドラス王は、気持ちの上で弟のような存在だった。

リオンは三年前、突然、病床の皇帝に呼ばれ、玉座を継承するための「資格試験」のようなものを受けた。それからまもなく、アストレーデ修道会の教主座にして、ラーフェドラス王国の首都カリーンに、アストレーデ古語の勉学のために三ヶ月ほど留学した。教主自らの古語とアストレーデ聖典についての教育を受けるためと、アールシャド皇后となる事が決まっているラーフェドラス王女シエラ・エスファナとの見合いも兼ねていた。

ラーフェドラス国王カーレル・エスファナは当時14歳。王妃ロイエンライラは13歳。リオンとは年頃も近く、国王の学友を務める従兄弟のダリルディーン・ガルディア・ジャザイルも交えて、滞在中は四人で過ごす時間を持った。

皇位継承権が格下の七位であり、母親の身分も貴族としてはあまり高いほうではなかった。リオンは、実質的な保護者であり帝国工廠の本来の社長、ラムス赤貴爵の後を継いで艦船技師になるつもりでいたので、王族としての意識が乏しかった。

ところが、上位継承権を持つ皇子たちには、帝位を継ぐための必然条件であるアストレーデ聖典のうちのアールシャドアストレーデが開示されなかった。

アストレーデ教圏にある古代より続く血統を持つ家柄、これを古家といい、その国々のうちの古家に属する血統を持つ王家には、各国ごとにアストレーデ聖典が伝承されている。

その聖典はは古代語で書かれてあるが、古語のみを学んだとしても、真の聖典に書かれている文字を読解することはできないとされる。

アストレーデが開示される、という事は、アストレーデ聖典の内容が解る、という事であり、それが王、あるいは皇帝になる者の最低条件である。

そして、リオンは皇帝によるそれらの「資格試験」にパスするこ

とが出来たらしい。

しかしながら、皇族でありながら立憲君主制の保護の元に、学業と工廠での実務に追われ、殆ど関係することの無かった皇族たる者の暮らしや作法、及び宮廷というところに馴れるために、年の近いラーフェドラス国王の元に行かせたのは、フアランツ女公爵の進言によるものである。

留学に際しては、マーブリック大司教ルーサザン公爵の私邸を拠点とした。

そういつた縁もあり、大司教とその息子のディーンはりオンにとつて、気安くできる存在であり、その際に共に過ごしたラーフェドラス国王夫妻に強い近親感を覚えた。

「私はこの国に生まれたおかげで、皇帝に即位する身にしては自由に暮らしているし、学業にも研究機関にも市民と差別なく参画できる。成年となるまで、議会が人権を保障してくれる。だが、カーレル陛下はどれほど息が詰まることでしょう」

「殿下のお気持ちは、私がお伝えいたしますので。

例の書面に頂きました殿下の御璽、決して無駄には致しませんので」

「私も卒業を控えて、少し気持ちがナーバスになっています。

だから、余計に気にかかるのかもしれない。

カーレル陛下には、王妃様も、大司教もいらっしゃる。

だから、私が心配する必要はないのですが」

「殿下はお優しい。三ヶ月とはいえ、境遇を同じくする身ではありませんか。兄弟のような心情になれるのは無理もないこと。

それに、このアールシャド皇帝の座は重責ですね。

心中、お察し致します。

でも、貴方なら大丈夫。

そのお歳で、こんなに大きな工廠の主ではないですか。

艦船から、一般の商船まで扱う工廠です。

殿下は、その工廠の、ネジー本の事まで熟知しておいででしょう。

なら、何も心配はいらない。複雑な事は何も無い。いらぬ雑音に耳を傾けず、エンジンの正しく働いている音にさえ耳を澄ましていればいい。

そして、それが共鳴する装甲の音を聞けばいい。

本体にエンジンが見合わなければ異音がする。その音さえ聞き逃さねば大丈夫。違いますか。」

若くして騎士団のトップを預かりながらも、決してその地位が手柄やコネばかりではなく、実戦に身を置いて功績を挙げてきた者らしい例えであった。

「人は、時に最も良いと思つた決断に、大きな代償と責任と、そして罪を背負わされる事がある。だから、力を持つという事は恐ろしい。」

だが、怯んではいけません。罪を背負われたなら、その罪に正しく向き合い、払つた代償を無にしない、最善の道を選んでゆく。

生きるということは、罪を犯して進むことです。誰もその罪から逃れる事はできない。ただ、我々古家は、生まれた時から負わされた物が大きいから、その代償も大きい。

それを自覚してれば大丈夫。その罪をつねに自覚して、祈りを忘れない事です」

それが単に修道士としての言ではなく、自らの経験からのものであることをリオンは知っている。

「私も、そうありたい」

リオンは、ただ一言、そう云つた。

「では、アールシャド王国の主神たる、法の神アードに祈りましょう。」

ダーヤ・ファンジェリーナ（喜ばしき事を）」と

大司教は、リオンに指先で祝福の印を切つた。

第3話 少年修道士の憧憬

聖アムルテパン修道会のアルファン・ダーザリ大聖堂の詠唱席で、まだ十代前半の少年修道士たちが、週ごとに行われる正午の礼拝のためにアストレーデ聖典解禁文書の文句を、伝統的な旋律にあわせて歌っている。ソロのパートを受け持つ少年の声は、まるで谷間をぬける風の神の声のように、ひときわつややに、高い聖堂の天井に響く。

『黄金の声』

この聖堂に礼拝に訪れる敬虔なアストレーデ教徒からは、誰からともなくそう呼ばれ、週に一度の礼拝の楽しみの一つにしている者も少なくない。

だが、当人はこのごろその事をあまり喜ばしいこととは考えなくなっていた。歌うことは好きだし、楽に高音域を出すことのできる今の声を誇らしくは思う一方で、周囲が大人びた声に変わっていく事を焦る気持ちもある。

少年は、もうすぐ十五才になる。他の同期の少年たちは、半年ほど前にみんな変声期を迎え、詠唱隊に残っているのは彼ひとりになってしまった。彼は、その年齢にしてはずいぶん幼く見える。それはひとえに、少女のように繊細な顔立ちや二歳下の者たちとさして違わない身長のせいであり、実際の彼は、同期のどの少年よりも早く司教の資格を手にしていたのだ。

礼拝を終え、他の少年たちとともに聖堂の裏口から聖アムルテパン修道会の本部ビルの中庭を横切り、修道学院との境界にある低い塀の内側に足を踏み入れると、一気に中等部の宿舍まで走り出した。そして、正午の礼拝後は、学院生は半日の自由時間を与えられ、外出も許可される。

そのことが、彼らの解放感をより大きくしていることは間違いない。

しかし、これも學術図書館への派遣資格を得られる高等部生ともなると、急に大人びてしまい、運動施設以外では、決して走り出したりはしない。

少年は自分の部屋に戻ると、早速、その八人部屋ではひとりだけになった詠唱隊の制服を素早く自分のベッドの上に脱ぎ捨て、そして、二段ベッドの上段の枠に掛けておいた、黒地にスタンドカラーの襟を赤い線で細く縁取った皺ひとつないクリーニングしたての修道服に着替えた。

襟に線がはいるのは、司教以上の資格を持つ者だけで、少年は従司教といっても、高等課二年目の資格保留期限が切れれば、同時に正司教となることになっているので、この制服が許されている。

修道会の組織は、聖典院、教主院、法院、財院、守護院、祭司院、慈善院、究学院、図書館、養育院、学院、天文院と、仕事の分野に応じて分類されている。

少年が属しているのは守護院であり、その主体は修道騎士団と呼ばれる軍隊である。その歴史は古く、ライデイド恒星系のラデス星において、アストレーデ諸国が宇宙に暮らす術をいまだ知らぬ頃に、ダーリィティザールの聖典を持つ古代ラーフェドラス王国のみで修道会の組織が運営されていた。

その頃は現在の新しい神々であるアストレーデの神々は主神として祭られておらず、古えの神々であるダーリィティザールの神々を主神として、修道会は組織されていた。ダーリィティザールの神々、神々の皇帝と呼ばれる黒き龍の姿をした「存在」を司る神ティザールィラザール、黒き龍の皇后にして糸紡ぎ姫と呼ばれる少女と青年と老人の三つの姿を一身に具現する創造と破壊を司る神アルファンィダーザーリ、宇宙の全知と呼ばれるあどけない子供の姿をした宇宙の摂理と時間を司るシエルィダルィシャハール。それら三柱の神

々が信仰の中核にあった時代に、『黒龍騎士団』と呼ばれる修道士となった貴族の子弟が組織した騎士集団を前身とする。

聖アムルテパン修道会は、国王の権威に追従しがちな神官職らに對して、純粹なる信仰と正統なる聖典の解釈・研究のために組織された一群であった。王国の方針には、それが正しい道とされたときには従うが、そうでないときには従わない。また、民の不利益には徹底して抗議する姿勢をみせたので、当然国王は軍隊をさしむけて修道会を攻撃するとともに、修道会に賛同する村や町に危害を加えることもあった。それを自衛するために、武術の心得のある有志が騎士団を結成し、それに対抗したことに端を発する。

その伝統は、星間を超えて国家を作る現在に至り、修道騎士団として神々の慈悲と信仰のために立つ守護の軍隊である。

少年は着替え終えると、バッグを肩に掛けて部屋を出た。

他の少年たちは、昼食のために食堂に行つてしまい、無駄に重厚な作りの廊下に行くのは、少年ひとりだけである。

少年は、寮監の修道士に外出許可証を見せ、一連の手続きのあと寮棟を出た。

学院の西門を出ると、そこに駐輪場があり、そこでバイクに乗る。ひとつの都市ともいって良い規模の聖アムルテパン修道会本院は、学院の敷地を出ても、さらにいくつかの門を潜らなければならない。学院は、巡礼者が詣でる大聖堂に隣接しているために、西門を出たあたりは、巡礼者へのみやげ物屋や、書店が軒を連ねている。

みやげ物屋のウィンドウの中の、キラキラ輝く様々な神々にまつわる品々は、巡礼者の信仰の対象として、帰ったら祭壇に飾られるのだろう。薄暗い祭壇の蝋燭の明かりで幻想的に煌くようにデザインされている。

少年は、太陽の光を受けて乱反射する、それらの祭具を見るのが好きだった。

行きつけの大きな書店の前にバイクを停めると、いつもの雑誌売

り場に直行する。学術図書館が経営するその書店は、銀河系の、どんな星の雑誌でも手にはいることで知られ、とくに探し物のある場合は、店の奥に設置されている検索端末で探し、即座に注文できる。少年は、あらかじめ注文してあった本を受け取ると、友人から預かった二デユカーレ硬貨とともにレジに差し出した。

背負ったバッグにそれを入れると、再びバイクを走らせ、海岸ぞいの道に出る。

そこは、対岸にある宇宙港に入港した宇宙船が、数日停泊するための水上繫留埠頭になっていて、少し離れた聖アムルパン修道騎士団の艦艇専用埠頭には、去年、少年が乗り組んだ宇宙空母『アリアンテユレス』が、美しい帝国様式の姿を水面に写している。

少年は、その空母を見つけると、急にバイクの速度をあげた。その空母に乗り組んでいる太陽系連邦出身の火星人に、もしかすると会えるかもしれないので。

そして、修道騎士団の地上司令部のある地区に入ると、作戦統帥本部ビルと艦隊組織運営本部ビルの向かい合う前庭のつきあたりに、聖アムルパン修道騎士団総司令府ビルがある。その地下駐車場にバイクを置くと、エレベーターで部屋番号を指定した。

戦略主任参謀アーサー・レイノルズ五位修道士のオフィスである。「今日は少し早いようだね、デーン。

地上機の離陸時間まで、十分もある。この前は、駆け込みでぎりぎりだったのに」

総司令官付き戦術主任参謀アーサー・レイノルズは、そう云って自分の専用オフィスで少年を迎えた。

レイノルズ修道士は、太陽系連邦の遺伝子管理局の特殊遺伝系列を持った人工育成体である。

金髪に長身。

きつちりと着こなした騎士団の膝丈の黒の制服とあいまって相当な威圧感がある。

元は、太陽系連邦の艦隊司令官であつたが、エドワード・ストレイカーとともにアストレーデ教国側に亡命してきて、現在は修道会に身を置いている。

「第一艦隊が昨夜、帝国訪問から帰ってきてね、エドワードにこれを頼まれた。

数日、事務処理で忙しいようだよ。

今回は帝国教会と帝国親衛隊との合同軍事演習に参加したらしい」レイノルズ修道士は、少年に小さな紙包みを渡した。

送り主は、さきほど停泊していた第一艦隊機動部隊作戦統括部長で、少年がとても敬愛するストレイカー少佐である。

修道騎士団は、表向き修道会に属する修道騎士によって構成されていることになっているが、実際はその半数程度は修道宣誓を行っていない一般人である。思想的、人権的な様々な事情から祖国を捨てた者たち、アストレーデ教圏諸国をはじめとして、太陽系連邦からの亡命軍人をも積極的に引き受けている。

そして、宣誓をした者は修道士の階位で呼ばれ、そうでない者は、一般の軍隊での職務に応じた相当の階級で呼ばれる。

「あと二十分早く来たら、会えたんだがね。事務処理が急ぐそうだね。

残りの仕事を指示を済ませてくる。すぐ戻るから、少しのあいだ待っていてなさい」

机に置いてある書類の束を持って出て行った。

少年は、包みを開けてみた。

中には、ちいさな宇宙空母のキーホルダーが入っていて「帝国親衛隊勅使艦隊」と刻印されていた。勅使艦隊とは皇帝より直接の指揮を受ける実質的な第一艦隊である。添えてある手紙には、帝国親衛隊総司令官から直々に拝領したものだと書いてある。帝国親衛隊総司令官といえば帝国軍唯一の女性提督。常に軍服ではなく、古式ゆかしい宮廷女官の装束で指揮を執ることで高名である。

しかし、手紙の二枚めをめくると、二ヶ月後に始まる今年の乗艦

実習に向けてのスケジュール表が添えてある。少年は、実習に備えて来週にもはじまるであろう地獄の体力強化訓練のことを思い出し、一気に気分を暗くした。

太陽系連邦軍では、あらかじめ職種を想定してデザインされた遺伝子から発生させた人間を、軍人として用いる。よって、容姿で職種が特定できる場合が多い。

ストレイカー少佐と遺伝子ナンバーが最後のひと桁しか変わらないので、目の色をのぞくと、そっくり同じ顔立ちをしているのだが、その持っている雰囲気の違いのせいで、まず初対面でも見間違ってしまうことは、ほとんどない。

レイノルズ修道士が信仰宣誓をして修道士となり、ストレイカー少佐がそれをしないことが、何よりその性格の違いを表しているように思う。

「さて、行こうか。今日は、作戦立案室のサドラス修道士も一緒にいる。いい子にしていないと、成績に響くよ」

少年は、書類ケースひとつをさげたレイノルズ修道士とともにエレベーターに乗った。レイノルズ修道士は、本来の修道士の階位としてはまだ七位であるが、亡命して修道会に入って僅か五年でその資格というのは破格の昇進である。それでも五位と呼ばれているのは、騎士団員として太陽系連邦軍においての履歴に基づいた役職に配置されるにあたり、五位相当の役職を任されたために、五位と称することが許されている。

エレベーターは、最高速度ですぐに最上階の地上機発着場に着了た。すでに地上機は発進準備が整っていて、ふたりはそれに乗り込んだ。

「久しぶりだね、ディーン。初階司教資格を取得したことは聞いたよ、おめでとう」

作戦立案室副長のサドラス大佐は、少年が敬礼して通路を通り過

ぎようとすることを、呼び止めた。

「ありがとうございます」

少年は、あわててそう云ったが半分白髪におおわれた、いかにも気難しそうな頭の持ち主であるこの上官を、礼儀を欠かない程度にできるかぎり敬遠していた。学院の戦略概論の非常勤講師でもあるのだが、学院の生徒も、少年と同様、この軍人を遠巻きにして、できるだけ失点がばれないように気をつけていた。

「さぞお父上もお喜びでしょうな。その調子で修道騎士団としての学習も怠らぬようにさらなる努力を期待しておりますよ」

「はい。お氣にかけていただいて、恐縮です」

少年に対する型どおりの挨拶が終わったのか、二人の話題は早速仕事上のものになり、デインは席についた。

サドラス大佐は、規律に厳格すぎるので少年としては実は煙たかった。

普通は修道会においてさえ、少年が大神父の嫡子であることに加えて、ラーフェドラス国王の学友も務めている事は伏せられていた。それでもその素性を知る者が、たかだか子供にすぎない少年の機嫌をとったり、おべっかいをつかったりする者もいた。十才を過ぎるまでは、そのことを全然気にもとめなかったが、最近では世の中の物事がすこしづつ分かってきたので、すっかりそんな相手のことを心の中では見下すようにしていた。

だから、サドラス修道士はゆるぎない信頼に足る人物である。信頼に足るからこそ厳しいのだと云うことを充分理解している。

二人の将校の席から漏れてくる話の内容自体は、ファーマムール王国と太陽系連邦の間の国境線についてらしいが、内容までは分からない。

だが、実際に急を要する問題は、このラーフェドラス王国のほうでないかと、少年は会話を聞きながらぼんやりと考えた。

現在の王国の行政に対する不満は、ラーフェドラス王国軍のみでは鎮圧しきれないほどに膨れ上がっている。先月号の「レキシント

ン・ジャーナル」はそう伝えていた。「上海通信」にしても、さきほどの店頭の宣伝用プロモーションでは『ラーフェドラス王国内戦の行方』と題して特集記事が組まれていることをメインに報じていた。

このサラ・オーディーンティオス星は首都であり、また修道騎士団の本部もあるので治安はかなり守られているはずだが、少年がバイクで通う途中に、反政府軍分子と目される者たちがラーフェドラス王国軍によって強制連行されてゆく場面に食わしたのは、先週のことだった。

修道会の中にある限り、少年を含め、学生たちは守られていくだろう。

もし、戦乱の影が少しでもあるなら、修道会は、その拠点を帝国教会にでも遷すだろうし、学院もともに移動するのだから。

三十分足らずで、地上機はサラ・オーディーンティオスの惑星面を半周して、市街地のあるフェイルディア大陸の裏にある、オルダリアン島の王宮に到着した。

少年は、持ってきた先月号の「上海通信」を読んでいたが、それをハンディ・リーディング・レコーダーから抜き取り、バッグにしまった。王宮の一画の地上機発着場には、宮廷車が待機していて、そこでサドラス大佐とは別々の方向の宮廷車に乗り込んだ。

宮廷車は、広大な王宮の地下通路を、かなりの速度で走り、国王の私的な住まいであるノーザリック宮殿の、国王の階までの直通エレベーター前で止まった。

第4話 ラーフェドラス王妃の善意

ラーフェドラス王国の王宮ノーザリック宮殿は、玉座が置かれる中央の太陽神命宮を中心に左右に翼を広げるような形をしている。国王と王妃の住まいである東宮と、ミスチア王太后の住まいである西宮から成る。

少年と一行は東宮の裏口から入りエレベーターに乗り込むまえに、検問でひととおり所持品が調べられた。そしてようやく国王の書斎に向かうことができる。

国王シーヴァエドナ十二世カーレル・エスファナは、すでに書斎で待っていた。というより国王の机の上に置かれたディスプレイの付近にちらばっているメモの状態からして、ずいぶん前の時間からずっと、ここで学習に耽っていたらしいことがわかる。

レイノルズ修道士は、膝についてアストレーデの流儀にしたがつて国王に拝礼した。少年もそれにならった。

国王は席を立ち、レイノルズ修道士と少年の礼を解かせ、立ち上がらせた。

「今日も、よろしく願います、レイノルズ修道士。今日は、ライラがまだ来ていないのです。お忙しいでしょうが、しばらくのあいだ、お茶でも飲んで待っていてください。

あの方は、連邦関連の講義だけは、先に始めてしまうと機嫌を悪くなさるでしょうから」

二人を席に着かせると、軽食と茶器が運ばれてきた。

「ギル、昼食、まだなんだろう。王妃がそれを用意させた。食べていいよ」

国王は、少年にそつと耳打ちした。

少年の前に出された皿に、連邦風のサンドイッチが乗っている。

少年は、書類上の名をディーンというが、真の名をガルディアと

いう。

二重に名前を持つのは古い血統の貴族にはごく一般的な事であり、親族と、特に心を許す相手はこの名で呼ぶことが多い。

「ところで、レイノルズ修道士。いま読んでいた本についてなんです」

「何をお読みでございますか」

「『太陽系連邦の施政系統』というものです。少し疑問があるので、ライラが来るまで解説してくださいませんか」

「よろしいでしょう。私の解る範囲でなら、お答え致しましょう」

国王は散乱するメモをかき集め、レイノルズ修道士に質問した。

国王とは、少年が二才を迎えたところからの付き合いになる。ミスチア皇太后はあまり自分の子供に興味をもたない性格で、その頃は特に宮廷での権力固めの時期であった。少年の母親は、

ラーフェドラス王女であった。したがって現在の国王とは、いとこ同志の間柄である。

国王は、わずか十歳という幼さで玉座を継いだ。

現在、国王は十六歳。少年は学友として時折伺候し、学習したり、話し相手になったりする。が、親族でもあり、少年にとっては学友として仕えるというより少し意地の悪い兄という存在だった。

少年が、学年では二つも年下であるのに学友を務めている大きな理由のひとつが家柄であり、もうひとつは学力、そして、最後の理由は、国王は、ほかに推薦された同年齢の少年たちを、誰も気にいらなかったのである。

王妃ロイエンライラ「リン」アールシャーナは国王より一つ下の十六歳で、国王が位につくと同時に結婚した。革新的な女性で、保守的な宮廷人たちとは真っ向から対立する考え方を持っていた。

よくアールシャド帝国で流行している連邦風の装いをしては、ミスチア皇太后の颯爽を買ったし、連邦公用語の学習を国王に進言

したのも彼女である。

レイノルズ修道士は、週に三回、連邦公用語と国際軍事情勢を国王と王妃に教えていた。国王は、連邦公用語に関しては、あくまで王妃へのつきあいという態度を始終崩さなかったが、連邦をとりまく国際的な情勢については、強い関心を持ちつづけ、最近では、王妃が小難しい軍事情勢に飽きてしまい、太陽系連邦の古代宗教のほうに関心が移ったあとも、国王は、熱心にレイノルズ修道士の講義を受けていた。

弱冠十歳で王となったシーヴァエドナ十二世は、当然のことながら傀儡であり、実権はその母、ミスチア皇太后が握っていた。

聡明でありながら、その才能を政治の場から遠ざけられて、日々を無為に過ごすだけのこの国王は、この一、二年の間に急に性格を変化させた。

以前なら、国王はまだ幼く、とても為政者たるべき人格や能力を求めることはできなかったので、元老議会としても、皇太后ミスチアの政治への関与はいたしかたないものとして、認めざるを得なかっただろう。だが、絶対的な独裁制をもつて、ラーフェドラス王国に君臨しようとしていたミスチア皇太后は、十二歳になった頃から議会の傍聴席についていた国王に、二年前、文化事業審議会を設立して、その議長の地位を与えた。

当時の「上海通信」の特派員緊急レポートによれば、すでにラーフェドラス王家の直接の統治下にはない星域は、中枢部にあたる元老議会の弱体化によって、それぞれに半ば自治行政を敷くことを余儀なくされるような状況に追い込まれており、文化事業と名のつく行為は、それまでに整備してきた教育制度の維持が限度となつていくことが問題として取り上げられていた。

国王自身も、議長の地位についた当初は、初めて政治の場に直接関与できることを喜んでいたが、それによって元老議会を傍聴することができなくなった。また、文化事業審議会自体も、ラーフェ

ドラス王国の現在の状況では、とても機能できるものとはいえないかったのである。

その事が起きる少しばかり前、シーヴァエドナ十二世の政治にたずさわる者にふさわしい早熟な統治者としての才能の片鱗を、元老会議員が認め、その論評を議員月報に掲載したことがあった。そのときは、いつもは少し醒めた考え方をする国王が、めずらしく自分のことで嬉しそうな顔をして、少年に議員月報を読んで聞かせたのを今でもはっきりと記憶している。

少々、不埒な考え方もかもしれないが、少年が想像するに、ミスチア皇太后は、元老議会によって、摂政の地位を追われるのではないかという懸念にが生じ、わざと国王に閑職を与え政治の中心部から遠ざけたのではないのか。

そうでなければ、元来、政治学に関心の深い国王のこと。ミスチア皇太后の政権に不満を抱く議員たちの手によって、もう少し、国王にラーフェドラス王国の情勢についての情報が正確に伝えられているだろうし、その情報に関する多様の見解を述べた雑誌も、直接届けられていいはずなのだから。

シーヴァエドナ十二世の許に伝えられる情報といえば、レイノルズ修道士がたまに講義を離れて、あたりさわりのないことを選んで雑談に用いるものが、最も正確で新しいものであり、その次が少年がたまに持ち込む月遅れの「上海通信」と「レキシントン・ジャーナル」などの、輸入品の雑誌類。国内ものは報道検閲があり、あまり正確な情報は期待できなかった。

それらのものから情勢の概略を把握しかけた頃にようやく、議会の国内情勢研究所経由で、すでに判っていることばかりしか載っていない調査資料と、近頃ではミスチア皇太后の息のかかった者ばかりが寄稿している議員月報が届けられるのだ。

少年としても、何とか新しい情報を国王にもたらすために努力しようとは思うのだが、戒律の厳しい修道学生的身では限界がある。

ラーフェドラス上級貴族でもある少年の父の推薦で、こうしてレイノルズ修道士を講師に送り込むことができたのは、せめてもの事だろう。

熱心にレイノルズ修道士と語らう国王を見ながら、少年は、国王の機嫌がいつもより良さそうなのに、顔色がいつもよりかなり悪いことを妙に思った。いつもは、具合が悪い日は決まって機嫌も悪く、そんなときは、王妃の機嫌などにかまってやるような気配さえみせないのだ。

国王と王妃は、少年が昼食の時間を犠牲にして、市街地を冒険してまわっていることを知っていて、時々こうして、少年のために軽食を用意してくれる。国王は、それと引き代えに、その様子を少年から聞き出すのだが、最近は少年の側でも、とりたてておもしろい話題というのは種が尽きてきていたし、国王も、以前のような強い関心は示さないようだった。国王の機嫌の悪い日には、もちろんこんな気遣いをみせるようなことはない。かわりに王妃が、講義の前に、お茶の時間をレイノルズ修道士に提案するのだ。

その部屋は、侍従が控えている部屋で、いつでも国王の呼び出しに応じられるように、二、三人の男たちが待機していた。他に、警備の兵士がひとり、隣の部屋の監視モニターの前でじつと監視している。

「ごめんなさい、遅れてしまっ」

王妃ロイエンライラは、古風なラーフェドラス宮廷の盛装に身を包んで、数人の侍女を引き連れて入室してきた。

「これは珍しいですね。あなたのそのようなお姿は二ヶ月ぶりに拝見しました」

国王の少し冷やかしのこもった口調を無視するように、形式だけの礼を国王に捧げると、王妃は礼の姿勢をとったレイノルズ修道士に立つように合図した。

「このような格好で失礼いたします、レイノルズ修道士。講義のあと、すぐに皇太后さまご主催のレセプションに出席しなくてはなり

ませんから、支度のほうを先にしてしまいましたの。

太陽系連邦の大使が交替なさいましていね、本来なら国王陛下のご臨席の上で、歓迎の式典を催すのが常でございましょう。なのに、あのお方はご気分がすぐれぬとおっしゃいますの。せつかくの午後の予定を変更して、王妃が代理として臨席しなければならなくなりました。今日は質問したいこともたくさんございましたのよ。

ギル、あなたのご気分はよろしくて。健康は大切よ。ご用心なさいね。

ところで、このまえお借りした雑誌、もう少しのあいだ貸してくださいね。お友達から借りてくださったものなのでしょう。明日の朝、あなたが学院に帰るときに、侍女にお菓子をことづけておきますから、それで勘弁していただいてね。

さて、レイノルズ修道士、今日の講義、はじめてください」

侍女たちが、テーブルの上の茶器を片付けると、いつもどおりの講義が始まった。

王妃は、少女らしい態度で国王を無視しつづけるつもりらしかった。よほどミスチア皇太后とひとりで対面しなければならなかったのを怒っているのだろう。そして、少年を交えた三人での夕食のあとで、少年に、その日ミスチア皇太后から王妃が浴びせられた皮肉の数々をぜんぶ告白するのが、いつものパターンである。

普段なら、二時間ほどの連邦公用語の講義も、今日は一時間ほどで切り上げられた。

「ギル、すぐにあちらを済ませてまいりますから、お夕食は一緒にいつもどおりにいたしましょうね」

王妃ロイエンライラは、国王とは対象的に、活発でいながら優雅な動作で、あわただしく書斎を出ていった。いつものことながら、王妃が去って扉が閉じたとともに、部屋に数秒間の完全な静寂による空白ができてしまう。

王妃ぬきで、前半を国王のさきほどの質問内容の解説にあてて、まるまる二時間の国際軍事情勢の講義を終えてしまうと、レイノルズ修道士は基地に帰っていった。

その後の時間は、国王と少年の自由時間である。いつもなら、王妃も交えてゲームをしたり、おしゃべりをしたりするのだが、王妃は今、眉をひそめるミスチア皇太后を前に、外国の客人にレイノルズ修道士仕込みの、美しい発音の連邦公用語で話しかけているのだろう。

同年配の友人を持たず、隔てられた環境に暮らさなければならぬ国王が、この年下の従兄弟の月一回か二回の泊まりのために部屋を、宮殿の自分の寝室と同じフロアに作らせたのは少しでも少年を通じて外の社会を感じていたいからである。あまり閉鎖された状態は、国王の正常な精神の発達を妨げるとして、宮廷の医術修道士が学友と遊ぶ時間をできるだけ多くするようにミスチア皇太后に進言してから、四年が過ぎた。

当初十人ほど選ばれた学友も、結局少年一人が残っただけであり、少年も修道学生としての生活もあるので、結局医師団の進言は無駄に終わったに等しい。しかも、ミスチア皇太后は、国王の子供の時代は過ぎたとして、近々、この習慣を廃止させる心づもりである。

ロイエンライラは当然それに反対して、せめて講義の時間の同席ぐらいは認めるように、侍従長を通して説得しているが、肝心の国王の協力がないと少年にしばしば漏らしていた。

書斎から国王の居間に移ると、部屋中が夕日に薔薇色に染まり、大きな窓のむこうにある山の稜線がみごとなシルエットをつくっていた。

「雨季が終わったようですね。久しぶりのきれいな夕焼けだ」

少年は、部屋にはいるなり、そう云った。

国王は、まわりに誰もいないときに、少年に対等に接するように強く望んだ。

「ギルは、まだおぼえているかな」

国王は、窓辺に立って云った。

「昔、君が話しただろう。この夕焼けの彼方に、ダールティザールの神々の王国があるって」

「憶えていますよ。でも、ライラ様が、ここはトレア星ではないので、そんなことはないと言って、お笑いになりました」

「だけど、ダールティザール神話集は、アストレーデ神話集のように、トレア星を宇宙の中心とする我々の住んでいるこの宇宙のことだとは、どこにも書いてないだろう。そしてアストレーデ神話集の冒頭に、はつきりと記されている。

『かくて、ダール・ティザールの神々の宇宙は維持神たる黒き龍とともに崩壊せり。その後、神々の皇帝たる黒い龍の深い闇の亡骸を抱いた、黒き龍の妻にして破壊の神であるアーヤキは、創造の神アルファン・ダーザリの姿をして、闇より新たなる宇宙を創造せり。その空間に、類稀なる黒き龍の瑠璃に輝く闇の羽根のひとつひとつとともに、高潔なる王女ルーフェンタールの護りし水晶球を浮かべたり。

これが、のちに水晶の魂をもつ人々によって、アストレーデと呼ばれる宇宙の創造である』

だからね、ギルディ、古き神々の国は、トレア星にもないことになる。また、夕焼けの彼方にあるとしたら、どこの星からでも行けるかもしれないと、ぼくは考えたんだよ」

国王は、ガラスに額を押しつけて、気怠そうな声で云った。

「昨日、ライラにそれを云ったら、ライラは、ぼくが何か企んでいるといって、ぼくを責めるんだ。ぼくが何を企んだって、何もできないのを知っているくせにね。

彼女が羨ましい。ライラには、やることがある。新しい時代の王妃をめざして、ぼくの母に反抗して。はつきりとした目標がある。これから、ぼくの子供を生んで、その子を育て上げて。

ライラは、その子が生まれたら、ぼくのように歪んだ性格には

しないと宣言したから、その後も、宮廷の習慣と戦いながら、自分の腕の中で育ててくれるんだろっな。

だが、ぼくは何をすればいい。どれほど学んでも、ぼくには、それを生かす場はない。誰も、ぼくには期待しないだろっ。ぼくには母の作ったこの殻を割る力もない」

国王は、痛みに耐えかねるような表情で訴えた。

「陛下、今に時代は変わりますよ、きつと」

少年は、そう云うことしかできなかった。

「時代は変わっていくか。」

そうだ、時代は変わってゆく。

父王の時代は良かった。今よりは、はるかに」

国王の横顔が、赤く染まる。

「私が、こうしてつまらない時間を過ごしている間にも、誰かが家を失う。」

静かな夜の眠りさえ、奪われる者がいるというのに」

国王の深い悩みに、気の利いた言葉をかけてやりたいとは思ったが、すぐに適当な単語を選び出せるほど少年はまだ大人ではなかったし、また、軽々しく励ましを云えるほど幼くもなかった。

「ああ、ごめんよ。やっぱり体調が良くないな。言動がネガティブになってる」

少年は時折感じるのだが、国王は少年の知っている学院の同年代の生徒たちより、随分大人びて感じる時がある。また反対に、現実から完全に逃避してしまい、少年と王妃を巻き込んで、物語の人物になりきって遊ぶこともある。そのアンバランスさは、彼女の感じた苦悩に、形のちがう同色のものだろうか。

国王の顔が青くなり、額にうっすらと汗がにじむ。

よろけそうな膝を見留め、少年は国王の脇の下から王を支える。

「ガルディナーダ」

その一瞬、少年の耳元で、国王は少年の真の名、修道士名ではな

い本来の名前を女性形で呼びかけた。

「いや、ギル、あとで、また『ゴーストレイクの船乗りたち』のビデオを見よう。それから、ぼくが密輸業者になるから、きみは、帝
国親衛隊のパトロールになるんだよ」

少年は、国王をなかば背負うようにして、すぐそばの長椅子まで導いた。

「陛下、どうかお休みください。誰か呼んで参ります」

少年は、国王を長椅子に座らせた。

「それには及ばない。ただ、少し疲れたただだよ。夕べ、寝そびれたから……」

国王は横たわり、瞳を閉じた。

「陛下、失礼致します。如何なさいました」

監視モニターから見ていたのか、侍従の一人が入室してきた。

国王は上半身を起こしていた。

「余に構うな。ただ、昼寝をしたいだけだ」

少年が国王の顔を見ると、さきほどの状態が嘘のように、まったくの普段の表情に戻っていた。

「左様でございますか。」

もしお加減が悪いようでしたら、医術師をお呼び致しますが」

「余が昼寝などしたら、なにか都合でも悪いのか」

国王は、中年のその男にむけて、意地の悪そうな表情をした。

「いいえ、めっそうもございません。」

わたくしは、ただ陛下の御身をご心配して申し上げているのでございます。わたくしの不用意な言葉が、陛下のお気にさわりましたことを、深くお詫び申し上げます。

ミスチア皇太后さまが、古くから陛下にお仕えしておりました
マーミュシー老師の手足として、ともにお仕え申し上げるようにと、
直々にこの身にお託しなさいました以上、わたくしとしても陛下の
ご健康が気掛かりなのでございます。

至らぬ点は、ひらにご容赦のほどお願いいたします。これも尊
いお方の御身を案ずるゆえのことでございます」

額が床につくほど深く拝礼し、言葉自体はまったく宮廷作法に
のっとってはいたが、侍従には、その気まぐれによるであろう国王
の発言に対して、まったく譲る意志のないことがありありとしてい
た。

「母上にお伝えしてくれ。わたしの身は自分で処置いたしますので、
ご心配無き様にと。」

それから副女官長は？」

「はい、本日は夜勤でございます。夕刻からの出仕でございますよ
う」

「分かった。お前は下がれ」

侍従が去ってしまうと、再び国王は長椅子に横たわり、目を閉
じた。

薄暗くなった室内に、照明が点った。

「光量センサーがおかしいのかな。こんなに暗くなるまでつかなか
ったなんて」

そのとき、ただ黙っているのが不自然な気がして、少年はひと
りごとを漏らした。

窓に、カバードラインドが下りてきた。

書斎に行き、机上に散乱するメモと本を簡単に片付け、少年の
持ち物をバッグに仕舞う。

戻ると国王はすっかり眠り込んだ様子だったので、用意されてあ
った膝掛けを掛けた。

「ライラは、まだかな」

目を閉じたまま、国王は云った。

「ぼくを待たせておくなんて、まったく、命知らずの王妃だ」

力の抜けるような独特の言い回しに、少年はクスツと小さな声
をたてて笑った。それは国王が最近気に入っている、連続ビデオも
の主人公の独立密輸商人の得意のせりふを真似ていて、それがそ

のとき妙に似合っていたのだ。

「今度、生まれてきたら密輸業者の息子がいいな。それが無理なら、帝国親衛隊に入れる身分がいい」それは、国王の口癖だった。

それは、どちらも子供たちの共通のヒーローで、一般的な憧れの対象だった。何者でも無い者になりたい。本心はそれだろう。

それからしばらくして、王妃は、アールシャド帝国のティムジン皇太子より贈られた愛らしいカクテルドレス姿で現れた。『二ナ・ルーズヴェンダー』のブランド名で、銀河系で広く愛されるその服も、このラーフェドラス王国では、アールシャド帝国の最大商業都市カルバート星経由でなければ、ちよつと手にはいらぬ代物である。

少年は、正装用の修道会の制服である、生成りの麻地の上掛けを宮殿の自分の部屋で羽織ると、正餐の間で週に一度おこなわれる国王との晩餐に臨んだ。

晩餐が終わり、三人で国王の居間に戻ると、王妃は例によってミスチア皇太后について、少年にレセプションで皮肉られたことを話そうとする雲行きになってきたので、国王は先手を取って王妃に云った。

「ライラ、あなたが母上に何を云われたのかは、そのドレスを見てよくわかります。その前に太陽系連邦の大使のことを話してくれませんか。どういったお話を」

「まあ、それでしたらご自分でレセプションにお出になればよろしいでしたのに。陛下が、現在、太陽系連邦の行政改変期の歴史について関心をお持ちでいらつしやることをお話しいたしましたら、大使も大変に興味をもっておいででしたわ。シューレンディング家の方でいらつしやるから、この国では、手に入らない当時の状況にも、たいへんにお詳しくて。わたし、たいへん楽しく聞かせていただきましたのよ。」

あまりお話が楽しくて、ついつい、抜け出す時間が遅れてしま

いましたの。

「ごめんなさいね」

王妃は、昼のあいだ国王に対して怒っていたことを忘れているかのように、楽しみに次々と、その席での会話のことを話した。

「ところで、きのう、あなたに話し忘れたのですが、ティムジン皇太子殿下から手紙が届いていたんですよ。ルーサザン公爵が帝国より昨夜戻っていらして、今朝、礼拝に来て下さった司祭様がお届け下さいました」

「まあ、ひどい。黙っていらしたの」

「だって、あなたは、今日はとても忙しそうで」

「どなたのせいで忙しくなったのか、お考え下さいね」

「それで、殿下はお健やかに過ごしの。拝見させてはいただけないの」

「データは私の端末に。あとで見せてさしあげましょう。」

それによると、卒業後も帝国大学の研究室に籍を残しておかれるそうです」

「それは良かったこと。即位後の事をご心配していらしたから。」

陛下も本来、向学心の旺盛な方でいらっしゃいますもの。殿下の事、羨ましくうございましょう」

「そうだね。でも、私はここでも充分すぎるくらいだよ。」

あなたはどんなんですか」

「もちろん、できるなら帝国大学に行ってみたいとは思いますが。最近、太陽系連邦史を通じて、ようやくアストレーデ史の面白みも湧いてきたところですよ。太陽系連邦文化とアストレーデ文化の比較研究が行われている公的な教育機関は、現在、帝国大学だけです。もの。」

せめて、しかるべき教授をこのサラ・オーディンティオスにお招きして、ちゃんとした講義をしていただけたらいいですね」

「なら、手配させよう。好きなだけ学べるように」

国王の言葉に、王妃は和やかであった表情を変えた。

「今は結構です。」

今はそれどころではありませんもの。この宮廷の奥にいても、外の出来事は漏れ聞こえてくる。もっと平和な時代が来たら、私はその時にお願ひします」

「何故。」

王太后陛下は、私たちをこの奥の間に閉じ込めておくためなら、どれだけの事でも厭わないさ。それに甘えるのは、私たちの義務のようなものじゃないか」

王妃は、眉を曇らせた。

「陛下、昨日から、どうして私を悲しい気持ちにさせることばかりおっしゃるのです」

「気分が良くないんだ。きつとまもなく雨が降るんだろう」

国王は目を閉じて、ソファの背に頭を預けた。

「陛下、私の浮かれたお喋りがお気に障りましたら許してください。せつかくギルがいるのに、今日も喧嘩腰は嫌です」

王妃は云った。

「分かっています。あなたの気遣いを分かっているながら、素直に受け入れない『僕』が悪い」

「そのお言葉が、上辺だけのものでございませんですよ。」

陛下が、現在、窮屈を感じていらつしゃるのなら、なぜ、前向きにお考えにならないのです。使えるカードは一つでも多く手になさったほうが良くはございませんか？」

「そうだね。その事は、二人の時に話そう」

国王は面倒臭そうに、そのままの姿勢で話を打ち切ろうとした。「いいえ、ギルがいるから、今日はきちんとお話ししましょう。」

ギルだって、いずれは立派なラーフェドラス王国の貴族として、きつと陛下のお役にたつ日もまいります。三人で、アールシャド帝国のような理想的な国家をお造りになることをお考えくださいませんか」

王妃は国王の足下に跪き、その手を取った。

「もう、子供じみた逃避をやめる時間がまいりましたわ。

現実に対面して、力を貯えることこそ必要ですよ。

今のように、私たちから十重二十重に現実を隠してしまう者たちの姦計に乗ることはありません。陛下のお気持ちを弱らせ、氣力を失わせてしまう。

その果てにあるものをお考えください。

わたしたちにはギルがいるじゃないですか。修道会に力を持つルーサザン公爵も頼りになさいませ。修道会だって、このラーフェドラス王国を、私たちをこのまま放置しておくわけございませんわ。でなければ、何故の修道会から教師の派遣でございましょう。しかも、単なる先生ではなく、ルーサザン公爵の信頼篤い側近ばかり。これを頼りに、少しでもお立場を変えてゆけるのではないですか。ギルだって、じきに成年貴族としての立場を確立してゆくでしょう。しっかりとなさいます。」

国王は身を起こし、厳しい目で王妃を見返した。

「ライラ、あなたにそのようなことでギルや公爵に協力を求める権限はない。人生を選ぶのは、彼自身だ。そして、修道会も私にパイプを持つことは将来的な優位に繋がる、ただそれだけの政治的な理由に過ぎない。

いずれ、ギルだって自分の地位に相応しい役割を果たす場があるでしょうが、それはギル自身の自由意志が選択する事だよ。彼が何の目的で生きるかを。

最も忘れてはいけないことは、彼が、あらゆる王国に対して中立を守る聖アムルテパン修道会に属しているということです。

聖アムルテパン修道会が、私とあなたの自由を見捨てるのだと決めたのなら、彼はそれを選択せざるを得ないでしょう。彼が、修道会員であるかぎり。

友として友情を育み、信頼しあうことと、彼をその友情によって縛ることは別だよ。

そして、彼が三位の継承位を持つことを忘れてはいけない。

現在のラーフェドラス王家そのものを、修道会は見捨てることができる。

その道を選ぶことも、彼の自由のうちだ」

国王のその言葉に、少年は云おうとした。

「陛下、僕は……」

友人として忠誠を誓っているのだということを。二人にとって自分が必要な存在なら、そのために尽くすと。

だが、国王はその言葉を云わせなかった。

「修道士たる者が、軽々しく誰かに忠誠を誓うものではない。神の名の他に、君は頭を垂れるべきではない。

今は、誇りある修道士として、信仰にのみ忠誠を誓うのだ。

君の可能性の値打ちの高さを知れ。哀れみでそれを安売りする必要はないんだからな」

威厳ある眼差しが、少年を映していた。

「陛下、そのようなことはおっしゃらないで下さいませ」

少年が国王に云うべき言葉をさがし出す前に、王妃は絶叫にも似た声で懇願した。

「そのように、ご自分の値打ちを否定なさるのならば、わたしはどうなるのでしょうか。」

何ゆえに、陛下の妃となったのか。政略上の結婚とはいえ、わたしは、陛下を誇りに思っておりますのよ。

その誇りさえ、裏切りになるおつもりですか。

不用意に、ご自分を卑下なさるものではございません」

「あなたには、誇りがある。それは素敵なことでございますね」

国王は、長椅子を立ち、王妃を見下ろした。

「あなたは、素敵な女性になりましたね。ゆくゆくは、立派な国母として、国民の尊敬信頼を集めることでしょう」

少年は、そのなりゆきを、黙って見守るしかなかった。

「使えるカードは一枚でも多く手にするべきだと、あなたは仰いましたね。」

今、『僕』に許されている数少ない手札、それをもう一枚コピーしましょうか。

それは王妃としての貴方の力を借りなくてはなりません、その務めを果たすことは、あなたにとっても大事な義務。

ならば、ここで致しましょうか。なにぶん初めてのことで、うまくいくかどうか、いまひとつ自信はありませんが」

国王は、王妃の足元に付き、ドレスの上から少女の膝をそっと抱きかかえた。

「何を……なさいます」

突然の事に、少年は国王が何をしようとしているのか、その意図が図りかねた。

王妃の膝を割り、そこに身体をすすめて首筋に口づけをする国王の姿に、少年は目が釘付けになっていた。少年の心臓の音が大きくなり、息がつまるような思いだった。

「およろください」

王妃が逃れようと抵抗する。

「ギルのことを気にしているのですか。」

『僕』は一向にかまいませんよ。この部屋にはカメラも何もありませんが、『僕』とあなたの寝室は、絶えず監視されているのです。

『僕』があなたの部屋に通うようになれば、その睦言の一部始終が記録されることをご存じですか。不義の子供ではないという証明のために。」

ギルがいるのは、ちょうどいいではありませんか。もし首尾良く子供ができれば、それがわたしの子供であると証言してくれる。

そして、王子が誕生すれば、母上様もお喜びになり、『僕』の退位をお認めになるでしょう。そして、『僕』はその後見になればいい。母上よりは、少なくとも僕のほうが長生きできる可能性が高い」

国王は、王妃の顔を見て、幾分意地悪な笑みを浮かべた。

「そしてギルは、あなたの名誉をきつと守ってくれますよ」

王妃ロイエンライラは、国王の頬を手にした扇で叩いた。

白紙のようになっていた少年の頭は、一気に引き戻された。王妃の目にあるものが怒りではなく、深い悲しみであることは、その涙が物語っている。

「陛下のご身分をいいことに、甘えないでくださいませ。そうやって、せいぜい人を傷つけていらっしゃい。わたしは、あなたを遠慮なく打てる身分ですよ」

王妃は国王を振り解くと、部屋から出ていった。

「ようやくその気になったのに。」

女は難しいと聞いていたが、本当だな」

少年には、事もなげにそう語るシーヴァエドナ十二世の心が読み切れないでいた。

「『僕』は、彼女が好きなんだがね。いまだに、『僕』がどれくらいライラを愛しているのか、理解してくれないんだからな」

国王は、王妃が今まで座っていたクツシヨンのくぼみに頭をのせている。

少年は、さきほどの光景を黙って退出もせずに見ていたことが恥ずかしく、その部屋から退出しようと腰を浮かせた。

「ギル、明日、空いている時間はあるかな。ライラをまた怒らせてしまったから、明日は遊んでもらえそうにないんだが。ひとりで遊ぶ種も尽きてきたしね」

「そ、それが、まことに申し分けございませんが、午前中はアールシャド帝国の独立記念日なので、修道騎士団で式典に参列しなければなりませんし、午後は、学院の球技クラブの練習試合がありますから」

「やれやれ、ぼくと違って、きみはほんとに忙しいんだね」

国王は立ち上がり、部屋のすみの机に歩みよった。

「仕方がないな。なら、これをレイノルズ修道士に返しておいてくれないかな。さつき返そうと思ったのだけど、忘れていたんだよ」

シーヴァエドナ十二世は、三枚の文書ディスクを少年に手渡した。どれも、経済学に関係した太陽系連邦発行の書物である。

「これから、どうする。眠るには早いだろう。映画でも見る。それとも、ゲームでも」

本心は、国王も決して穏やかな気持ちではなかったのだろう。無理に場を取り繕うような態度であった。

「陛下、さきほどのような態度をなさるのは良くないと思います」

少年は、今度は躊躇わずに意見した。

「そうだね。あれは良くなかった。」

もっと、優しくしてあげれば良かったね」

思いを堪えている横顔だった。

王妃を傷つけながら、国王ほうが遙かに深い傷を負ってしまっているように少年は感じた。

「やっぱり、頭が痛いな。」

少し一人になる。退屈になったら呼びにいかせるよ。

ギルも少し休むといい」

第5話 王女シェラ・エスファナの諫言

少年が学院に帰ってしまい、その日は王妃が公務に出たので、国王は無為な時間を庭を散策して潰していた。

よく手入れされた芝の上で、日の光を浴びて目を閉じているのは心地良かった。

ほんの少しの間、眠りに落ちていたのだと思う。

日差しが陰ったのを感じて目を開けると、そこに少女の顔があった。

「陛下、屋外は寒うございませぬか」

国王は、眼前の少女のアシャが顔に掛かるのを手で払った。

アストレーデ教團の古い宮廷流儀として、上流の女性はアシャと呼ばれるヴェールで顔を隠すことが慣例になっている。だが、古式の宮廷装束以外では、昨今はあまり遵守されぬ作法ではあるが。

「妹君に陛下と呼ばれたくはないものだよ、シェラ。公式じゃないのだから」

そう云って、面倒臭そうに、また目を閉じる。

「東宮に來ると、王太后様の氣に障るのではないか。早々に帰るがよい」

「お兄様にしか話せないこともあるのです。聞いていただきたくて來ました」

少女は、素っ氣ない国王の態度に、氣分を害した風情で云った。

「そうか。なら、手短に話せ」

「では、率直にお聞きます。お兄様は、ライラ様を愛していらっしやいますの？」

突然の問いに、国王は返答に窮した。

「いきなり、何を……」

身を起さざるを得なかった。

「お兄様だって、宮廷に一夜の情けをお与えになる方がおいでと聞

きます。

王妃様に対して、気の毒とは思われませんか？」

国王の妹、王女シエラ・エスファナは十三歳。思春期真っ盛りである。

軽く咳払いして、王女の質問の意図を考える。

「どうして、そんな事を聞く」

「私とて、じきにアールシャドに嫁ぎますのに。」

皇太子殿下は、すでに懇意の方がおいでと伺っております。私はどのように自分の立場を考えればよいかと思ひまして、お兄様のご意見と今のお気持ちを聞きしたいのです」

「嫁ぐといつても、あの国では十七歳にならなければ正式な婚姻は成立しない。

シエラは女子修道会の預かりとなり、希望すれば帝国大学女学院に編入もできる。

皇帝家の人権も一般と変わりなく保証されているから。

それに、ティムジン皇太子は真面目な方だし、現在付き合っている方も妾妃として迎えにはならないそうだ。

学生時代の恋愛なんて、市井の人々にはほんの通過儀礼に過ぎないよ。学校に入ってクラブ活動とやらをするのと一緒に事なんだろう。住む世界が変われば、人間関係も変わる。

シエラが気にする事ではない」

それでも、少女の恐れを知らない純粋な瞳が国王をとらえたままだ。

「妾妃として、宮廷に入らないとおっしゃいまして、人の気持ちとは、そう簡単に変えられるものでございますの？」

つい先日まで心を通わせた方を、次の日から他人だとあっさり気持ちを切り替えてしまうような、そんな心根の方だとしたら、そのほうがもっと嫌です」

「シエラ、いいかい。王と王妃というのは、いうなれば、恋愛というよりは職業だ。」

我々は、その職業を課せられているに過ぎないんだよ。

だから、リオン皇太子は、あの性格でおいでだから、シエラがご自分との恋愛対象ではないと思えばお前はお前なりの気持ちの許せる相手を探したからって、何か仰る方ではないよ。割り切ってます」

「たとえば、お兄様。

私がもし、ルーサザン公に嫁いだフェイレンリーリア王女のように、アールシャドに嫁ぐのは嫌と云って、ダリルディーンを連れてきて、これと結婚すると宣したら、お兄様は私たちをお守りくださいますか」

「……ギルと結婚するって？

無理だな。ギルは、修道士として修道宣誓をしている。現状ではだれとも結婚できない。余としても、アールシャドとの盟約は大事だからな。今は国情的にもお前を保護してやれる状況にはない。我慢して嫁げとしか云えない」

国王は、説得に別の理屈で応じる妹がやや疎ましく思えたが、王妃の事を思えば、その理屈はいささか愛おしく思えてくる。

「いいかい、シエラ。

なぜ、正妃が必ず古家の者か、おまえは理解しているか？

それは、王や皇帝が、アストレーデを担うからだ。

アストレーデを担うという事は、国の痛みを背負う事に他ならない。

その意味と重みを理解できるのは、古家の者しか居ないのだ。

だから、アールシャド皇帝の皇帝たるを支えるのは、皇后しか居らぬのだ。

それが古家たる者の義務。

理解せよ」

それは、兄としての言葉ではなく、王としての言葉であった。言葉の重みの違いを理解したのか、王女はもう理屈は捏ねなかった。

「それでは、お兄様。

お義姉様にお優しくあられて頂きとうございます。
ただ、お義姉様お一人を思われるべきだと」

「お前は、人に誠実を望むのか。

人には、業というものがある。

思うように生きられるなら、人は迷いはしない。

……憶えておきなさい」

国王は、少女の頬に触れた。

「お兄様、それを逃げるというのです」

「お前は辛辣だ。

やはり嫁にやるべきではないのかもしれないな」

王女がかくも執拗に、王と王妃の關係に誠実を求めるのは、少女らしい真摯さのみの事ではない。

国王と王女の産みの母、ミスチア王太后の在りようが大きく影を落としているのに他ならない。

「云っておく。余は、王妃にのみ誠実な男だ。それは誓えるよ。

そして、お前は、私も、王太后様も許しはしないのだろう。

母上は、寂しいお人だ。この国を憎んでおられる程に」

ミスチア王太后が、この国を緩やかに死に至らしめる理由。

王太后が嫁いだのは、十三歳の事だった。故国に、幼い純愛を交わした相手が居たが、アストレーデのしきたりに従い、自分を捨てて嫁いできた。

そして子を成したころ、ミスチア王妃を守るべき前王は、ひとりの妾妃を宮廷に入れた。

素性の難しい相手だったので、前王は余計に思いを深くして、王妃への配慮を疎かにした。

ちょうどその頃、王女フェイレンリーリアがファーマール王国への輿入れを嫌がり、ルーサザン公爵の元に身を寄せる事件があった。

ちょうど自分の境遇と重なった王は、王女とルーザン公爵との婚礼を許し、そしてその代償として、ファーマムール王国からの盟約破棄を受けることとなり、両国の関係は混乱の中に叩き落とされた。

ミスチア王太后は、王の妾妃を迎えた事による裏切りよりも、フイレンリーリア王女の我が儘が許された事に、大きな衝撃を受けた。アストレーデによる婚姻の条約は決して違える事を許されない掟。

その我が儘が許されるなら、ミスチアは王妃としてラーフェドラス王国になど嫁いだりはしなかったものを。

その一件から、父王と母王妃の関係が軋み始め、そして母王妃がまだ幼児だったカーレルを抱きしめることが無くなり、そして、息子と母の溝も深くなっていったのを憶えている。

母は、国王であるカーレルを国政の場に出さぬのは、決して王としての能力を認めていないからではなかった。認めているからこそ、王の王たるを許さぬのである。

最初の無垢な恋愛を奪われ、そしてまた楯となる王すら奪った宮廷と国を、ミスチア王太后は愛する事などできなかったのだ。

その事実自体は、王女は知っている。だが、そこにある人と人の深いところをどれだけ理解しているのか。

「お前にとって、この国はどう映る」

「国は、個人の持ち物ではございませんわ、お兄様。

人の情の事など、国の民には関係ございませんもの。

お母様も、お兄様も、国を愛していらっしやらない。

ご自身をのみ哀れんでいらっしやる。

王妃様が泣きはらした眼をなさって、普段より濃いアシヤを被って公務にお出かけになったのをご存じですか。

私はお支度の間に参上し、この前頂いた髪飾りのお礼にまいりましたの。

お義姉様がお勞しい。

お一人で、この宮廷をあるべき形に支えていらつしやる。

王妃様をお守りするのには、お兄様の務めです。

国を憂うより他に何もなさらないのなら、せめて王妃様にだけは、お優しく、支えて下さらなくては」

まだ幼い姫とばかり思い込んでいた国王は、王女の言葉に打ちのめされた。

わずか十三歳であつても、嫁ぐ日を前にして、国王の公務を王妃が、その公務に重なる王妃の公務を王女が務めるうちに、深く思いを巡らせ、見識を養つていったのだらう。

「若輩の身で、出過ぎた言葉でございました、陛下。

不愉快と思われましたら、どうぞ処分を下さいます。なれど、陛下は聡明なお方。

これを一族の末席の者の言として、お心にとめて下さいましたら幸いです」

王女は威儀を正し、上位の者に対する跪礼の姿勢で深く頭を下げた。

国王は立ち、君主としての立礼をもつて受けた。

「……王女の言葉は正しい。

先ほどの言葉は撤回するよ。

皇后に相応しい見識と知性を持っている。

その言葉、余は肝に銘じておこつ」

国王が手を伸ばし、妹を立たせると、建物のほうから人影が寄つて来た。

「ご歓談中、失礼致します」

離れた場所で跪礼した彼女は、昨年より王女の教育係に加わった帝国大学教授カレン・メイベル女史である。

アールシャド帝国の前皇帝のブレーン兼上級女官として伺候した人物であり、本来なら皇太子の教育係の一人に加わるべき人材である。それを敢えて王女の許に寄越したのは、帝国の宮廷儀礼に明るく、そして短期間で帝国議会に皇后と認めうる最高の教養を叩き込

める女官職の女性は他に例がない。

普段は、王女自身が西宮より出ることが少ないので、その細身の黒の連邦風パンツスーツをトレードマークにする女史の姿を見るのは、数える程にすぎない。

「王太后様が、国王陛下のお邪魔になりはしないかと仰せです。

至急、西宮にお戻り下さいませ」

「王太后様のお迎えだ。

早くお行き、シエラ」

「ええ、そう致しましょう、お兄様」

王女が、メイベル女史の許に駆け寄った。

「メイベル教授」

国王は女史を呼んだ。

「そなた、優秀な教師であるな。

王女の言葉により、余の国の姿の外からの姿が見えた。

余は成さねばならぬ事、成しては成らぬ事の判断が付きかねていた。

だが、その件について、深く考えるべきなのだろう。

正しい見識を王女に与えた女史に深く感謝する」

王女に遅れて、その方に進み出た国王は、女史に云った。

「勿体のうございます。この身はただ、事実ばかりをご教示したに過ぎません。

ご理解なさったのは、あくまで王女様、リン＝レーゼタークの聡明さゆえでございます」

女史は宮廷儀礼に従い、深く頭を下げ、答礼を述べた。

「シエラ。お前の兄は莫迦者だ。

この宮廷に、余を支える者が居ないとばかりに思っていた。

余は、何も見えてはいなかったのだな」

「ええ、お兄様は、お莫迦様です。

それでは、ご機嫌よう」

王女は女史を従えて、スタスタと去って行った。

幼い妹の意見に目が覚めた思いだった。

いや、幼いからこそ、率直で迷いもない。

国王はその純粋な心に報いたいと思った。

現在の宮廷と施政を変えるための最も大きな権力。

昨日、王妃にそれを求める可能性を否定しておきながら、その方法が最も効果的であり、そして、他に手が思いつかない。

昨夜、王妃に扇で打たれた後の痛みを思い出し、自分の頬を撫でた。

あの痛みが愛おしいと思う。

第6話 修道騎士団長の献身

その半月後。修道騎士団総司令部ビル。

作戦指揮室では、早朝午前四時の招集であるにもかかわらず、その一報を受けて、まだ三十分足らずであったが、すでに主だった将校らは集合していた。

その中を、総司令官ラヴィロア・ジャザイルが入室してきた。

「指令総監、概況を説明せよ」

総司令官に従い、総司令職の片腕たるバウトミス元帥がモニターの前に立つ。

「昨日二三：〇〇、シエルダル方面において、ファーマムール王国軍によるラーフェドラス領への侵攻が確認された。」

現在、シエルダル星域座標ポイントC9902域をR6609地点に向けて移動中。

シエルダル星が破砕されて以来、該当聖域には特に主だった戦略的目標物は無い。

強いていうなら、シエルダル星至近にある廃棄された鉱石惑星が存在する。

相手の戦力は三個艦隊。

我が騎士団は現在、ベルドール星域、ファラード星域の守護駐留艦隊に移動の用意をさせており、六時間以内に出動可能、本部所属艦隊は二番、八番艦隊を出動用意、三時間以内に出動可能の状態で手配しております」

「というわけだ。」

今更該当星域に戦略的価値は無い。

無駄な派兵と云わざるをえんな」

ラヴィロアは断定した。

「アーサー。今回のこの行動を、君はどのように分析する？」

話を向けられたアーサー・レイノルズは起立した。

「もし、この派兵に本当にラーフェドラス領への侵略目的があるとするなら、鉱石惑星に補給基地を設け、侵略拠点にするつもりがあるものと判断してよろしいかと存じます。」

しかしながら、国境を挟んだ至近に、すでにファーマムール軍の前線基地がありますので、補給基地を建造することにどれほどの意味があるものか、疑問は生じます。

一方、ラヴァンドル星域に多量に火器が持ち込まれているという噂もございます。

当方でも、ラヴァンドル星域向けの密輸船から、ファーマムール王国製と思われる外殻装甲を押収した複数件の報告もあります。

今回の侵攻が、ラヴァンドル、カレルナ星域におけるテロリスト支援の陽動策の可能性もあるのではないのでしょうか」

「真の狙いは、ラヴァンドル星域、カレルナ星域と？」

「その可能性を加味して対策を立てるべきでは、と申し上げます」

「なるほど、該当星域は王都から四日だからな。」

相手の指揮官は掌握しているか？」

「艦船に青龍紋を確認致しました。アギール公爵の麾下と」

「アギール公爵？」

あの傭兵部族は、今、サラディン閣下の元にいたな」

エプタプラム公爵サラディン・サリーム。

ファーマムール王国の王弟にして、ファーマムール王国軍元帥。

公私ともにラヴィロア・ジャザイルとは因縁浅からぬ相手である。

「あれは私を何だと思っているんだ」

ラヴィロアは星域展開図を見上げて云った。

「アーサーの分析に対して、何かある者は？」

作戦立案部長が手を挙げた。

「この時期の当該星域でのテロ支援に、どのような意図があるかを推察しませんと」

「意図？」

それは、この騎士団を忙しくさせようという魂胆に決まっている

じゃないか。

……そうか」

ラヴィロアは何かを得心したような表情をした。

「修道会としての立場は決まっている。

シエルダル星域に守護すべき人民が居ない以上、騎士団が派兵する理由はないよ。

とりあえず、至近のベルドル・ファリード星域を増強しておけばいい。出立は急ぐ必要はないだろう。明日で充分間に合う。

そして、現在出撃用意の整っている艦隊、二番、八番をラヴァンドル・カレルナ星域に派遣しよう。

第八番艦隊司令官はソレル修道士でしたね」

「はい。こちらに控えております」

初老の修道士だった。

「関節の具合はどうですか？

先週、駐留先から戻ったばかりだし、もうしばらく療養しては頂けないだろうか。

率直に言えば、新しい指揮官に実戦経験の機会を与えたいのだが」「私に異論はございません。いずれ引退を迎えるのが定めでございます。

大司教のご判断に委ねます」

「ありがとう。あなたには中央司令部で幕僚総監のサポートをお願いするよ」

ラヴィロアは立ち上がった。

「アーサー・レイノルズ修道士」

朗とした声が響く。

「きみに、三位守護修道士の権限を与える。

第八番艦隊総司令官として、至急ラヴァンドル星域惑星エリザに赴いてくれ。

君なら二日あれば行けるだろう。十年ぶりの神業を私に見せてくれないか」

「私でお役に立てますか」

「元太陽系連邦軍の二翼の片割れに出来ないことがあるつか。しかも、きみは再生二世体だろう。」

再生される前も艦隊司令職に居たはずだ。ここに居る者のおよそ倍は実務経験も豊富だ。

それに比べれば、私なんて子供のようなものだろ？

優秀な幕僚に囲まれているからこそ、私の無能っぷりがどうにかバレずに済んでいる。

エドを今出すわけにはいかないが、今回は君ひとりで充分だろう。今回の目的は戦う事じゃない。テロリストどもを威嚇して、拳兵の意志を失わせることだ。

テロリストであろうと神々の愛される命である。それを守るのも騎士団存在意義であれば、修道宣誓をしているキミがその献身の命を受けないわけにはいかないだろう。

行ってくれるね。

今回は速度が無いと意味がない。他の誰にも出来ない事だ」

ラヴィロアは、アーサー・レイノルズの前に行き、重ねて依頼した。

「では、艦隊司令官の職分、謹んで拝命致します」

アーサーは跪礼して、その命を受けた。

「宜しく頼む。エドには身の回りのもの持つてくるように私から連絡しておくから、君は出撃準備に専念しておくれ。さあ、行ってこい。新しい制服は君のロッカーに入れてある。徽章を間違うなよ、三位だぞ」

アーサーは、一瞬表情を凍りつかせた。

「ラヴィ、あなたって人は……」

背後で総監が呟いた。

ラヴィロアは、視線でアーサーに行くように促した。

「まあ、いかなる状況にも備えておくのが管理職の仕事だし」
呆れた相手に嬉しそうな表情を向ける。

そして背後を振り返り、別の艦隊司令官に向いた。

「ルードル少将、あなたも二番艦隊で至急カレルナ星域にお願いします。」

アーサーを助けてやってください。あの宙域はあなたの庭だ。経験に期待します」

指名されたルードル少将も跪礼してアーサーに続き退出した。

「それで、大司教、シエルダル星域はいかがでしょう」

「そうだね、総監。」

うちの第一手の布陣はこれでいい。何かあっても、すぐに艦隊の移動は可能だから、これで様子見しよう。

それでシエルダルんだけど、侵略されているのは、ラーフェドラス王国だ。国軍はこの情報を手に入れているかは分からないが、軍務大臣と国軍総司令官の両方に警告をするに留めよう。

うちでやるのはそこまでだ。

援助要請がきても、地方の治安維持のため、割ける戦力が無いと断って。

どうせシエルダル星域は、私が関わらなければサラディンには戦略的意味はない。

無駄な戦争はしないさ。

それから、各星域の反体制活動組織の活性化には充分留意するよ
うに。

以上、この場は解散。

あ、そうだ。アーサーを派遣してしまつたら、陛下にご教授して差し上げることができないな。仕方ない、今日は私が参上しよう」

マーブリック大司教ルーサザン公爵ラヴィロア・ジャザイル。

聖アムルテパン修道会において、三十代後半の若年にして修道騎士団長、騎士団総司令官、修道会守護院長マーブリック大司教の三席を兼任する希有の存在である。

修道騎士団長は、ルーサザン家の名誉職である。ゆえにその地位

は血統が続くかぎり継承され、ラヴィロアは若干七歳で公爵位を継承すると同時にその地位に就いた。が、それはあくまで古家としての家門の名誉職であるから、当然実際の指揮権は無い。修道騎士団の統帥権は騎士団総司令官が持っている。そして、修道騎士団は修道会の守護院に属し、あくまで守護院長の権限の下にある。

つまり、軍事的側面から総司令官の権限があり、修道会騎士としての意義を守るために守護院長の権限が分割されている。騎士団長の役割は、本来は両者の緩衝役である。

ゆえに、修道騎士団の修道会内での職名である守護院長たるマブリック大司教の座と、ルーサザン家の名誉職である騎士団長の座、そして実質的な軍隊としての統帥権を持つ騎士団総司令官の三座は、本来は兼任されるべきものではない。

その兼任が許されているからこそ、彼は異色の存在なのだ。

ラヴィロアはオフィスからエドワードに連絡をとり、それから私室に戻った。

地方の教会を統べる古い友人ユルジサンドをこの数日部屋に泊まらせていた。

友人は起きて待っていた。

「起こしてしまったようだね。まだ早いよ」

「直に、礼拝の時間になります。」

「……何かありましたか」

ベッドに上体を起こした友人は、ラヴィロアの制服姿に気づいて云った。

「大したことじゃないよ、ユーリ。」

サラディン閣下の定期訪問。もちろん相手をして差し上げるつもりはない。

心配はいらない」

室内は足下に点る常夜灯のみで、お互いの顔は暗く、表情を判別することもできない。

ラヴィロアは上着を脱いで傍らの椅子の背に掛け、キッチンに行き、熱い蒸しタオルを取ってくると、広げて温度を確認し、友人の両手と顔を拭いた。

「何か飲む？」

僕は、熱いコーヒーが欲しいんだけど」

サイドテーブルに置かれた手袋を取り、友人に嵌める。

常夜灯に浮き上がるその指の皮膚はケロイドに覆われ、動かすにも多少の不自由さがあるようだ。

「そう云われると、同じものを頼むしかないじゃないですか」

「だろう。面倒臭がりなんだよ、僕は」

タオルを取りに行った時に、コーヒーメーカーをセットしていたのである。話している間に、室内に香りが満ちてくる。

「アーサーをラヴァンドルに派遣した。」

命じてから思い出したんだが、カーレル陛下にご教授する日だったんだ。

でも、僕は神学と軍事理論しか分からない。どうしたものかな」

「宮廷女官のあしらい方でもご教授して差し上げるとよろしい。」

あなたにはそれがお似合いだ」

「うん、否定はしない。僕が十七の時は、毎日年上と遊んでいたものだがね……。」

今更僕がご教授申し上げる必要は無いと思うよ。きつと」

ラヴィロアはキッチンからカップを二つ持ってきた。

片方のカップは、持ち手が特殊な形状になっており、蓋がついていて、独特な飲み口がついている。

「まだ熱いから気をつけて」

ラヴィロアは、持ち手を注意深く相手に握らせた。

「ジョーイのように馴れてないから、不具合があったら遠慮無く云ってくれ。」

昼間は慈善院の上級生に世話を命じてあるから」
エストリダ大司教ユルジサンド・エプタプラムは、事故により半

身の自由を奪われていた。その上、体中を、顔さえもケロイドが覆い、人前に出る時は人工皮膚を装着しなければならない。

ラヴィロアの最も大切な友人なので、修道会本院に滞在するときには、ラヴィロアが時間の許す限り付き添い、介護を厭わない。そして、二人だけのときは、素顔を晒させる。

ユルジサンドは、ファーマムール王家、サラディン元帥の双子の弟である。

十年前、サラディンによって行われたエストリダ自由交易惑星への大気变成弾の使用。

大気の組成を化学変化によって作り変えてしまう悪魔の兵器。それにより、

肉親によってもたらされたその悲劇の贖罪に、自らタリアンファットにあるエストリダ人キャンプの教会主となった。悲劇の直後、ユルジサンドは自らの身分と氏名を明かし、シエルダル難民の中に身を投じた。その際の民衆の怒りの渦中で、暴行を受け、件の身体となった。

自らの罪として、以後一切の整形及び身体機能回復手術も受けてはいない。だが、修道会はその人格の清貧さと献身を認め、彼にエストリダ大司教の任を与えた。

「カーレル陛下の件は、準備が進んでいるんですか」

「ご老体の猊下には、総教主職に専念していただいて、ご負担を減らされるべきだと進言致しまして、他の教主の方々にも承認を得た。帝国教会には、マーブリック大司教の後任を選定していただけるように、先の帝国訪問の際に要請済みなので、急な話にしては、手続きは早く進んでいるよ。

下準備は二年も前に取りかかったのに、ようやく先週陛下よりのお召しの要請とは。

今の私は、鈍感な男と付き合っている乙女のような心境だよ。

勝負下着の用意もばっちり、メイクも研究し尽くして、何ヶ月も前から準備しているのになかなか告白して来ない、みたいな状況で。

一声、お声を掛けて下されば、いつでも動いたのに」

「ルーサザン家の政治力で、強引に宮廷に入ってしまったえば良かったのでは」

「引きこもりの坊やが、自分で動く気にならなければ、何も解決しないよ。」

私が宮廷に入り、議員の一人として政治に関わることはつまり、国王陛下のブレーン、場合によっては後見としての座を得ることだ。

しかも、国王陛下は当然国軍の統帥権を持つておられる。

王国の宮廷に伺候する宮廷人たちは、この意味を充分理解しているはずだ。

私自身は、宮廷に入る旨みは全然無い。国際的な政治力は、修道騎士団の三席を預かる身分で充分確立されている。

そして、軍の指揮権でいえば、アストレーデ全域をカバーする修道騎士団の長である私に追隨できる者が他に居るか。

その至高の席を、降りてやろうというのだ。あの坊やのために」

「つまり、それは献身だと仰りたいのか」

「そうだねえ、ルーサザン公爵としてのプライドだね。」

まあ、王女様の一件で、私は先王陛下に大きな借りがある。

その時の借りを、生きているうちに返せるだけ返しておこうという事さ」

その時、ドアのベルが鳴った。

「エドだろう、入ってきてくれ」

ラヴィロアは、ベッドの周りのカーテンを引いた。

エドワード・ストレイカー少佐が入室してきた。

「アーサーには会ったかい？」

「全く、突然出勤なんて、あり得ませんよ」

エドワードは、ベッドの方に気づいて一礼した。

「君たちがハウスシェアリングしていて良かったよ。いきなり命令しても、荷物はキミが作ってくれるからね。」

それに、アーサーの人事は元々予定にあったものだ。少しばかり早くなつたに過ぎないよ。

近々に大量人事異動を敢行するつもりなんだからね。もう教主猊下の元に書類は送つてある。

ただ、その件で至急、きみに動いてもらいたい。今回の移動の件が漏れている気配がある。君の下の内規監査局を使つて調べてくれないかな。

漏れてしまったものは仕方ないし、それによつて私の計画が修正される事はないが、今後の為には不安材料の根は刈り取つておくべきだと思う。

恐らく、修道会内、騎士団内部にファームムール王国に内通する者があるようだ。しかも、上層部まで食い込んでいるとしたら、私としたことが迂闊な話だよ。

今回のファームムール王国の侵攻は、私をこの席に縛り付けておくための策だとしたら、サラディン閣下の狙いは、極めて政治的な意図があることを考慮せねばならない。

まったくサラディン閣下も修道会というものを知らなさすぎる。

騎士団は私ひとりで回しているわけじゃない。特に私が不在でも、在るように在るのが組織だ。これくらいの事で、私の仕事を邪魔したつもりなんだろうが。

いずれにしろ、短慮な奴。

エドワード、私の意図はわかりますね」

「心得ております。早速取りかかります」

「宜しく頼む。そして、もし私に報告できない事態が生じても、君は君の判断で動いてかまわない。私が以前命じた事は、何があつても最優先だ。

わかつたね」

その言葉には、深い意味があつた。

「はい。それでは、これで」

エドワードは足早に去つて行つた。

ラヴィロアは、明るくなりはじめた山の稜線に目をやった。

「さて、そろそろ支度をしようかな、ユーリ。」

礼拝の時間になるよ。

明日は、バルドリイ修道士に送らせるよ。彼はタリアンファットの教会に用があるそうだから」

ラヴィロアは質素な亜麻の修道服を取ってきた。

清貧で知られるエストリダ大司教の僧服である。

ユルジサンドの着替えを手伝い、肩から大司教章を掛ける。

そして、自分も司教服に着替えるが、あまりにも上質かつ壮麗な織り生地で、ユルジサンドとは全く対照的である。

そして、起床の時間を告げる鐘が鳴る。

「貴方は、……私が何故ここに来たか、わかっていますか」

ユルジサンドの声色が変わった。

「分かっています、我が主よ。」

変革の時代、この国の理を別の理に変革する必要を神が感じておられるなら、私はその杖として働くまでの事。

そして、私のささやかな野心と、所詮人の身の愚かなるものに過ぎぬプライドなど、神々の前には単なる頑迷に過ぎないのでしょうが、それでこそ私という存在なのです。

そうではありませんか、我が『神』よ。

そして、それは、貴方を宿すその男の意志には反することでもある。

修道会とアストレーデの戒律に違反する事ですから。

そして私は、この席を立てば、もう私の意志では時を止めることはできないでしょう」

ラヴィロアは跪礼を捧げた。

ユルジサンドの表情が変わり、夢から覚めたような顔をしている。「今、『神』が降りましたか？」

ラヴィロアは答えず、親友の身体を抱き上げ、車椅子に座らせた。

「ラヴィ、あなたは何を命じられたのです」

再びの問いに、ラヴィロアはようやく答えた。

「時の神のご意志は、アストレーデの神々には無いと。以前もそう答えたはずだが。」

さて、そろそろ行くよ。時間だから」

第7話 ルーサザン公爵家の慣例

少年は午前の授業を終えると、学院の門で待つエドワードの車に乗った。

総司令部ビルの上階は、総司令官の簡易住居とオフィスがある。ルーサザン公爵家は、市街地の郊外に城をもっているのだが、多忙な役職であるのでほとんど司令部のビルに泊まり込んでいる。それは、騎士団が政治的不安定な状況に関与し、収拾を図っているという事なのだろう。

現在三十五才。騎士団長となって早くも三年。いかに大貴族としての加算があるうと、その技量と、何よりカリスマ性は本人の実力である。

少年のような大きな子供がいるとは思えないほど、若々しい見えるその容姿は軍人としては小柄で、少しもそれらしくない。どう見ても、稼業である宝石商のほうに相応しい。

ルーサザン公爵領は、貴石の産地ラブル鉱石惑星を所有する。この星でのみ産出可能な幾種類かの宝石と貴金属を独占するため、それによってもたらされる富は多国籍企業のものと同じく劣るものではない。現在、鉱石惑星の経営も含め、領地の管理運営は全て家令であるザリム・ウィラートによって行われている。

有能さにおいては名実ともに評価されるマーブリック大司教だが、少年の知る父親は少し頼りなげで、やや怠惰。恐らく気を許せる肉親である少年の前でのみ見せる姿なのだろう。

少年がオフィスに行ってみると、秘書の士官が仮眠用の私室にいるという。部屋の扉を開けると父親は、ベッドの上に靴をはいたまま寝そべっていた。

「お父様。お久しぶりでございます。靴のまま、そういったことをなさるのはいけません。ベッドが汚れてしまいます」

「ゆづべ、ここに寝かせてもらえなかったので、罰を与えているん

だよ。仕事ばかりでろくに眠らせてもらえない。せつかくエドワードが帰還したのに、このままでは飲みにも出られそうにない」

父親は、起き上がると、少年と同じ漆黒の髪をかき上げた。

「先月、雑誌の取材があつたんですが、出ていたでしょ、『シンガポール・ジャーナル』の最新号に」

「あの、ポーズを決めて映っているやつでしょう。あんなつまらない仕事をやっているから、お休みになる時間がなくなるのだと思いますけど」

「ひと月ぶりに会つたのに、あなたは父親を説教するのか。あなたの父親をやりはじめて十五年になるけど、会つたびごとに可愛くなる。背丈だけはいっこうに伸びる様子もないのに。」

まったく、私の王女さまはなんで女の子を産んでくださらなかったのか。それに、この小憎らしい子供を私ひとりに押し付けになられるなんて、まったく。

まあ、あなたも、もう少し自発的にここに訪ねて来るべきだと思わないか。たまには、親子としての会話も必要だろう。帝国への出張から帰還して三週間近く、夜遊びもせずに仕事一筋に頑張ってきた。息子のきみに会って早々、そんなことばかり云われたのでは悲しいな。

それに、あの雑誌の仕事は、正式な修道会の広報活動です」

父親は立ち上がり、少年を抱きしめた。

「元気だったかい、ギル」

少年は、父親が普段は少年に対して、女の子が欲しかったとか、可愛くない子供だとか云って、始終不満を訴えるくせに、本当は、過敏なくらい神経を使っている。

少年が誕生したとき、父親はまだ二十一歳であった。それから三年後に、少年の母であるラーフェドラス王国の王女リーリアが亡くなつてから、修道学院に預けられる年頃に成長するまで、彼は少年をひとりで育てなければならなかった。

乳母がいたとはいえ、やはり親としての責任も果たさねばなら

ず、まして、王女を亡くした後間もない間は、やはり自分以外の者に完全に預ける気にはなれなかったのだ。

したがって、艦隊勤務から地上勤務に配属の変更を出願し、当時、修道宣誓前で少佐だった彼は、作戦立案室に配属された。このことが結果として以後の昇進に直結した。

少年が、修道学院に入れる年齢にも達したときに艦隊勤務に復帰したが、そのときの階級は中佐で、艦隊司令官付き作戦立案官の肩書きで、現在のオールシャド帝国中央教会修道騎士団総司令官のロハルト元帥のブレーンの一人となることができた。

当時はまだ少将の地位にあったバウトミス中将とともに、自治権を失ったエストリダ星域で実績を積み、以後は急速に昇進し、ついには、上官であったバウトミス少将を追い抜いて、修道騎士団の頂点に立つことになった。

「エストリダ大司教がお見えですよね。」

僕も一度お目通りしたいと思いますが、お願いできませんか」

少年は、これまで一度も父の親友であるエストリダ大司教には、直接会ったことはなかった。大聖堂での礼拝の時に、遠くから見ただけである。

献身と清貧の人として名高いエストリダ大司教が、身なりからして対局に位置する父と親友であることがかねてから不思議でならなかった。

「小さい時に、対面させたはずだけど、憶えていないだろうな。」

今日は、総教主猊下の許においでになっています。

まあ、そのうちに会う機会もあるだろう。修道会に居るかぎりには少年は、父親に何度頼んでも、適当に誤魔化されエストリダ大司教になかなか対面させてもらえなかった。今回も、どうやら、その機会が無いらしい。

「どうして、いつも会わせていただけないんですか？」

「それはね……、私にとっては、君はまだ、私の息子でいて欲しいからだよ。」

いずれ嫌でも、その時は来るから」

答えになっていない。

「ところで、実は、あなたにどうしても話さなくてはならない事がある」

父親は、ややばつが悪そうな顔をして、話を変えた。

「ルーサザン公爵として、少し、政治的な話を」

父親は少年を会議テーブルの席に座らせた。

「急なことで、あなたに相談なしである事を決めてしまった。公爵家の人間として、私の決断を了承して欲しい。」

私は、来週一杯をもって修道騎士団を去ることにする」

自分も少年の斜め前の椅子に座りながら、サラリと云った。

「この数日のあいだ忙しかったのは、その引継ぎの事務作業に追われていたんだよ。」

もう、大体は済んでしまったけどね。

だが、このことはまだ機密事項に属します。知っているのは、総教主猊下と最上級においでの方々と、後任のバウトミス元帥、あとは一部の移動に関する部署の職員ぐらいなものですから」

それは、少年には思いもよらない言葉であった。

「どうしてですか、なぜ、修道騎士団をお辞めになるんですか」

「国王陛下から、アーサーを通じてご依頼がありました。」

陛下は、ずいぶん心を痛めていらっしゃる。現在の、この国のことに。

賢い方でなければ、これほどお苦しみにならずに済んだらうに。あの方は、生まれながらの名君の素質を持って来られた。それが、あの方を追い詰めている。もう少し大人に成られれば、ほどよい狡さも身に付けられようが。

あなたは、陛下にとって、唯一の心からの友の立場にある。

その付き合いから、陛下の、お心の本当のところをどう思う」

少年は先日あった出来事を、すべて正直に話した。王妃との出来事も隠さずに。

「いささか時期が遅すぎているのかもしれないが、最善は尽くそう。陛下ばかりでなく、王妃様の御為にも。」

元老議会議に空席ができたので、私は元老議会の議員になります。古くからの慣例で、ルーサザン家の肩書きでは元老議会の議席を持つことができない。

だから、究極の裏技を見つけたので、それを行使します。

もし、私の用意した裏技がダメなら、あなたの祖母の実家はベイデノン侯爵家で、元老議会議に優先議席権を持っています。私があなたに譲位して、ベノデイン侯爵になればいい。その時は、騎士団長職をお願いするよ。

他の役職は、それから頑張って精々野心に燃えて奪い取ってくる
といい」

父親は、暫し沈黙し、少年の顔を見つめた。

「本当は、あなたが十八歳を過ぎたところに、ベイデノン侯爵の名を名乗らせようと思っていただけだね。私はこの通り若いから、なかなか引退する時は来ないだろうし、あなたは国王陛下の友人として、信頼の厚い立場にある。」

陛下をもっとも理解しているあなたが政治家となつて、国王陛下の片腕として働くことは最も自然な事だ。そして、私も当分は修道騎士団にすることができでしょうし、私が引退する頃には、あなたにもルーサザン公爵家の継承者ができているだろうからね。

それが私のプランだったんですが、事態はそれほど悠長に構えてくれなかったようだ。

ロツティカンス黒貴爵が元老議会議から除名されてしまったのは、ミスチア皇太后派の権力が大きくなりすぎて、正常な議会議運営は望めないのは明らかだ。

元老議会議入りは、総教主猊下からも私に以前から打診があつたんだ。

修道会が、治安維持のためとはいえ、これ以上この国単独の内乱に関与することができない。内政干渉になるから。だから、やっぱ

り陛下に国軍の統帥権を回復してもらうことが、事態の解決には最も早い道だ。

私の影響力のあるうちに、騎士団と国軍の協力体制を整えることができる、現状は二ヶ月で正常化させる自信はある。

修道会には、テロリストを断罪・拘束する権限がない。だから、治安維持を有効にするためには、国軍としての立場が必要。

解るだろう。

だが、問題は、そのあと宮廷の掃除にかかっても、きっとそれは終わらない」

「何ですか？」

「まだ、確定的なものを得ていないので、迂闊な憶測はできない。

しかし、いずれにしろ、物事は単純ではない。

このルーサザン家が宮廷に関わるという事は、宮廷に在る者の利権を明白にできる立場に在るという事。ルーサザン家が議席を持たぬのは、修道騎士団という国境を越える権力の中核に携わる古家であるゆえ。

だから、いかに弱体した国力を回復するため、とはいえ、あまり長く国政に関わるのも、他古家や諸国との関係において、好ましいことではない。

今回、私が騎士団を辞めるといっても、ルーサザン公爵である以上は、騎士団長の職務はついて回る。

よって、今回のことは、国王陛下からの自発的な要請による必要がある。以前からの根回しで、情勢の回復の期間のみ、国政に参画する事の承認を、各国元首クラスに対して得てある。治安維持の回復と、王権の所在の明示、施政レベルでの遅滞・混乱の正常化、それを二年で行い、あと暫定猶予一年、の計三年程度という線で合意はとりつけられた。

三年間で、国力の安定化を継続する政府機関の確立が私に求められる事だ。

そして、立っているだけの騎士団長でも、いきなり全ての権限が

消失するわけではない。本人に価値がある限り、修道会はそれに釣り合う力を貸す。

現在の宮廷に、それを喜ばぬ勢力は確実に存在するし、現実には阻止する行動に出るのは肝に銘じておくべきだ。

しかも、我が一族に大した利もない。

だが、今がラーフェドラス王国の領土の一隅を与えられた公爵家として、動くべき時だと思う。

理解してくれるね」

父親は、少年の頬に触れた。

「それで、あなたは、このことをどう思う」

「お父様のご判断は正しいと思います。」

修道会の力とはいえ、一時的にでも議会内が同じ方向に向くことになれば、それだけでも国王陛下のご心労は、いくらかでも和らぐのではないかと思います。

ですが、ぼくの本心では、修道騎士団をお辞めになるのは、とても残念です。

三座の徽章をつけたお父様が、ぼくにとっては誇りでしたから」「わかった。あなたの誇りに応えられるように、元老議員としてもベストを尽くすよ。

それから、修道士を辞めるつもりはないから、勘違いしないように。

そして、あなたの身边は、今後も修道会に守っていただかなくては。

さつきも云ったように、敵が山のように増えてしまう。あなたの身边も危ない。来月から、アールシャド帝国中央教会の配下にある修道騎士団の修道学院に転入することになる。

反ミスチア皇太后派の勢力は全て味方にしたいところだが、急進派が第三位の継承権を持つあなたを国王に担ぎ出そうとしている。何のためにお前に修道宣誓をさせたんだか、ちっとも理解してくれない。

実習航行は、ストレイカー少佐の乗艦をアールシャド帝国国境方面哨戒任務に配置するように、予定を組み直しておいたので、予定どおりにそれに乗り組むことで実習に参加したものと見成す。

それから、今日の午後から、もう宮廷に出入りする必要はない。

アーサーを艦隊司令官に任命したから、今日から私が教師として参上する。私が行けば、あなたまで行く必要はないからね。

では、そろそろ食事に行こう。恒例の家族行事を今年はまだやっていないんだよ」

父親は、椅子の上にかけてあった元帥の階級章と修道騎士団総司令官章の略章と大司教位章のついた制服を身につけ、鏡のまえで簡単に乱れた髪をなでつけると、少年と一緒に直通エレベーターで、本部ビルの地下レストランに向かった。

食事が済んで、少年を基地のグラウンドまで送ってきた父親は、別れ際に云った。

「急なことばかりで、あなたも戸惑うだろうが、私も、あなたを他に預けるのは心配だよ。アールシャド帝国でのあなたの身元保証人は帝国議会議長たるフランツ女公爵だから、そういった危惧は愚かなんだろうが」

そして、少年は父親と別れ、試合に臨んだのだった。

第8話 王権の所在（前書き）

設定ミスが見つかり、前の部分を訂正しました。
問題の星域はエストリダではなく、シエルダルでございます。他の
点も多少在りますが、大筋には関係致しません。

第8話 王権の所在

「……今回のファーマムール軍の侵攻は、まだ本国国境には達しておらず、シエルダル緩衝星域に留まっております。現在のところは陛下の国軍にて国境線の防備を整えられたら充分対応できるのではと考えます。」

よって、国軍最高司令官閣下に派兵の進言は先ほど致してまいりました。

恐らく、近々に陛下のほうに上奏にお見えだと存じます。

本来なら、閣下からお耳に入れるべき件ではございますが、僭越を承知でご報告申し上げます」

マーブリック大司教ラヴィロア・ジャザイルは、国王を訪ね、まずその件について話した。

「情勢はわかった。」

マーブリック大司教のご配慮、感謝する。

しかし、おかしい事だな。余は、今初めてリアルタイムで情勢を報告された。

私のところに来るのは、いつも事が終わった後なんだ。艦隊クラスの移動の際には、国璽と王印の両方が必要だが、いつも国璽のみ王太后様のところで押されて、行動が開始されてから、書類が回ってくる。

余には事後承諾で構わないと思っているんだろう。

まだ若輩者だから、摂政無しには国事は行えないのだろうか」

国王は、左中指に嵌められた王印指輪を示した。

その書斎の、いつもはアーサーの座っていた席に座るラヴィロアは、今日は騎士団の制服ではない。生地こそ上質だが、純白の僧服に徽章ひとつ付けていない。

「一つ、気になる事がある。ファーマムール王国の狙いは、新王の

擁立ではないのか」

国王は率直に云った。

「さて。どうぞでしょう。」

第一、現状で、ファームール王国は、我が国に対して領土緩衝域以外の接点を持たない。テロリスト支援がありますが、それが王家といかなる関係があります。

それにもし、陛下を廃し、新王の擁立を行うとして、新王にアストレーデが開示されたという証明を行うためには、修道会の承認が必要です。もし、可能性があるとすれば、ファームール王国は、自国の王国教会教主にその承認を行わせる以外にはないが、それは帝国の承認は降りないでしょう。

現状で、ファームール王国教会は騎士団も含め、総教主に恭順しておりません。

それなりの理由があるので、我々もその件に関して、ファームール大司教に責を問うことができないのですが、どちらにせよ、総本山の意向を無視して成立する話でしょうか。動機はあっても、要件が揃わない。現状で干渉してくる事はありません。

それに、私がまもなく参ります。

何か意見があれば、わたしが対応しますから、ご心配無く」

「余は無力で王としては拙い。

……これ以上、国がすさむのは辛い……」

国王は、微かな声で呟いた。

それは、心の緩む一瞬だった。建前と、演技の日々の中で、ふと緊張の糸が切れてしまったとも云える。本心など、自分の心情など無視してきた。誰の前でも、そう振る舞えるものと思っていた。まあ、ギルに対してだけはある程度仕方がなかったけれど。

マーブリック大司教は、国王の前に膝を付き云った。

「陛下は誰を手駒にしたと思っておられるのか。

私がここにこうして参上した以上、何人の命も国政の犠牲にはさせません。」

まず、陛下が、軍務大臣閣下と、宰相閣下をお召し下さい。

陛下はこの国の王でいらつしやる。その権利をお持ちです」

ラヴィロアの厳肅な言葉が、国王の魂を射貫いた。

「侍従長を」

国王は、控えの侍従に命じた。

「陛下、両閣下が参りますには、相応のお時間もかかりましょう。

よろしければ、陛下、ともにこの情勢下において命を散じた者のために、追悼の祈りを捧げたいと思いますが、グランヴィル大聖堂を開けては下さいませんか。

そこに両閣下をお召しください」

「余も、その機会が欲しかった。そのように手配させよう」

間もなく駆けつけた侍従長は、その白い僧服姿をルーサザン公爵と認めて、顔を青ざめさせた。

この部屋まで取り次いだ者は、その姿があまりに普通の一修道士姿だったため、あくまで講師役のアーサー・レイノルズと同列ほどの講師とばかり思い込み、その正体まで気づかなかったのである。

「侍従長、まず、グランヴィル大聖堂の鍵を開けよ。」

そして、大聖堂にベリード元帥と、クラレスガラン伯爵を招集し、今回のファーマムール王国への対応措置について至急尋ねたいと申し伝えよ」

侍従長は跪礼した。

「ですが、王太后様の許可を得ませんと、両名の招集は」

「陛下は、ただ、施政者として対応策について尋ねたいと仰っている」

ラヴィロアは、口を挟んだ。

「正式な沙汰は、もちろん摂政である王太后リン＝ガーレンディラも交えた席で成される問題であるが、私が今日、ご教授する者の立場として参上した以上、国としての対応を臣に問うた上で、講師である私に考察の一助をと望まれている。

ご考察のみの事に、リン＝ガーレンディラに許可を得る必要があ

るのか」

その威厳ある態度に、侍従長はただひれ伏し、そして了承の意を表して慌てて駈けて行った。

「……慈悲垂れたもう水の女神ルーリアによって、地に恵みの満ちたることを。」

太陽の神ライドによって、地の明るく照らされたもうことを……」
マープリック大司教によって唱えられる祈りの言葉が、壮麗な礼拝堂の天井に響く。

色ガラスで飾られた天窓から降る光によって美しくきらめく祭壇の前で、大司教は諸々を清める聖句の後に、慰霊の詞を唱えた。
祭壇の前に頭を垂れ、祈りの姿勢をとる国王は、幾分気持ちが晴れたのか、少し安らいだ表情をしていた。

「陛下。御身は王でございます。」

御身は、この国を統べるに足る教養と見識をお持ちのはずだ。
あとは、実践なさるだけ。

御身の王たるを示し、この国の憂いをお払ください」

礼拝を終えて暫しの後、ベリード元帥とクラレスガラン伯爵が礼拝堂に入ってきた。

「国王陛下には、ご機嫌麗しく」

二人は並んで王に対する礼を捧げた。

「祝福を差し上げます。こちらに」

ラヴィロアは、両名を祭壇の前に跪かせた。

「ベリード元帥に戦神タルラの助力のあらんことを。」

クラレスガラン国務大臣に、法の神である天空神アードの助力のあらんことを。

また、その施政の健やかならんことを」

祭司の印を切り、祝福を終えた。

「ルーサザン公爵閣下がおいでとは」

国務大臣が早速云った。

「国務大臣閣下には、こうして対面するのは初めてでございますね。マーブリック大司教ラヴィロアでございます。」

レイノルズ修道士を派遣したので、急に誰かを選定するわけにもいかず、上司である私がまいりました。

元帥閣下には、お久しぶりでございます」

その時、国王はおもむろに発言した。

「国の大事だ。諸侯らの挨拶はよからう。」

早速、今回のシエルダル緩衝星域へのファームール王国の侵攻の件について尋ねたい。

まず、国務大臣、この一件について、王太后様には進言してあるのか」

「はい。」

元帥よりの報告を受け、つい先ほど書類にしてお渡し致しました」
「母上は、すぐに書類をご覧に成る性質ではいらつしやらない。」

伯爵は、その事を了承していよう。なぜ、口頭にて報告をしない」

「王太后陛下は、ただいま午睡中でしたので」

「国土が侵略の危機に際しているのに、午睡のほうが大事と云うか。では、元帥に問う。」

今回のシエルダル緩衝星域において、我が軍が当該星域にできる勢力を述べよ」

「行程半日の至近のベルードル星域に駐留している艦隊数およそ二個艦隊。」

行程一日では併せて七個艦隊であります」

「ならば、敵は半日在れば駐留艦隊を持つ要所に到達できるという事だな。」

即時の派兵行動が必要なのではないか。その手配はどうなっている」

「至近星域には、修道会の駐留艦隊が居りまして、その支援があれば当該星域での防衛ラインは一応確保できるものと思います。」

よって、我が軍は、示威行動として、ベルードル星域の艦隊をシ

エルダル星域に展開すればよろしいかと」

国王は、元帥への質問を一旦中断し、ラヴィロアのほうを見た。
「ベルードル・ファラード両星域には、騎士団としてすでに支援のための艦隊を手配しております。」

シエルダル星域に、国軍の当該星域における全勢力を投入なさっても構いませんよ。

防衛の任をお任せ下さるなら、背後の守りに最善を尽くさせましょう」

ラヴィロアは云った。

「ですが、敵の勢力は三個艦隊。先ほどは報告するのを失念しておりましたが、勇猛で知られるアギール公爵の麾下の艦隊ですが。」

我が騎士団ですら、正面切って相手をしたくはありません。

ですから、ベルードル・ファラード星域に敷く防衛ラインに迫って来ない限り、当方は一切相手は致しません。

僭越ながら、二個艦隊で足りますか」

その皮肉めいた眼差しに、元帥は憤慨した様子で云った。

「それは、公爵、お言葉が過ぎますぞ」

「そうですか。それは失礼致しました。」

修道騎士団は、神の恵みをうけたる人々の命を守るために存在致します。人の居住せぬ場所まで守るのは、いささか教理に反してしまふ。

だが、国軍の兵士とて、尊いアストレーデの神々の愛したもうた命であります。

危惧があれば、申し上げるのが修道の徒の使命と思し召し下さい」

修道士らしい、慈愛あふれる笑みを両名に向ける。

元帥が、奥歯を噛みしめて感情を抑えているのが見て取れる。

「何をしている、国務大臣。」

元帥とともに直ちに王太后様の居室に赴き、一刻も早く事態を報告するべきではないのか。

余も、しばらくしたら西宮に赴くこととする。

派兵の件は即断が肝要。王太后様の寢所であろつと、国の一大事に体裁を繕う必要があるうか。左様に申し伝えよ」

兩名は、国王の命を受けて退出した。

その瞬間、国王はふーっとため息を漏らした。

「お出来になるじゃないですか。

出来るのに、なさらないから、リン＝アールシャーナがお叱りになるのです」

「ギルが話したのか」

「ええ。あれはあれなりに、お二人のことが気がりなのです。

修道会に放り込んだまま、あまりに外の水に触れさせないできたもので、上流貴族の師弟とはとても思えぬほど、純粹に育つてしまつた。権謀術数とか、陰謀とか、腹芸とかには無縁な子供です。ご無礼を重ねてきたと存じますが、どうかご容赦を」

「いや、ギルは、私の宝だ。

この宮廷にあつて、最も信頼に足る友だから」

「それは、光榮な事でございます。

ですが、あれは、もう宮廷には参上致しません。

近々、帝国教会に預けます」

その言葉を告げられて、国王は少し寂しい目をした。

「そうか。

エリンラーデ公爵の實力というものを、こうも見せつけられては、宮廷の者も黙つてはおるまいな」

「おわかり頂けましたか、私を手駒にするという事がどういう意味を持つのか」

「ああ。権威というものの格の違いを理解した。

今日、余の王権を支えたのは、ルーサザン公爵と、背後にある修道会の権威。

それを、余自身の権威として、自己の王権を支えるのが当座の目標だな」

「左様でございます。

さて、ついでしたから、リン＝ガーレンディラに挨拶しておき
ましょう」

第9話 修道会の戒告

第9話 修道会の勧告

国王が、西宮内に足を踏み入れるのは、二年ぶりにもなろうか。西宮と東宮の狭間にあるホールを渡り、大理石の色の変わる廊下に入った。

ラヴィロアは、騎士団長の制服に着替えて威儀を正した。

それは、これから王太后と対面するための自らの立場の変更を意味した。

これまでは、一介の修道士であり、国王の講師役である。しかし、三つの徽章のついた制服を着ているということは、修道会と騎士団の要職に在る者として、対面することを示していた。

国王が、騎士団長を従えて西宮の回廊を行くのを、行き違う宮廷人たちは、瞠目しつつ跪礼して控え、そして身を起こして後ろ姿を見送った。

「ご機嫌うるわしゅう、国王陛下」

薄いアシャで表情も露わな王女シエラ・エスファナは、笑顔をもつて兄を迎えた。

「お前には感謝する。シエラ」

「お礼など結構です。」

お母様、とても慌てておいです。

さすがにご寝所はお気の毒ですから、どうぞ絵画の間に。会見の用意は、とうに整っております」

王女に導かれ、国王はその部屋に通された。

「それでは、王太后様に、お兄様のお越しをお伝えしてまいりましょう」

王女は女史を伴い、退出した。

国王は上座に座して王太后の現れるのを待った。

そしてしばらく後、西宮の主、ミスチア王太后リン＝ガーレンデ
イラが、数名の大臣と側近を引き連れて現れた。

「これは国王陛下。ご息災であられたか。」

母に顔を見せてみよ。まあ、ご立派になりました」

深紅の宮廷装束に身を包んだ王太后は、十代にして国王を産んだ。
よって、現在でもまだ容色の衰えもなく、アシャで表情を伺うのが
叶わぬにしても、艶然とした姿は、男を誘うような雰囲気放つて
いた。とても亡き先王の意志を守らんとする者の様子には見えない。
恐らく、王太后は現在も、女としての繚乱の時を得ていることを示
した。

「王太后様もお変わりなく。お美しゅうございます」

その母子の挨拶に、どれほどの感情が流れているのか。それは決
して情というものではないだろう。

「政など、臣と妾に任せておればよいものを。」

陛下には、まだまだ学んでもらわねば成らぬ事が山ほどあるとい
うに」

王太后は、シエルダルの一件についての報告が云ってないわけは
なかった。

だが、派兵の話はおろか、政治的な話題を一切行うつもりがない
のか、まったく関係のない事を切り出そうとする。

「余が至らぬことは充分承知しております。」

だが、もう机上で学ぶ時ではありません。

実践を積む時がきたと余は思います。

王太后様は左様に思われませんか」

国王は、凜とした眼差しを王太后に向けた。

「ファーマムールの侵攻の件、時期を逸しては取り返しの付かぬ事
態もまいりましょう。」

派兵手続きを致したいのですが、この場で早速取りかかるのは如
何でしょうか」

「たった今、派兵の手配を整えるように、摂政の権限で元帥に命じ

たところである。

間もなく、国軍幕僚らが軍議を終え、内務大臣、軍務大臣うちそろって派兵の正式な書面をもって来よう。国王陛下、ここでお待ち頂ければ、妾が先王よりお預かりした国璽を押しましようゆえ、陛下の印も下さいませ。

じきに手続きは終わりました。

それとも、ルーサザン公爵に何事か教唆されましたか」

王太后はルーサザン公爵に向いた。

「ルーサザン公よ。

陛下に何を吹き込まれた。

陛下はまだ十代ではござませぬか。そのような年端のいかぬ子供に、かような大事を摂政の同席もなく進言するとは」

「十代、と申されますか、リン＝ガーレンディラ。

陛下は、もう十七歳でございます。

歴代のアストレーデの国々の王、皇帝で、摂政を立てず施政に当たられました方々はいくらも居ります。

私が普段講師の任に当たっている者より伺うところでは、もう充分な教養と知性をお持ちになっておられるようだ。せめて、政の場に身を置き、見聞と経験を積まれる段階ではありませんか。

摂政の務めは、王に変わって王権を行使することではないはず。後見として、王によって出された案にご助言申し上げること。

印を押せぬほど稚き頃、あるいは病床の身に在られますなら仕方ありませんが、国璽も王印も、本来は陛下の御手にて印されるが理ではございませんか」

「されど、妾が摂政たる任を先の国王陛下より賜ったのは事実。

その意向を曲げると申すか」

「それでは、王権の所在について、修道会として問うべき所存がございます。

この国のアストレーデは、リン＝ガーレンディラに下されたのか、それとも、まさしく国王陛下に下されたのか。

アストレーデ聖典の下された国々においては、国事はアストレーデによりて成し、アストレーデの求めるところに政の果ての姿を見るものでございます。

リン＝ガーレンディラにおかれましては、そのアストレーデの指示す道を、国王陛下にお会いするでもなしに、どうやってお知りになるのか。

本日、私が見聞きする限りにおいて、リン＝ガーレンディラはアストレーデを蔑ろにしておられる。

王権は、アストレーデが開示された王が国事を行う権利。摂政はそれを補佐する役に過ぎないのではありませんまいか。

如何でございます、リン＝ガーレンディラ。

御身がなされております事は、アストレーデ教徒として、あつては成らない所行です。修道会は、アストレーデの理を預かる者として、その行使を正しく戻さねばならない」

激烈なオーラを持ってそれらの言葉はルーサザン公爵より放たれた。

「正しく戻すと申されるか。

ルーサザン公爵家は、ラーフェドラス王国の政治に関わらぬのが暗黙の了解のはず。

その貴卿が、宮廷で王に虚言を吹き込む事こそ罪ではないか。

その禁を犯せば、他国が黙っておりますまい」

ルーサザン公爵は、勝ち誇った笑みを一瞬口の端に載せた。

「それでは、総教主猊下よりの言葉を申し上げます。

聖アムルテパン修道会は、ファーマムール王国の統治の能力について疑問を示し、宗主国の権利の移管を考慮しております。

修道会は巡礼者も多く、その本山を置くには、この国はあまりに治安が悪すぎる。

このまま宗主権をもって、序列を他国の上に置くことは出来ません。

これは、各国元首・教主にも了承を得ている事。

アストレーデによる施政の遵守が叶わぬのであれば、宗主権を返上頂きたい、との事でございます」

「なんと」

ルーサザン公爵の言葉に、王太后は言葉を失った。

室内が、静寂に包まれる。

その静寂を、またルーサザン公爵の言葉が破った。

「もちろん、再考の余地はございます。」

それについても、各国元首・教主の皆様にご了承済みです」

ラヴィロアは、国王の方を向いた。

「再考の余地とは、ラーフェドラス王国教会を再建することです。います。」

かの王国教会は、この国が宗主権を取得する以前に存在致しました。

宗主権を得ると同時に、王国教会は修道会に吸収され、その教座は総教主が兼任する事になっております。

そして、王国教会には、一議席、優先議席を元老院より与えられていた。

その権利を行使したく、お願い申し上げます。

ですが、現在、王国教主を兼任する総教主は老体でございます。

とても議員職は務まりませんゆえ、王国教会を再編し、王国教会教主を分離し、宮廷に置くことに致しました。

そして、その教主に、議席をお与え頂ければ、と存じます。

そして、修道会より派遣された新教主が政治に関与し、施政の場としての王朝の権威と国情の正常化に協力致しましょう」

王太后の、深紅のマニキュアときらびやかな宝石に彩られた手がわなわなと震えていた。

「それは、修道会の内政干渉ではないか」

アシャの内側より、苦渋に満ちた声がした。

「その内政干渉を招いた者は誰かまだ解りませんか」

国王は、王太后を見据え、きつぱりと云い放った。

「国と民の苦しみをわすれ、国を軽んじ、我が身ばかりを哀れんできたのは、この王と、摂政である母上ではございませんか。」

余も母上も、罪は同じ。

我らは本来死をもって償わなければならぬほど、この国を荒廃させている。

その事に、お気づきではないわけがない。

宗主権を返上しても仕方ない事をしたのです。

これは、むしろ修道会の温情と見るべきではありませんか」

真実を述べる国王の声は、静かだが毅然として重みを帯びていた。

「ルーサザン公爵、いえ、マーブリック大司教。」

余、国王シーヴァエドナ十二世は、自らの所行を悔悟し、修道会の温情に感謝するものである。

よって、修道会の戒告を受け入れ、早速、修道会に一議席を与えることとする。

また、宮廷内に王国教会を設立する事については、早急に議会に諮り、承認を得た後に修道会への返答することとする。

内務大臣よ、即時、書面にて議会に提案せよ。

明日の議会の緊急議題とする」

王太后の側に控えていた内務大臣は、王太后の方を見た。

王太后は、心ならずも、といった態度でアシャの奥からルーサザン公爵を睨み付け、頷いた。

「御意、国王陛下」

内務大臣は、国王に対して跪礼を捧げた。

「それでよろしいか、マーブリック大司教」

「早速のお返事、痛み入ります。

以上の件、さっそく持ち帰り、総教主にお伝え致します。

それでは、リン＝ガーレンディラ。

国璽をこの場にて国王陛下に返上なさいますように」

「ルーサザン公、妾が信用出来ぬと申すか」

「リン＝ガーレンディラは、王権の所在につきましての問いに答え

ていただいておりますし、国璽をお戻しになるとも仰っております。

何をもって信用するといふのです」

ルーサザン公爵の弁舌の矢は留まるところを知らない。

「まず、王権でございますが、王権はアストレーデの開示された王の元にある事、これに異論はございますまい。

次いで、シーヴァエドナ十二世陛下には、正しくアストレーデが開示されており、修道会もこれを確認しております。

よって、王権は、シーヴァエドナ十二世陛下に在る、と、お認めなさいますか」

「それくらい、とうに認知しておる」

「では、王権の行使の道具たる国璽と王印による承認は、国王陛下が執り行つものである、それをお認めになりますか」

「認めよう」

「では、摂政は、国王の王権を補佐する者であり、代行する者ではない。

これもご承知でございますね」

「……心得よう」

「では、早速この場で国璽をご返上頂きたい。

ご信頼せぬわけではありません。総教主猊下の命を負う者として、それを確認する義務があるのです。ご理解頂きたい」

王太后は、渋々手にした扇で侍従に命じた。

程なく、侍従が戻り、手にした箱を王太后に手渡した。

王太后は箱を手に立ち上がり、国王の前に置いた。

「陛下。国璽を返上致します」

「本日まで、大儀でありました、母上」

国王は、箱の上に添えられた王太后の手に自らの手を重ねた。

王太后は驚いて、思わず手を引いた。

国王の表情が、一瞬悲しげに揺らめき、そして瞬きする間にそれは戻った。

「マーブリック大司教。余は、国璽を受け取った。

これでよいな」

「はい、陛下。」

本日、この場にて私が口頭にて申し上げました事は、明日、正式な書面にて確認して頂きたく、お願い申し上げます」

ルーサザン公爵は跪礼を捧げた。

「そして、陛下。」

修道会として、一つお願いがございます」

「何か」

「私は今週をもって、騎士団の司令官職及び、マーブリック大司教職を辞すことになります。そして、このたび新設されるラーフェドラス王国教会の教主の任を、私が拝命致します。

称号はグランヴィル大司教位を賜ります。

もし、宮廷内に王国教会を設置する運びとなりましたら、グランヴィル大聖堂を下さいますように。

あれは、元々は王国教会のものでございます。

それから、私がルーサザン公爵のままラーフェドラス議会に関わります特例を、諸国の王、教主各位により承認頂いた期限は三年。以後は、いかなる事情の元にせよ、国政の場から退く所存でございます」

それは、ラーフェドラス王国の再生の先触れとも聞こえた。

これにより、シーヴァエドナ十二世の治世は落ち着きを取り戻すはずであった。

第10話 それぞれの波紋

国王が東宮に戻る途上、大ホールと東宮の境の廊下で、王妃が恭しく頭を垂れ、これを迎えた。

「王妃、出迎えとはどうした」

「おめでたき事ですのに、お一人占めなさる気ですか」

王妃の声が明るい。

足も止めず廊下を進む国王の後ろに、やや急ぎ足で従う姿は、軽やかに弾むようであった。

国王の居室に戻り、女官らを下がらせて二人きりとなった。

王妃はアシャを外した。可憐な顔が露わになる。

「リン」レーゼタークよりルーサザン公爵の来訪は伺いました。

宮廷内も、その事で取り乱しておりま

す。国王は、手にした箱を王妃に示した。

「国璽だ。

私を取り戻す術を持たなかったのに、公の手にかかれば、たった二時間あまりの時間で、国璽の返上と、王権を明確にした。

早く、王妃の進言を受ければよかったのだらう」

国王の声は、僅かに動揺していた。

それは、王権を回復した喜びよりも、何か、深刻な懸念をもった様子に王妃には見えた。

「誠に、ルーサザン公爵の権威たるや、恐ろしいほどでございます。

あの王太后様に詰め寄られるなど」

国王の顔は青ざめる。

「その事ではない。

公はやり過ぎた。

あれほど、急激に王太后一派を追いつき落とすような事をするなど、反発が目に見えている。現実には、母上は激昂されておられる。

国璽を返上する際の儀礼に過ぎない私の謝辞を、撥ね付けてしま

われそうになるほど」

国王の手が微かに震えている。

「考えてもみる。

果たして修道会は、常に、王の味方であろうか。

そして、余には、アストレーデは開示されていても、その指し示す道が見えないのだ」

国王は王権を回復し、この東宮に引きこもる暮らしから、国政の場へ踏み出すことになる。しかし、その道にある真の闇が、国王を飲み込もうとするように感じる。

王妃は、国王の足下に座り、その晴れない顔を覗き込んだ。

「アストレーデ聖典の、王に対する同調率は王によってそれぞれと伺っております。

聖典の表紙の題字のみを読んで開示となさった方もあります。まして、まったく同調者が居らず、継承位によってのみ、継承された代もございます。

陛下は、この書が国の悲しみを伝えると仰っておられたではございませんか。

充分、王権を担うに相応しい開示かと存じます」

「そうだな。聖典については。

だが、もし母上、あるいは他の誰かが修道会の関与に対し、過激な手段を講じることがあれば、どうなると思う」

国王は天を仰ぎ、両手で顔を覆った。

「宗主権の返上ごときでは済まない」

国王の中には、その言葉に続く出来事が鮮明に予測できた。

「王妃、僕は、王として最善を尽くす。

もうその事では揺るがない。

だが、修道会とて、決して信頼を置きすぎてはならないという事は肝に銘ずるべきだ。現状で、修道会無しには、国土の安定は不可能。

肝心なのは、その修道会との駆け引きだが、あのルーサザン公相手では、いかに弁舌を尽くしても太刀打ちすることはかなうまい。やはり我々は、お互いをのみ信頼し、頼りにするべきなのは変わらない。

王妃、余に尽くしてくれ」

「はい。王命でございますか」

「王命であり、そして、僕個人の願いでもある」

国王は、王妃を抱き寄せた。

『貴方の一生を貰う。』

僕と、この国に対して』

耳許で囁かれた声は小さく、そして震えていた。

「もう、迷われることがございませんように。」

この身はもう、国と陛下、そして、カーレル、あなた自身に捧げておりますのに」

王妃は誓い、そして頬にキスをした。

「では、さっそく、夕刻からのルーフェンタール記念病院の慈善パーティーにご列席いただきとうございます。」

戦災孤児の収容されております病院でございますの。

陛下のお越しとあれば、さぞ寄付も集まりましょう。

早急にお支度あそばせ」

王妃は明るく笑った。

国王は、陽の光が雲を払ってゆくように感じた。

たとえ、どのような危惧があろうと、日常は粛々と訪れる。

王妃の照らす先を見れば、きっと世界は明るく美しい。それを作り、守ろうと思う。

一方、西宮。

ミスチア王太后は、自室に入るなり手にしていた扇を床に叩き付けた。

詰め込まれた宝石が外れ、落ちる。

「あの男、どこまで妾を愚弄すれば済むのか」

迎えたシド・エルバンは扇と外れた宝石を拾い、化粧台の上に置いた。

そして、王太后の後ろに立ち、頭のピンを取りアシャを外した。

「お怒りのご尊顔も、誠に美しゅうございます」

耳許で囁く。

「シド、お前まで愚弄するか」

「めっそもございません。リン＝ガレンディラ。」

この身が命を捧げてお仕えしているお方に対する侮辱を許せぬのは、私とて同じでございます」

その、低く凄艶な声は王太后の背筋を撫でる。

「あの男は、妾には許されなかった無理を、やすやすと通した男。」

妾にそれが許されるなら、引き替えにこの命さえ神々に投げ出したものを」

白い手袋の手が、王妃の深紅の上衣に掛かる。

「ならば、この身が命を捧げましょうか」

「お前の命など、月の女神の供物にしかならぬ。」

妾は、あの男にこの宮廷を荒らされたくはない。

あの口先三寸さえ無ければ、こちらとて反撃の余地もあるう。

ひとまず、アレを宮廷に入れなくしてしまえば、修道会が後任を送り込むまで暫しの猶予も出来る。

この宮廷に巢食つておる輩にも、修道会が乗り込んでくる事を厭うておる者はいくらでもいよう。

その者たちを焚きつけよ」

「御意、リン＝ガレンディラ」

シドは、王太后の首筋に口付けた。

マーブリック大司教は、総教主棟にその日の王宮での事を報告に参上した。

「ラヴィロア。お前が七歳で私の前に現れてからこちら、全く一日

として落ち着いた日を迎えたことは無かった」

総教主ザエル・ラジアンドはため息混じりに云った。

「確かに、昨日、王国教会の件は私と、エストリダ大司教、そしてお前の三人で確認をした。

しかし、それは正式な手順を踏んで、正面堂々と引導を渡しに行くべきであつた。

そなた一人で、しかも、国王陛下のご講義に伺候したついでにやるとは、如何なことが。思上がりも甚だしい」

ラヴィロアが怒らせた相手は、王太后ばかりではなかった。

「お言葉ですが、猊下。

戦は先手必勝でございます。

不意打ちで相手が面食らっているうちに、次の手を積みかける。攻撃の手を緩めず、相手の混乱に乗じて、一つ、また一つ、戦利品を相手から奪い取る。

定石ではございませんか」

涼しい顔で持論を展開するある。

「それが、理を預かる者のする事か」

「理を預かる者が、神々の御心に最も叶う者ではありません。

私の持論は、七歳の時、猊下に問いかけた時と、全く変わっておりません。

修道士など、神の前では、最も卑しき存在でございます。

その卑しき者が、非道を行う者を陥れる事など、何を今更」

厳しい叱責に悪びれる様子もない。

総教主ザエルがまだ四位の典礼司祭であつた頃、学院の教師を兼任していた。その頃、七歳にして公爵位を継承し騎士団長となったラヴィロアと、一時期、起居をともにしたことがあつた。修道会のしきたりと振る舞いを教育するためである。

その時、何のきっかけかは憶えていないが、まだ幼いラヴィロアがザエルに問うた。

「神々が最も愛されるべきは、日々の運、不運、晴れたり曇ったり

のことに一喜一憂しながら、神々の目により良く映ろうとう事など考えず、自分の仕事に真面目に打ち込む者たちではないのか』と。

どれほど真面目に仕事に打ち込み、せっかく目的に近づこうと積み上げたものが、ほんの一瞬の不幸で崩れ去り、無に帰す。

それでも、また、真面目に仕事に打ち込み、せっせと積み上げていく。

神々の名を唱える暇もなしに。

その者たちが神の前に最も尊くあるべきであり、常に神々に気に入られようと美しい文句を神々に捧げ、祈るしか出来ない修道会など、本来は最も卑しくはないのかと。

自らが神であれば、日々肅々と耐える者をこそより深く恵もうとさえ語った。

「ゆえに、我々は身を慎まねばならぬ。

最も卑しく在るというのなら、正道を常に歩いたとしても、市井の民の真摯な道程には遠く及ぶまい。

終身修道誓願をして、修道士になったのはそなたではないか。

自らを、そなたの云う最も卑しい存在におとしめておきながら、

この私までその弁舌で籠絡しようというか」

総教主は、毅然と云った。

「まあ、今更、出してしまったものを引っ込めるわけにもいかぬだろう。

それに、現状を最も早く解決する策を持つのは、その憎々しげな頭しか無いのは事実だしな。

だが、憶えておくが良い。

三年後には、相応の処分を受けてもらう」

ラヴィロアは総教主に頭を垂れた。

「ありがとうございます。

三年後、すべてこの罪は引き受けますので、どうか猊下もそれまでご息災に。

王国教会の教主ともなれば、上司は猊下をおいて他におりません」

「つぎの総教主に、ちゃんと申し送りを残すゆえ、心配はいらぬ。この破戒僧が」

総教主は、度し難いといった風情で、額に手をかざす。

「ときに、お前の息子の移籍の手続きは済んだのか」

「はい、猊下。」

本日まで、お育て下さいまして、ありがとうございます。おかげで、とても良い子に育ちましたよ」

「そなたのような男は一人で充分ゆえにな」

「それから、あと一国、未だ元首の返答を頂いていない国がございました。」

回答を頂きますゆえ、これにて退出をお許し願いたく」

「ファーマムール王国か。」

この状況で、通信回線を開くだろうか。

まあ良い。さっさと行け」

総教主は、鬱陶しげに追い払う仕草をした。
ラヴィロアは立礼を捧げ、その場を辞した。

第11話 ファーマムール王国元帥の悔恨

いつも、一緒にいた。

鏡を見るように、お互いの宮廷装束の曲がったところを直しあい、そして共に遊び、抱き合うようにして眠った。

大きな寝台の上で、寝返りを打って転がってくる弟を鬱陶しく思い蹴飛ばした。

その事でいつも喧嘩した。そして、おまえと一緒になんて嫌だと言ったのに、気がつけば十分もしないうちに一緒に遊んでいる。

引き離される日、弟はだぶだぶの修道服を着せられて、宮殿を去って行った。

もう蹴らない。だから、行くなと叫んだ。

お前は、オレじゃないのか。オレは、お前じゃないのか。

同じ顔で、同じ身長と体重で、同じものを食べ、同じベッドで眠る。

離れたくない、と王に訴えた。

弟が行かなければならないのなら、オレも行くから、王宮を出るから。

『殿下、恒星間通信が入っております』

秘書官が内線で呼びかけた。

執務室で、椅子に掛けたまま暫しウトウトしていたようだった。

「アギール公爵か」

『いえ、サラリオーディンティオス星、修道会本院からでございます』

「相手は」

『殿下のご友人だと名乗っておりますが』

悪い夢は、その告知だったのか。

「繋げ。暗号コードを。傍受されないようにな」

しばらくして、モニターに、高慢な笑みを浮かべたマーブリック大司教の姿が映った。

『お久しぶりだね、サラディン閣下』

「貴様は、なぜ私を殿下と呼ばない」

憎々しげに返した。

『決まってるじゃないか。』

私は、神と皇帝と王にしか跪礼を捧げたりはしないんだ。

アストレーデの開示を決して受けない者に、殿下と呼んでやる義理はない。

ところで、ファーマムール王国教会の教主様と貴国の国王陛下に、猊下の名前でメールを送付致したのだが、まだお返事を頂いていない。

そちらの陛下は、一切を閣下に任せてしまっているから、閣下に直接尋ねるのが早いと思っただよ

「ラーフェドラス王国教会設立の件か。」

こちらは今、その国に攻めようとしているのに、それに答えてやる義理があるのか」

「一応、回答する意志があるのか無いのか尋ねておかないと、事務的な問題があるだろう。」

了承した。回答する意志がない、だな

「だが、一応、聞いておく。新教主は誰だ」

「知っているから、あんなところに攻めてくるんだろう」

「この、欲の権化が」

『ボードゲームのいかさまを人のせいにして、謝らない奴よりはマシさ。』

まだ、謝罪してくれないのかな

「それは、貴様が私を王弟として処遇してからだ」

『繰り返し云うが、私はあの時、すでに現役の公爵位を持ち、その責務を果たしていた。』

だが、閣下は、王太子の弟君にすぎない。エプタプラム公爵位に

任ぜられるより前のことだ。

だから、あの時の序列は私が上だ。閣下に礼を捧げる事はできない^と。

この二人は、かれこれ二十年ばかり、この喧嘩を続けていた。たった十五歳の時の、帝国教会での半日の出来事のために。

ユルジサンドは、帝国教会の学院に寄宿していた。

ちょうど帝国の祝賀の行事のためにサラディンも帝国を訪れており、その場に、騎士団長として祝賀に臨むラヴィロアも居た。

ラヴィロアは、ユルジサンドと修道会の関係で親しく交流をもっていた。式典までの半日ほどの空き時間があり、サラディンは久しぶりに、ユルジサンドと水入らずで過ごす時間を楽しみにしていた。だが、待ち合わせの場所にはラヴィロアも居て、ユルジサンドと非常に仲の良い様子に、つい意地悪をしなくなった。

だから、ボードゲームでズルをして、ラヴィロアを負けさせようと思ったのだ。

自国内に居る感覚であつたから、サラディンは自分が王族であるので、当然それに気づかれても、相手が指摘できないと思つた。

だが、ラヴィロアはこの時、正式に公爵であり、継承位は振られていたが妾妃の子供であるサラディンのほうがその場では現実に序列は下であつたので、場は大もめになった。

たまたまその場を、騎士団総司令官が通りかかり、上司の権限でラヴィロアに頭を下げさせたが、その件が未だにしこりになっていた。

謝らないからと、ラヴィロアはサラディンから様々なものを奪つた。

まず、一番大きなもの。

それは、すでにファーマール王妃に決定していたラーフェドラス王女フェイレンリーリアを奪つていった。

次に、継承権の明確化のために、継承権を廃し終身修道宣誓をして修道会に送られた双子の弟、ユルジサンドをエストリダ内戦利用

して奪って行った。

ファームムール王国の、王家としての面子を潰され、それに畳みかけるように、サラディンの精神的なよりどころであった半身を失わせた。

思えば、ほんの些細な事の理不尽を被っているのは、サラディンのほうであつた。

「いつまでも、古い話にこだわるんじゃない。

私は貴様ほど暇じゃないんだ」

『もう一つ、大事な要件がある』

ラヴィロアの表情は、これまでの軽口を叩く様子から切り替わつた。

『ユーリに、大気変成弾の後遺症が出ている。

自然戒律により、高位にある修道士は、事故の場合を除き積極的な治療を行うことができない。

もし、彼がきみに会う事を許すなら、即刻会う機会を設けるが、きみにその気はあるかい、サラ』

「貴様は、自分が何を云っているのか解ってるのか」

サラディンの声が震えた。

『私は、ユーリの親友として、伝えるべき事を伝え、やるべき事をやるだけだ。

他意はない」

「だが、今、オレと貴様は戦争をしているのだぞ。

貴様はラーフェドラス王国の政治の一翼を担う身となるのに、それは背反行為ではないのか」

『ラーフェドラス王国とファームムール王国間の戦争に、ユーリとサラ、そしてユーリと私のことは関係はない。

ユーリは帝国領内のタリアンファットに住んでいる。

会席を設けるのは私でなくてもかまわないだろう。

帝国側にも、連邦国内にも、私が秘密裏に使える伝はある』

「この場で即答はできない。

余命は、いかほどだ」

『長くて、二年』

サラディンは落胆していた。

『もし、私を介さずに会う機会を持ちたければ、このアドレスにメールを。』

ユーリの周辺の世話とボディガードを務めているジョーイという男のアドレスです。 あなたの事は大体知っています。ユーリが会う事を拒否しても、機会を作ってくれるでしょう』

モニターの向こうで、動揺を隠せぬサラディンに、ラヴィロアは冷たい眼差しを向けた。

『あの時、貴方が使用した兵器が、あなたの最も大切な者の命を奪う。』

それは、ご自身の死を覚悟するよりもさらに痛いでしょう。

肉親の命を惜しむなら、いま手になさっている『龍卵』は手放しなさい。

それも、余命幾ばくもないでしょう。

それを人質に、アギールの兵力を動かしたとて、『龍卵』が碎ければ、アギールは去る。 自らの手を汚さずに、何かを得ようとは思わぬことだ。

もし、これ以上非道を行うなら、その時は、私はエプタプラムから国を奪うよ』

「黙れ、この悪魔が」

叫びと同時に回線は切れた。

サラディンの身の内に、激しい憤りが湧き起こる。

それが、過去の自らの過ちから生じた、大きな代償を悔いてなのか、それとも、凶星を突かれたせいなのかはもう解らなかった。

ただ、弟を惜しむ。

あの時、弟なんかいらないと叫んだ事が痛かった。

回線が突然切れ、モニターが乱れた。

その向こうの、サラデインの表情が目には焼き付いている。

「ラヴィ、サラも非道いが、あなたも非道い。」

あれでは、サラは余計に意固地になる」

カメラの範囲の外れた場所から、車椅子のユルジサンが云った。

「個人的事情で、冷静な判断を失うような奴ではないよ。」

じきに頭を冷やすさ」

ユルジサンドに背を向けたまま、何も映さぬモニターを眺めていた。

「どうしたのです、貴方らしくない。」

ラヴィ、あなたは本来、もっと沈着な性質のはず。

今日は行く先々で挑発的な行動ばかりのようだ」

目を閉じると、疲労感が眼窩の奥に淀むのを感じる。

「今日は早朝から休み無しだったから、いい加減疲れたんですよ。」

いずれにしろ、明日は家で謹慎しろとの総教主のお達しですから、

明日の礼拝後、私はホージュオン島に帰ります。

そろそろ、夕べの祈りの時刻だ。

礼拝堂に行きましょうか」

振り返り、立ち上がる。

明け方の時と同じように、親友の車椅子を押し、礼拝堂に向かう。

「ユーリ、私は、」

言い残す言葉があるような気がした。

だが、胸の奥にあるその言葉を口に出すことができなかった。

言葉は人を縛る。

サラデインと、ラヴィ自身が、お互いの立場に固執することによって、お互いがお互いを縛り、それで傷つけあっているに過ぎないこと。

気づいていないわけではないと、言い残しておきたかったのかも
しれない。

張り巡らした奇計は、誰にも真相を気づかれず発動するだろうか。
それを発動させれば、ラヴィはサラが行ったと同じように、非道

を行うことになる。

いや、もっと非道いことなのだろう。

恐らく、サラディンでも出来ない事だ。

家名を捨てた弟を失うことを、あれほど怖れているのだから。

第12話 ラーフェドラス王国の聖典

アストレーデの国々において、王権の継承の最も重要なものがアストレーデ聖典である。

現存するアストレーデ聖典は、アールシャド・アストレーデ、ラーフェドラス・アストレーデ、ファーマムール・アストレーデ、ラジサンドラ・アストレーデがあり、これらとは別に、至高三神の柱である時の神シエルの魂の入れ物である、シエルⅡダルⅡシャハールが持つ「時の書」が存在する。

それらは、書物の形をしていながら、変幻自在の形態を持ち、王それぞれに異なる言葉、異なる意味を持って内容を開示する。

その正体は何であるのか、なぜ、古家よりのみ継承者を選ぶのか、それは誰にも解らない。

聖アムルテパン修道会が、この世に出現した時には、すでにアストレーデはこの世に存在していたのだとする説もあり、また、聖アムルテパン修道会を組織した、古代のシエルⅡダルⅡシャハールがもたらしたものだとする説もある。

だが、あまりに古い事は、アストレーデの諸国がトレアという最初の星に居た頃、宇宙に人々が船出した時に失われてしまい、口頭による伝承を纏めたアストレーデ神話集と諸王譚に依るしかない。

そして、これらの事は、あまりに人の暮らしが、神々のもたらす奇跡より離れてしまった今となつては、伝承の域を出ず、聖典を『見る』ことが叶うのが皇帝と王のみである事が、その不思議が真相なのか異なるのか、聖典の継承を承認する修道会すら不詳である。

その継承を知る者、承認する者はシエルⅡダルⅡシャハールである。

シエルⅡダルⅡシャハールは古来より聖典魔術師と呼ばれ、聖アムルテパン修道会の内、あるいは外に、その正体を隠されて存在する。

アストレーデの神々は、人の世に与えられた神々であり、そして至高三神は、その上位に位置し、人の世の生業とはかけ離れた性質をもつダーリィティザールの神々である。

至高三神、最も至厳とされる神々の皇帝の座にある神は、人の口をしてその本来の名をかたるを禁じられた闇の君主、類い希なる黒き龍として呼び習わす。

そしてその皇后の座にあるは、気紛れなる糸紡ぎ娘の名で呼ばれる三つの顔と六本の腕を持つ鬼神アーヤキである。

アーヤキの姿は、ある者は老婆であるといい、ある者は美しい少女であるという。また

別の者は精悍なる青年の姿であるといい、あるいは、醜悪なる異形の者であるとも語る。

至高三神の最後の者は、永遠の童子の姿を持って、全ての宇宙の過去と未来の全ての記憶と叡智を持つ時の神シエルである。

シエルは神々と人の世、星の世界と虚無の世界を行き巡り、その全ての命の見る物を見、思うところを思うと伝えられる。

黒き龍は鬼神に人のための宇宙の創生を命じ、鬼神は作り出した宇宙に人の業を置く。

そして人とその業を慈しむために、時の神シエルは人のための神々と神話を与える。

人の世に置かれた神話など、黒き龍の関知するところではなく、そしてその人の世は、鬼神の気紛れによって豊穰も厄災も招来する。

ラーフェドラス国王カーレルは、グランヴィル大聖堂の外壁と内壁の間の細い階段を上がる。

その階段に至る道は、東宮の庭の一角に隠され、何者もその場所を知ることはいない。

ただ、王のみに許された通路。

長い年月、ただ歴代の王のみがその通路を進み、アールシャド・アストレーデ聖典の隠された部屋に至ることができる。

グランヴィル大聖堂の尖塔の屋根裏に、王権の象徴たるアストレ
ーデ聖典が隠されていた。

まだ早朝。

早番の女官、侍従らは支度にかかっているが、まだそれぞれの主
は起きる時間ではない。

窓のないその隠された部屋は、照明はない。

だが、聖典を許された王は、その部屋の中が青白い光を帯びて、
闇の暗さを感じる事がない。聖典が開示されるとは、つまり、その
部屋の光を見る事にある。

聖典との同調の具合というのがあるらしく、ある王はほの暗い部
屋と、そしてまたある王は、美しい光に満たされた部屋と呼んだ。
現在の国王カーレルには、そのどちらとも呼べないほどの明るさ、
壁を見るにはやや暗く、それでも部屋を歩き回るには充分な明るさ
であった。

その真実を、王たちは隠してきた。

表紙の字が読める事、として、人々には伝えた。

それは、表紙の文字が読める明るさを意味する。

カーレルにとって、その部屋の明るさは、国の悲鳴を聞くには充
分な程度であったが、道を知るには暗すぎた。

そして、古びた机上にある聖典が青く輝く。

聖典が、カーレルに命じている。

我を連れ出せと。

聖典は、その形を一冊の祝祭書へと姿を変えていた。

それは、王が儀式の際に使用するものである。

例えば、新しい元老議員に辞令を下す時、あるいは、新しい貴族
を任じる時。

聖典は、その場に立ち会いたいのだと望んでいる。

「ルーサザン公爵の辞令の席に立ち会うつもりですか」

聖典は答えない。

聖典は書であって書ではない。

巻物であつて、巻物ではない。

物であつて、物ではない。

伝える言葉を持つが、伝えられるとは限らない。

王位を継承して暫くして、心細いと思つたとき、カーレルはここに来て、母の姿を垣間見ようと思つた。

国の中にある思つたものを見せる書だから、母の姿を見せてくれると思つたのだ。

そして、母の姿を見た。

見てはいけない姿を見た。

両眼からこぼれるものが頬を伝う時、優しい手が王の両眼に添えられ、そして眼を閉じさせた。

その手は父王の手の感触に似ていた。

王たちの魂は、聖典に閉じられ、その中にある。

そのとき、カーレルはその事を知つた。

だが、王たちは、カーレルに何も語らぬ。

ただ痛みだけを伝えるが、その痛みは、すべての王たちのものでもある。

カーレルは書を取り、上着の内側に大切に抱えた。

妹に意見された日から、薬物は取っていない。

もう逃げないと云つたから。

二週間も経つたので、だいぶ依存は覚めて、イライラもなくなつてきた。

だが、時々、あのユラユラとした感覚が欲しくなってしまうのは、当面仕方のないことなのだろう。

そういつた気分の時は、これからは王妃と一緒にいる事にした。

王妃だけの公務の時でも、暇な時はついて行こうと思つた。

逃げていた時間、その眼を閉ざして見なかった、真実の外の光景を、一つでも多く見聞しようと思つて心に決めた。

昨日、パーティの前に病院を訪問して、病床にあつた子供たちの

内で抱きしめられる状態の子供は、全員抱きしめてやった。生命維持装置に繋がれた子供には、手袋越しに手を握った。

その子らを胸に抱きしめながら、王は国を抱きしめているのだと感じた。

王妃と王女はずっと、そうやってこの国を抱きしめていたのだ。

今日は久しぶりに、元老議會に臨席する。

ルーサザン公爵が居ないので、どれほど王らしくいられるかは解らないが、自己保身に長けた宮廷人たちの事だ。現在の主流派より零れた者たちで、さほど隠蔽するほどの痛みも持たぬ者たちが、これを機会に巻き返しを狙うこともあるだろう。当面は、彼らを利用すればいい。

臨時に招集された元老議會は、玉座の間にて執り行われた。

玉座に正統な主を迎え、大臣、元老議員らがその前に会する。

たったそれだけの事に、どれほどの月日がかかったのか。

「本日は、陛下の臨席を賜り、一同、慶祝の極みでございます。我々は、臣として気持ちを改めまして、これに臨む所存でございます」議長が進み出で祝辞を述べた。

「余は本日より、王の職務として、元老議會に臨むものである。

廷臣らの発言は重要なものであるが、詭弁を弄する者は容赦く処断する。よって心して施政にあたれ」

儀礼としての祝辞に、国王はそう宣した。

王妃は、玉座の空席である左の摂政の席とは対象の位置に座を置き、国王を見守った。

政と隔てられ、幽閉されてより後、元老議員に王の頼りとする者は皆無である。

王妃のみが、この席のただ一人の味方であり、恐らく助言者。

王の宣する間、王妃も含め、一同は跪礼にてそれを聞いた。

「王太后が未だおいでにならない。

摂政の抜きで議會は始められないな。

王妃、母上に議会の開催時刻であるとお知らせしておいで」

「御意」

王妃は膝を落として礼をし、その言葉に従った。

暫くの後、議員らの間を秘書官らが小走りに動き回り、自分たちの主に何事か耳打ちした。

そして、数名の者たちが、議長の前に進み出て、何事かを告げると次々に玉座の間から去ってゆく。

「退出する前に聞け」

国王の声が、ざわめきたった室内を恫喝した。

「国政の安定は急務である。」

急務であるからこそ、余は臨時の元老議会の招集を命じた。

この場において、修道会よりの申し出を審議するは王命である。

王命を正統なる理由無く拒否する者は、遠慮なく処分する。

そう心得よ。

覚悟して、去るがよい。

それから、面従腹背の臣もいらぬ。

余の王としての裁量に不服がある者も去るがよい。

もつとも、まだ余は何もしてはおらぬが」

国王は、玉座の傍らに聖典の変化した祝祭書を置いていた。

その助けかは判らないが、云うべき事、王らしい態度、その全てを自然に行うことができた。

身の処し方に戸惑う元老議員らは仕方なく席に戻るが、何人かは戻って来なかった。

程なくして、王妃が玉座の前に進み出た。

「陛下、リン・ガーレンディラはお加減が宜しくなく、本日は臨席を辞退したいそうでございます」

「それでは、仕方あるまい。」

議長、本日退席した者の氏名と理由をあとで報告せよ。

本人に問いただした上で、処分を下す。

それでは、始めよう」

それまで、王太后にいつさい政治の場に出されなかった国王シーヴアエドナ十二世の事を、議席を占める多くの元老議員は凡愚の王として軽んじてこの場に伺候した。

前日のルーサザン公爵による王権の回復の事も、背後に公爵があつての事と思い、後ろ盾のないこの場で、よもや一同を恫喝し、自己の意志を明確に表明できるほどの権威を纏つて来ようとは、思いもよらなかったのである。

相手の怯んだ隙について、自分の目的を進めていく昨日のお手本を頼りに、議長の進める議事に適度に意見と質問を繰り返しながら、グランヴィル大聖堂に王国教会を置くことは決議させた。

そして、その後、退席者の氏名を報告させ、正当な理由の無い者は謹慎、病を理由にしたものは休職の処分を行い、五席ほどの空席を作った。

そして、以前の処分によつて解任された者のリストを持ってこさせ、王太后の政策に反論して免職となつた者の罪状の確認と、謹慎すべき期間についての再検討を命じ、閉会とした。

「ご立派でございます、陛下」

退出する時、前を通る一瞬、立礼にて控えた王妃が云った。

第13話 背徳と背信

女主人を起こさぬようと、そつとベッドを抜け出した。

求められるままに脱ぎ散らかされた侍従の制服に袖を通し、手早く室内の設えを音も立てずに整える。

そして、同じフロアの裏側に設けられた侍従の控え室に戻り、ロッカーの鍵を開ける。

携帯端末を開き、メールをチェックする。

暗号通信によって、兄から送られて来たものがあり、それを開く。そして、すぐにそれをロッカーに戻し、シャワーを浴びる。

シドには現在二人の主人がいる。

正確には、ただ一人、本来の主のために一族があり、そして、シドはその本来の主の命を預かる者に命じられ、この宮廷に入り込んだ。

上手く取り入り、王太后の近侍となり、今日まで潜伏してきた。奇しくも、女主人と同じ命令を、たった今受け取った。

もし、後のほうの命令が来なければ、彼は女主人の命令を実行していただろうか。

女主人は、シドが刺客としての手管を持つ事は知らない。

ただ、自分の密かな命令を、実行しそうな男に命じただけの事だ。多分、修道会が関与することによって明白となる汚職の痕跡を消したい者達の誰かを喉け、汚職の痕跡を処理できる猶予を作り出す程度の怪我を負わせれば充分だったろう。

シドを、この宮廷に送り込んだ者は、本来、この相手の命まで奪う気はなかったはずだから。

だが、命令は届いた。

そして、女主人は、その死を祝うことだろう。

身の内に残る睦言の残滓を洗い流し、クリーニングされたばかりの制服を着る。

脱いだ制服のポケットを探ると、国王に渡すクスリが出てきた。目覚めてしまったお方には、もう必要はないだろう。だが、これから起こる事に、あの方は耐えるだろうか。念のため、そのクスリの包みを着替えた服の内ポケットに忍ばせた。

そして、上着の襟に止められた宝石のバッジを付け替える。それが、王太后に飼われている犬の印だ。

身の内の空洞を埋めるように、王太后はその身体を求める。哀れだと思う。

王太后は、自分の飼う犬に、他の主がいる事など知らぬ。自分だけが頼りなのだと、信じている。

だから、飼うのだ。

記憶の中の春に暮らし、そして、その春の思い出にシドを重ねる。吐息とともに、叶わなかった恋人の名を呼ぶ。

その名を聞けば、なぜかシドは心が震える。

何故、嫉妬するのだろうか。

自分は、何をしているのだろうか。

本当は、王太后の命に、当然のように死の刃をもって応えるつもりでいた自分に気付き、自分を嗤った。

その、生きながらに、国共々枯れていこうとしている女に、身の内も外も絡め取られ、縛られている。

誇り高い一族の魂は、穢されてしまったのだろうか。

あの大輪の花の枯れたあと、また自分も失われた夢に溺れぬ自信がない。

ならば、もう戻ることはできないだろう、一族の許には。呼び鈴が鳴った。

白い手袋を嵌め、鏡の前で身支度をチェックする。

そして、先ほどまで居た部屋に向かう。

ラヴィロアは、ホージュオン島の公爵家の邸宅に帰っていた。家令のザリム・ウィラートに、いつものように事業の業績内容と領地の状況を聞く。

彼もまた、ラヴィロアの腹心の殆どと同じく、太陽系連邦の出身である。

元は、国境方面特別高等行政官を務めていた。いわば、辺境方面の政策のトップであつた人物だ。

エストリダでの一件の後、彼は太陽系連邦を辞し、個人的に親交があつた数人の連邦軍将校とともにアストレーデ圏に亡命してきた。他の者たちのように、何かの組織に属するには、連邦中枢の機密を握り過ぎているからと、公爵家の家令になつた。

全ての事業は現在彼が行っている。

私利私欲と無縁な男だつたので、公爵家に関する全ての雑務を、ラヴィロアは全てを彼に託した。

一通りの事が終わると、公爵は、一人になりたいと自室に戻つた。そして、衣装部屋から、十五歳の頃に着ていた騎士団長の制服を取り出した。

あの日に、着ていた制服だ。

あの頃は、式典の時にのみ着用していたので、殆ど新品のままである。

「ギルに、サイズが合うだろうか」

確認してみても、ある事に気づいた。

袖口につけられたボタンの下に、小さな穴がある。ちょっと見ただけでは判らない程度に補修されているが。

そこにあつた飾りボタンは、あの時にサラディンが引きちぎつた。十八金製のボタンだが、もう彼は捨ててしまったのだろうか。

大きな窓から外の光が注ぎ込む。

そこは家族の居間である。

ラヴィロアが降嫁したフェイレンリーリア王女を失つたのは、まさにこの部屋だつた。

乗艦勤務から戻り、地上勤務までの一週間ほどの休暇を、まだ二歳だったギルと、王女と三人で楽しんでいた。

ラヴィロアが書斎に本を取りに行き、そしてギルがそれを追っかけてきた。

振り返って抱き上げた時、さつきまで居た部屋が爆発した。

そして、ラヴィロアは王女を失った。

ラヴィロアは、その部屋に居ると、無意識で妻に呟いていることがある。

それは、主にギルについての事を考えている時に。

「ギルは許して……くれないだろうな、そして、リン＝ファムランティア。」

僕は、君の許にすら行かないんだよ。

修道会と、仕える神と、そして公爵たる僕の矜持、全てを裏切ろうとしている。

そして、ギルとカーレル陛下に対してもね。

貴方は、僕が貴方を愛していないのだと云った。

だけど、それは違うよ。

それは、僕が、高貴な貴方を愛するに足る男ではなかったから。

僕には、自分の中の野心を抑える術を知らない。

僕の今いる場所は、人間の身にとっては、充分すぎる高い地位だ。

僕は、あの日、ユーリと見てしまった。

アストレーデの真実を。

アストレーデの諸国と、太陽系の中枢の間にある大きな秘密を。

古家のなかの古家のトップである男が、その矜持を捨てて、自らの知識の欲望のために今、全てを裏切ろうとしている」

ラヴィロアの腕の中に、今は亡き王女の感触と匂いが蘇る。

「貴方には、それを言い残して行かなければ。」

ユーリには云えなかったから」

窓から見える明るい色の海。

恐らく明朝、この邸宅を離れたら、戻ることはないだろう。

たとえ、訪れることがあつたとしても、その時は別人だ。

ラヴィロアは、デスクに座り、書き残すべき書類を作成した。

ルーサザン公爵家に、継承すべき者が居なくなった時に、ガラナ侯爵に家系の存続を依頼する書状である。

もし、息子、ギルさえも生き残れなかった時のために、それはザリムに託しておく。

ラヴィロアは、ザリムを呼んでそれを手渡した。

「お支度は、もう宜しいでしょうか。」

データの変換は、少々時間がかかります。

そろそろ取りかかりますよ」

「わかった。」

持つて行ける記憶はここまでだな。

……あと、用意し忘れた事は」

「思い出したら、エリザベスに云ってください。」

私が善処しておきます。

それから、今のうちに伝えておきます。

帝国工廠のある方が、バンクに協力をお申し出になったそうです。

エリザベスは、これを受けると」

「そうか。あのお嬢さんも、私に似たところがおりなのだね。」

それとも、形を残そうとしておいでなのか。

人は度し難い生き物だ。

火種になると知りながら、あえて手を出してしまふ。

……この国が終われば、あの国なのかね」

ラヴィロアがその女性に敬語を使ったことを、ザリムは聞き逃さなかった。

翌朝。

王宮の地点から二時間の時差があるので、まだ外は夜だった。

昨日、衣装部屋から出した制服は、きちんと掛けてある。

公爵位の指輪を外し、机に置いた。

そして、自分の着ている制服から騎士団長章を外すと、ポケットからレプリカを取り出して付け替えた。

そして、本物を掛けてある小さな制服に付けた。

「生き残りなさい」

公爵位は、そうやって継承された。

他の誰の見守りも受けず。

パタン、と扉が閉じられた。

第14章 神の容れ物

アールシヤドに向かう修道会所有の高速船内。

エストリダ大司教ユルジサンドは、任地であるタリアンファット交易惑星エストリダ難民地区に戻るために船上の人となっていた。

コンパートメント内の向かいの席に居るのは、ユーリの身辺の世話とボディガードを務めるジョーイ・ルイスである。彼は、修道騎士団の軌道エレベーターでユーリと落ち合い、この船に乗った。便宜上、エストリダ大司教の秘書として修道会から雇われる形を取っているが、彼は修道会院でもなく、エストリダ大司教に仕えているでもない。半ボランテニア的に、ユーリのために付き添っている元は、太陽系連邦の要人警護の職にあった。現在のルーサザン公爵家の家令、ザリム・ウィラートがその職での最後の主であった。

「血中酸素量が少し下がっています。」

なぜ素直に医事修道士を付けなかったんですか」

検査機にユーリの指を突っ込み、出て来た値を見て云った。

「いや、いろいろ密談があったから」

「貴方は、一度悪くしたら、回復させるのに時間がかかる。その間に他の悪化要因が介在すれば、病状は進行します。自然戒律なんて馬鹿なものに拘るから。」

出来るなら修道会に退任状叩き付けて、連邦医のところに引っ張って行きたい。

こんな事なら、私がずっとお世話すべきだった」

ジョーイは不機嫌である。

「ザリムには、会えたんだろう」

「ええ。それどころか、ホージュオンの宙港に、偽装してありました。『インゲボルグ』が」

「『バンク』の総裁専用船だね。きみが来ると知りながら、そのよ

うに見せつける真似をする」

太陽系連邦のサントペテルスブルグ遺伝子銀行、通称『バンク』と呼ばれる組織には、密かにアストレーデ圏の古家の遺伝子の収集を勧めているという噂があった。

「どれほど彼が連邦と密約を交わしているのかは私でも把握しきれないよ。

だが、これは、私に対するメッセージなのだろう。

彼は、悪い事をするときには隠し通せばいいものを、私にだけはちゃんと本当の事を云う。告白された側は、止めればいいんだろうか、そうして欲しいんだろうか。

そうじゃないだろう、私たちは大人だ。

時間の針は止められない。それを維持するのが、私の中の『神』の仕事だ」

ジョーイは、ユーリの不自由な身体の手足として、公私ともに、エストリダ事件からずっとサポートしてきた。ユーリが、聖典魔術師『シエル・ダル・シャール』の称号を受けてから、その身に『神』を宿し、その心は人のまま、その矛盾に多大な代償を払ってきた事を間近で見ている。

『神』としての意志と、ユーリ個人の意志は全く別のものであり、『神』としての意志が必ずしもユーリの知るところではない。

その特別な立場を、宗教観を一切持たないジョーイが至近で仕える事で、ユーリは個人を失うことなく生きてゆける。側にアストレーデ教徒の者ばかりでは、個人は排斥され、ユーリは神としての自己ばかりを必要以上に尊重される事になる。だから、ジョーイの連邦人であるという事が、ユーリにはとても重要なのである。

ユーリが現時点で、中の『神』について確信している事は一つ。

新しい『神』の入れ物を、その『時の神』は選んだという事。

そしてユーリは、その入れ物が試練に耐え、入れ物として『神』が入った時、『神』にとって不要となる事。

なら、とジョーイは思う。

もう要らないのなら、この満身創痍の男を早めにくれと。

自然戒律も修道会も関係ない場所で、連邦系の普通の医療施設で、生きるにはまったく不自由のない身体と、本来の穏やかな顔を取り戻してやるのにと。

宗教や神など信じない。

どのような奇跡を見ようと、それは奇跡などではない。

己の罪ではない罪を受けたユーリには、それは枷である。

人であるユーリを敬愛する身にとっては、それを苛む神々は忌むべき存在。

信仰の対象になど、決してならない。

第15話 死の王国

……長い旅路であつた。

それは、王女達が砂丘で泣き暮らしていた日々を過ぎ、王子が生きながらにして砂に埋められていた日々を過ぎた。生きている屍が、二人の心を乱した王女を連れて旅する姿は、誰の目にもとまることは無かつた。その砂丘は人の住む場所では無く、人の至れる領域でもなかつたゆえに。

砂丘の奥地には、地上を守るを任された神々でさえ、決して入るうとはしなかつた。その地は神々の皇帝たる黒き龍の後、この世界の創世者たる鬼神アーヤキの住まいであつた。

その砂丘は水もなく、食べるものもない。木乃伊となつた王子はともかく、王女達には苦行であつた。だが、三人を歩ませているものは、生きながらに砂に埋もれたナーダヴィラの民の苦しみと、憎悪の炎であつた。

そしてようやく、鬼神アーヤキの宝珠の城に至り、巨大な門の前に立つた生きる屍となつた王子に、姿定めぬ門番は問いかけた。

「何者ぞ」

王子は応えた。

「我は苦しむ者、生ける苦しみを知る者、生きながらに屍となつた者、屍となつても生き続ける者」

「その姫たちは」

「この者たちは我が妹たちにして、悲しむ者、悲しみを知る者、悲しみながら我を失つた者、我を失いながら悲しみ続ける者」

「この城に何用か」

「生きるより他に知らぬ我らと我が民の苦しみを解き、悲しみを絶つこと乞い願うものなり。」

創世の神にして、黒き龍の後たる、鬼神の前に乞い願うものなり」
門番は、しばしの沈黙ののちに是れに応じた。

「汝らは砂の王国ナーダヴィラの王子カーラギルス、そして二人の姫らは、ナーダヴィラの王女ガルディナーダとルワナラーダであると認めよう。」

我が主の許しは得たり」

門番が門を開くと、夜の天幕のなかにあまたの星の灯火が輝く広間を進み、玉座の前に出た。

一人の背の高い男が戦士の装束で座していた。

「我が名はアーヤキ、いかが致した、王子らよ」

玉座に在る少女が云った。

「我が王国、ナーダヴィラを襲った厄災をご存じでありましょうや」
ひからびた老婆は応えた。

「この身は、今し方まで黒き龍の御前にあつたゆえ、地上の事など預かり知らぬ」

臍長けたつややかな唇をして、艶然とした声が城に満ちる。

鬼神は姿を定めず、様々な者に変じてゆくが、それはいずれも鬼神の真の姿。

アストレーデの世界の以前、滅ぼした世界に在って喰らった者たちの姿であると伝え聞く。

王子はナーダヴィラに下った変事についての事を語り聞かせた。
もとより鬼神は厄災の下った時より知っていたが、王子の語りに耳を澄ませた。

王子の語り終えて後、鬼神は聞いた。

「王子よ、そちに問う。何を求める」

「生きる事しか知らぬ地中の民の苦しみを除いて頂きたく」

「ナーダヴィラはもとより余を崇める地。余を崇める返礼に、余が守護を与えし地。」

かの地を滅ぼすは誰ぞ。

王子よ、かの者の名を云うてみよ」

問われた王子は鬼神に告げる。

「この身、もはや一介の屍なれば、その者の名も知る由はございま

せぬ」と。

「ならば、云つて聞かせよう。それは森の王国ニーヴァの向こう、アリアンテュレスの丘に生まれた淡い娘の、その一族の仕業なるぞ。かの娘の名はラティザリと云い、眼の閉じたる青白き肌をした色のない髪を持つ娘である。

さて、王子よ、再び問う。

汝、かの者とその一族に、何を与える」

王子、空洞となった眼に怒りの光を宿して云った。

「至上の不幸の種を」と。

「王子よ、そちは王女らに命じ、その者達に不幸の種を蒔くを許す。そして王女らが復讐の種を蒔く間、我は砂に埋まりし汝が王国に赴き、かの王国の王となろう。

そして、汝が国を生きる事から解き、それを『死』と名付け、『死』の訪れた者の住む王国としよう。

そして、汝に新たな称号を授けるものなり。

汝、王子カーラギルスよ。新しき称号『死の宰相』の権威を以て、かの国を采配せよ」

王子と王女らは、その声とともに元の国へと帰還していた。

かくて、死の王国はこれより誕生したのである。

『アストレ

ーデ神話集より抜粋』

ラヴィロアは、マーブリック大司教として修道会の正式な書面を携えて、総教主を補佐する副教主他数名を従えて王宮を訪れた。

国王は玉座の間にてこれに応対し、ラヴィロアはそれを頼もしく見た。

ラヴィロアは、その席でグランヴィルの大聖堂の下見を願い出た。一同でグランヴィル大聖堂の施設の点検を行っている、東宮が

らの使いの者が来た。

王妃が庭での午後のお茶に、ラヴィロアを誘ったのである。

ラヴィロアは一人で、東宮に至る回廊を降り、国王の居住部分の庭へと至る迷宮作りの植え込みの小道を歩いていたが、ふとの途中立ち止まった。

「ライール卿、いるだろう」

ラヴィロアは、植え込みの向こうに声を掛けた。

「見え透いた罠だね。」

修道騎士団のトップの私が、ずいぶんと嘗められたものだ。

きみが仕掛けたとは思えない。当然、王太后派の間抜けな者にやらせた事だね。

でも、きみは、私がこれくらいの罠には掛からない事を知って、そこに居るはずだよ」

その言葉は、ファーマムール古語であった。

しかし相手の気配は無い。

だが、ラヴィロアは話し続けた。

「きみが手を下して、その後でこれを利用すれば同じ事だからね。

でも、きみが私に手を下す必要はない。

君の手は、アギールの一族の誇りの刃だ。

エプタラム公爵のものでも、ましてや、王太后のものでもない。

きみが、私の知るアギール公爵の三男、ファルティア伯爵エル・

シドであればの話だが。

その手は、今は穢すべきではないよ。

これは私の王女様とお揃いだし、悪くないと思う」

ラヴィロアは、多少色の違う地面の上に一步踏み出そうとした。

「ああ、それから忠告だが、女など、世界にはいくらでもいる。

つまらない事で身を滅ぼすな」

次の瞬間、爆音と共にその場は灰燼に包まれた。

植え込みの裏に、シドは居た。

その瞬間、彼は猛然とその場を駆け去った。それでも、被っていたフードの外側には、灰燼が付着していた。

そして、血の跡も。

人が走り寄ってくる気配を感じ、身を隠しながら西宮への道をたどる。

途中、庭園管理木屋に立ち寄ると、爆破の音を聞きつけ、様子を見に行ったらしく、誰も居なかった。

枯葉を燃やすための焼却炉には、たまたま火がついていて激しく燃え盛っていた。

シドは手にしたフードを焼却炉に放り込み、燃え上がるのを確認した。

そして、侍従の控えの間に戻った。

鏡を見ると、頬に血の滴が一滴付いていた。

位置的に、どうしてそれが付いたのか解らなかったが、指先でそれを拭くと、手を洗い、白い手袋を付けた。

廊下を駆けってくる者の足音がする。

東宮での出来事を伝えに来たのであろう。

それがシドの手を汚さずに行われたという事実を、証明する者は居ない。

それを望んだ二人の主の、二つの密命はそうやって同時に叶えられた。

そして、シドが何より恐怖したのは、その相手が取るに足らない世間話をするように、何気なく死者の国へと足を踏み入れた事だった。その策略も、シドの身分も密命も、全てを知っていながら。

第16話 変わらない毎日の終わり

少年は、その時、講義中でありながら、退屈な気分で見えていた。

そのうち、廊下を慌ただしく修道士たちが走り回る気配がした。講義中の教師が廊下に出ると、総教主棟の服を着た修道士が数名入ってきた。

「ダリルディーン、本日はこれで授業を終え、私たちと共に来るように」

別の一人が教師に何やら理由を説明すると、教師の顔が呆然とした。

少年は不安になったが、少年を連れにきた修道士たちは何も云わない。

学院の敷地を出て、総教主棟に至る中庭の途中で、エドワード・ストレイカー少佐がその一群に加わった。

そして、少年の肩を抱くと云った。

「今からしばらく非常時になりますよ」

いつもの調子ではないその言葉と堅い表情に、妙な胸騒ぎを憶えた。

そして、連れて行かれた先は総教教室であった。

早速、礼の姿勢を取ろうとした少年に、手でそれを制した総教主は自ら進み出て、少年の手を引き、そして椅子に座らせた。

「ダリルディーン、その真の名、ガルディア・ジャザイルよ、心して聞くがよい」

総教主の声は静かであったが、緊張を含んでいた。

「先ほど、マープリック大司教が身罷った。子細は確認中だが、王宮にて爆弾テロに巻き込まれたようだ。即死であった」

少年の耳には、ちゃんとその意味が入らなかった。

あまりに、予想だにしない言葉だったので。

「もう一度、云ってください」

少年は聞き返した。

「もう一度、云おう。」

お前の父親が亡くなった。

死の王国に召されたのだ」

少年は、呆然とした顔で周囲を見回した。

「嘘と……」

少年の小さな声に、誰も応えない。

総教主は、少年の手を握った。

「いつでも、死は突然来るものだ。」

今は受け入れられないだろう。

だが、それはいずれ受け入れねばならぬ」

そして、総教主は、エドワード・ストレイカー少佐に云った。

「この子の事は、あなたに一任する。」

帝国教会に預ける際に、マーブリック大司教は、あなたを当てに

していたようだから。事はテロだ。

この子の身の上とて、安全ではない。

このフロアの控え室を一つ与える。そこで暫し待つがよい」

総教主は、向かい合った椅子から立ち、少年を抱きしめた。

「心より哀惜する。」

汝の身に、神々の守りと恵みが降るように」

少年には、まだ信じられなかった。

それが夢であるようにと、まだ祈っていた。

エドワードに支えられて、少年は控え室に行った。

「坊や、じきに嫌でも忙しくなる。」

猊下がお呼びになるまで、休め。

俺は、他の仕事があるから済ませてくる。すぐ戻るよ」

エドワードは、部屋の外に出て行った。

少年は、それが現実なのか、と自分に問うた。

その部屋が、総教主棟であることが、事実と証明する全てである

う。

普段なら、少年は一般の生徒と同様に、決して総教主棟に足を踏み入れる理由がない。

ソファに、うつぶせに倒れ込んだが、不思議とまだ悲しみが無い。事実として実感できない、したくない。

廊下を歩き交う者たちの音が響いてくる。

慎み深いはずの修道士たちが、その戒律すら斟酌する余裕もなく動きまわっている。

その音がたまらなく、煩かった。

そして、王宮では。

「陛下、どうぞこの場に」

事件を聞き、その場所に駆けつけようとする国王シーヴァエドナ十二世を、副女官長は必死で押しとどめた。

「事の次第が判りますまで、宮殿は危のうございます。どうか、御在所を動かれませぬように」

王と王妃の居室のあるフロアに、直ちに近衛隊の者が普段の三倍の人員で警備を強化していた。

強化ガラス越しに庭を見下ろすが、事件の場所はすぐに幕で覆われて、中がつかがい知ることはいできない。

そのうち、沢山の修道会員が到着し、王宮の職員と多少揉めながら、それでも暫く後には遺体らしきものが運ばれて行った。

そして、先ほど対面した副教主らが、国王に対面を求めてきた。

未だに動揺を隠しきれない一同であったが、略式の儀礼にて、修道会の意向を伝えた。

「陛下、事件の現場と遺体の状態の記録を、王宮側と当方で確認しつつ採取致しました。そして、マブリック大司教の遺体は、このまま、騎士団に収容致したいと存じます。

その件をどうぞお許しいただきたい」

その内容を聞きながら、国王の目は呆然と見開かれてゆく。

「亡くなったのか、あの方が」

「はい、陛下。即死でございます。通路に仕掛けられた地雷を踏み、半身が砕けております。上半身は、かろうじて留めておりますが」
そして語られた、あまりに衝撃的な光景に、国王は両手で口を塞いだ。

「余は、見送らねばならぬ。ひと目、会えぬか」

「恐れながら、マブリック大司教の生前の矜持を尊重していただきますなら、処置が済むまで、ご対面はお控えいただきますようお願いしたき所存でございますれば」

副教主の慇懃な態度に、あの端正なラヴィロアの姿を思い出す。

あの自分のスタイルにこだわる人が、無残な姿を人目に晒すことを許すわけがなかった。

そして国王は、それ以上、対面も見送りも求めなかった。

「葬儀には参列したい。その旨を猊下に」

「御意、お伝え致します」

その頃、アーサー・レイノルズ三位修道士は、すでにラヴァンドル星域惑星エリザに到達していた。

「早速惑星上空にて、示威行動を展開する。」

散開して地上よりの可視高度まで降下して維持せよ」

かつて、連邦最速と云われる運航技術は、単に最も最短距離を進むだけによるものではない。恒星間の重力の狭間で最も安定したワープポイントを、航路算定士の手によらず、瞬時に自分で算定する技術があればこそ成される技であった。

『長いブランクがあったとは思えないですな。初めて指揮する艦隊を、実に見事に掌握しておられる』

モニターの向こうで、王国軍の駐在司令官が齒の浮くようなお世辞を云う。

「ただ、航路を算定し、艦隊を進めるだけなら大して難しいものではありません。」

これが実戦ともなれば、各人の技量と癖を把握していないと出来ない事です、このようには上手くはいかないでしょう。

それよりも、早急に反乱分子のあぶり出しをお願いします。

修道会では、人を処罰することはできないので」

『お任せください』

王都での一連の事は、すでに伝聞しているのだろう、普段なら越権行動だと睨みつけられるのが常であるのに、修道会に取り入る態度を見せる。

これは協力的というのとは随分とちがう、虫酸の走る行為である。マブリック大司教なら、はたしてどんな毒舌で対応するのだろうか。

普段なら、詰まらない想像などしないアーサーが、ふと、その皮肉を聞いてみたい気分には駆られた。

航行中にエドワードから受けたメールが二通。

一つは、本当に取るに足らないことだが、あのマブリック大司教が、まだ教主用の司教服を仕立てていない事。

そして、アギール人とおぼしき少数民族がかなり以前から、サラ「オーディンティオスに定住している事などである。

アーサーは、エドワードが内規監査の任を負っていることを知っている。

そして、アーサーもまた、エドワードの手に余る時はこれを補佐することができる。

修道会内部と騎士団に、明らかに不穏分子の影はあるのだろう。

だが、様々な星々のどんな民族も拒まない修道会にとって、誰が味方で、誰が間者なのか見極めるのは難しい。

だから、太陽系連邦出身のエドワードに、その役が命じられた。宗教と民族にしがらみをもたない、修道宣誓をしていない彼を。それにしても、司教服をまだ作っていない事が引かかる。

アーサーの制服さえ新調してロッカーに入れておくほどの準備の良さ。

わざわざ知らせてきたエドワードも、その事が気になったのだろ
う。

そして、その意味を、次のメールが知らせてきたのである。

第17話 言外の依頼

総教主ザエル・ラジアンドは、修道会内に二週間の服喪を命じた修道騎士団における三つの権威の全てを掌握していた者の死は、修道会内を混乱させるには充分であった。

その中であつて、修道騎士団においては、その衝撃こそ大きかったものの、あらかじめラヴィロアの離籍が決まっており、すでに指揮系統の移譲が済んでいたせいか、業務自体に停滞を期することはなかった。

その日の夕刻には、バウトミス元帥が、修道騎士団総司令官としての仮交付を求めて来た。ラヴィロアの死に伴う混乱に乗じて、ファーマムール王国が国境線を越える事を危惧して、いつでも防衛ラインの強化を命じることができるようにである。

元々二日後には、正式に下せるように手配してあつた辞令である。日付を書き換えて正式な辞令をその場で下した。

しかも、ラヴィロアは王国教会の設立の件には、相談役と称して三人いる副教主のうちの一人をその最初から最後までずっと立ち会わせており、この件に関しても、恐らく事件を仕組んだ者たちが意図した時間的猶予を与える事なく、予定どおりに事を進めていける。副教主たちは、元々、各王国教会の教主に万が一があつた際に、正式な推挙まで教主職を代行できる資格があり、そして多くの場合、その代行者が後任に推挙される事が慣例であるから、かの副教主が、ラーフェドラス王国教会の教主を務める件も規約上にも何ら問題はない。

このあざやかな手際を、偶然として納得できるだろうか。

ファーマムール王国教会の件においては始動の前、そして現職の騎士団の件については、引き継ぎ自体が完了している、嫌になるほど絶妙なタイミングを狙った死に、総教主はラヴィロアの裏の意図を穿った目で見ざるを得ない。

ラヴィロアの息子は、エドワードに命じて騎士団長室に引き取らせ、その夜は早めに休ませた。

あまりにも無残な遺体は、まだあの少年に見せられる段階ではなかった。

幸い顔は、傷らしい傷も無くそのままであったので、エンバーミングを施したのち、騎士団内にあるマーブリック大聖堂に安置される。

明日午前より、慰霊の礼拝が執り行われる。

正式な葬儀は二週間後、各王国教会の参列者が集った上でと決定した。

ファーマムール国王には、一応、明日の礼拝の時間と、正式な葬儀の日取りの両方を伝えさせた。

七歳の頃から三十年近く見守ってきた愛弟子の死は、たとえどんなに含むところがあるうと、総教主にとってはそれなりの痛みである。

「馬鹿な奴めが」

深夜になり、エンバーミングの終わった遺体に対面するため、騎士団本部に向かう。

その死に顔は、事件の悲惨な報告を思わせぬ程、端正で美しかった。

そして、卓越して悪知恵の働く男であった。

ラヴィロアについては、いくつもの修道会に対する背任と異端の疑いが届いていたが、確たる証拠も挙げられず、そして深く追求する事も命じなかったのは、総教主の甘さなのだろうか。

信仰としてのアストレーデの聖と俗、信仰を守り導く立場としての修道会のあり方の矛盾の全てを知り尽くし、批判しながらも、信仰には忠実であった。神学としての理論を最も正確に把握している事については、修道会の誰にも追隨を許さない。

ゆえに、矛盾点を論文として明示せざるを得ず、そして一方で、それ自体が信仰に対する異端としての思想なのだという事を批判せ

ざるを得ない者たちが居る。

もし、彼が終身修道宣誓さえしなかったら、異端の罪は負わずに済んだ。単なる学説の域を出ない門外漢の思想であるから。それを敢えて、修道士となつて行つたからには、その罪に対して、相応の覚悟を以て臨んだのであろう。

総教主は、その論文を読まなかった事にして、引き出しの奥にしまい込んだ。

終身修道誓願を受理する日の朝、事務的な用事で総教主室に来たラヴィロアに問うた。なぜ、修道士になるのかと。彼は云つた。自分は騎士なのだから、これは亡き王女に対する忠誠なのだ。

神々に対する信仰の忠誠ではないのか、この野心の権化が、と切り返したが、あるとき何が本心で、何が違ふのか、本人にも判つていなかったように思うのは、想像が過ぎるのだろうか。本当は、修道士となる事で信仰の内側に立ち、全てをひっくり返す時を狙つていたのではないだろうか。

総教主自身、教主座に昇りつめるためには、多少なりとも政略的な手立てを使わなければならなかったし、ラヴィロアの後ろ盾にいる事が、その立場を優位にしてきた事はまごうことない事実である。だから、心配で一時も心が安まらない。一種の共犯的關係と、世俗的な師弟關係の両方の意味で。

ゆえに、今回の出来事は、ラヴィロアに降りかかった偶発的な不幸と見せかけて、周到に仕組まれた彼自身の工作ではないとなぜ云えるだろう。

もし、故意だとするなら、この事件で地雷を仕掛けた者を処罰してはならない。

故意なのか、本当に暗殺なのか。
ガラスの棺を小突いてみても、もう不敵な笑みも、減らない口も、見る事も聞くことも叶わない。

「あの子がまだ起きているなら、連れてきなさい」
総教主は側にいた者に命じた。

そして、ガラス越しに遺体をまじまじと見た。

新しい騎士団長の制服を着せられ、三つの徽章がきちんと止められていた。

しかし、徽章のリボンは血で汚れている。

だが、騎士団長章にあるはずの、ルーサザン家の紋章の刺繍がない。

「やはり、か」

なら、この事件の関係者を咎人には出来ない。

死を覚悟して、正規の徽章を外したのだ。

何者も裁いてはならないというメッセージである。

「お前の死の真相は暴いてはならない。しかし、事件について何者も裁いてはならない。

という事だな、お前の意志は。

年寄りにあまり難しい事をさせるな」

第18話 冷たい空の月

父親が騎士団に帰還したとの知らせが入り、少年はエドワードに伴われて騎士団長室に案内された。

最後に会った時よりも、整然と整頓された部屋はよそよそしい。常に仕事に追われていた頃も机上はそれなりにきちんとしていたのに、まだ人の気配があった。

騎士団長室は、ルーサザン家当主の専用室の意味もあるので、異動のためとはいえ、全てを引き払うわけではない。

寒々としていと感じるのは、父を失った事実のせいなのだろうか。

ふと気がつく、ザリムが控えていた。

「亡き公爵様におかれましては、神々の御許にて安らかなる日々を過ごされますことを」

死は解放である。

そうアストレーデは説いている。

家令であるザリムは、太陽系連邦の出身であり、アストレーデ教徒ではないし、その思想も持たない。その彼が、少年に対して、アストレーデの流儀に従い、そのように弔意を述べる。

「ホージュオン島より、ガルディア様の身边をお手伝いするために参りました」

薄暗いように感じていた部屋は、普通に照明もついていた。

少年は、ザリムにねぎらいの言葉を掛けるべきだと思ったが、適当な言葉が思いつかず、呆然と立ち尽くしていた。

「先ほど、バウトミス元帥がおいでになり、現在、エンバーミング処置を行っているそうでございます。ガルディア様には、このお部屋で待機するようにと」

少年の母親フェイレンリーリア王女の死後、父、ルーサザン公爵

は、家令もろとも屋敷内の全ての使用人を解任した。

自分の休暇中に王女を暗殺された身にとって、その時以降、近侍の誰もが信頼できないと思われたのは無理からぬことで、その後、明らかにラーフェドラス王家とは縁もゆかりもない帝国領内から新しい使用人を募り、そして家令に太陽系連邦から移籍してきたザリムを据えた。

ザリムは、家令そのものの職務よりは、公爵家の企業としての側面でその技量を発揮するべく据えたのであろうが、ザリムは、家令としても公爵家の立場を理解し、騎士団の仕事に没頭するラヴィロアを支えてきた。

「そして、ガルディア様。

あなたが、今から、ルーサザン公爵であらせられます」

ザリムは、少年に深く立礼した。

そして床を見下ろして気づく。その部屋の絨毯には、公爵家の紋が織り込まれていることを。

「同時に、この部屋の主にもなられる。

折りを見て、私が総教主猊下にラヴィロア様のご遺志をお伝えに行きます。

その後で、正式な辞令をお受けください。

儀礼的な手続きは、その後になります」

そしてザリムは、立ち尽くす少年を控えの間に連れて行った。

「猊下からのご伝言がありました。今のうちにお休みなさいと。

弔問客が参りましたら、休む暇はありません。それには私も同意です」

少年は睡眠導入剤を与えられ、ベッドに座った。

心の芯が落ち着かず、とても横になる気分ではない。

ベッドの上をよく見ると、先日父親に会った時に、靴のまま寝ていた時の汚れが微かに残っていた。

それが、妙に嬉しかった。その場に父がいた事実はそのに残っている。

その事が、よけいに艦隊勤務が遠い星への出張に出ているぐらいの感覚でいる事に気づかされる。

全てが何か手違いで、本当はどこかに黙って出かけてしまっただけなんだよ。

そう信じている自分を持て余す。

遺体と対面したら変わるのだろうか。

照明を落として窓を見上げると、月が出ていた。

青く照らされる部屋は寒々しい。

それでも、薬の作用で少しずつ何かが解かれていく感じがして、その寒々しさにベッドに潜り込んだ。

大丈夫だよ、と父は云った。

長期休暇でホージオン島の家に戻った時に、寮ではない部屋の広さに、いつも戸惑って泣いた。

泣いたらすぐ来てくれた。

そして、結局、書斎のソファで寝付いてから、部屋に運ばれるのが常だった。

一人で広い部屋で眠るのは、未だになんともなく馴れない。

早朝、目覚めてから、エンバーミングの済んだ父親に対面した。その綺麗に処理された遺体は、まるで作り物のようで、生きていた頃の父親とはまったく違う印象で、それが『死』であることを初めて知った。

その瞬間、周囲の音が遠くに思えて何も意識に入って来ない。

入れ替わり、立ち替わり、大礼拝堂にいる間、少年に弔意を述べる者たちが次々とやって来たが、下を向いて頭を下げるのがやっとだった。

慰霊の礼拝が行われる前に、少年の周囲はやっと静けさを取り戻した。

皆が席に着いたからだ。

そして、式が始まって暫くしてから、少年の周囲の将校や上位修

道士達の間に紙片が回され、数人が中座して出て行った。

この騎士団の主の死を悼む僅か一時間程度の時間を邪魔する者が居る。

そして、礼拝の直後、その事態は公表された。

第19話 シエルダル星域の攻防戦 1

第19話 シエルダル星域の攻防戦 1

ラヴィロアの死は、ファーマムール王国サラディン・エプタプラム元帥の知るところとなった。

政敵としての彼の死。いかに自分が命じたことであるにせよ、故知の者の死が現実になったことに対して、気持ちが動揺しないわけがなかった。

彼なら、半分は自分の計略からいつものようにするりと体をかわして、いつものように不敵な態度で報復を企むことを半ば期待していたのかもしれない。

いずれにしろ、始まってしまったことである。

修道会、及び騎士団の動揺は相当なものだろう。

この機に乗じない理由はない。

サラディンは、アギール公爵を通じてシエルダル派遣艦隊に対し、ベルドール星域への進軍を命じた。

アギール公爵リダルは、サラディンの命を受け、ラヴィロアの死より二十四時間後、シエルダル星域国境線に展開している長男ルーデージー候爵麾下の艦隊をラーフェドラス国境緩衝域を超えて侵攻を開始した。

軽編成高速艦隊一個、通常編成艦隊二個からなるこの艦隊は、総戦力十三万五千、小型機動母艦を含めた総艦艇数千五百、大型重攻撃艦六十隻を有する重火器制圧を得意とする。

通常編成艦隊とは、旗艦とその直属の二十隻前後の大・中型攻撃迎撃艦大隊を中心に、先鋒、上翼、下翼、左翼、右翼の五方面に主力母艦を中心とする大隊をそれぞれ配置する基本的形態であり、軽編成高速艦隊は、速度重視の軽編成大隊三個で旗艦を中心とする五

方面をカバーする機動性重視の形態である。

ベルドール星域駐留第三艦隊と、ファラード星域駐留第七艦隊は、国王の命令書に従って、すでにシエルダル星域最終防衛ラインに展開していたが、第三艦隊は通常五連編成総兵力五万五千から成るべきところ、四連編成四万足らずの兵力しかない。機動攻撃艇中心の艦隊構成であり、重火器に乏しい。そして第七艦隊は、総兵力二万五千の三連編成からなる軽編成高速艦隊であり、併せて八万。

重火器戦に対応するには、拡散陣形をもって対応し、軽編成艦隊による一撃離脱の波状攻撃が最も有効であるが、壁となるべき通常編成艦隊が四万では対応できない。

そして、援軍となるべき、近隣の七個艦隊の内、四個艦隊が援軍に来るはずであるが、指揮権の乱れのせい、まだ到着していなかった。

第三艦隊サリユー提督は第七艦隊と連携しながら、定石に従い一応の布陣したが、本星の指揮系統の乱れの影響はいかんともしがたく、また、また、自分もつまらぬ宮廷の派閥争いに巻き込まれていた事が疎ましかった。

その頃、シエルダル星域に三日の位置にありながら、ルーサザン公爵領の至近であることで、比較的安定しているハバドール星域駐留第五艦隊の提督レムルス伯爵夫人ベリア・エルダは、ワープホールNN3Bに待機していた。

ワープホールNN3Bは、百二十年ほど前より出口の座標が定まらず、八十年前より使われていない。だが、このワープホールの出口が現在、シエルダル星域付近にあると云う。

一ヶ月ほど前、ラヴィロアはたまたま星域に公爵家の所用で訪れた。ベリアはその際にラヴィロアから彼の城に食事の招きを受けた。ラヴィロアは、修道騎士団長ではあったが、修道会の学院寮の息苦しさを嫌い、王国軍士官予備学校に十五歳まで居た。その頃、平民の身分ながらベリア・エルダも入学を許され、クラスメートの関

係だった。

作戦士官科で同じ研究グループだった者たちは、今でもお互いに交流があり、ラヴィロアからの食事の誘いは、そういった流れでは、ごく当たり前のものだった。とりわけ、現在の提督としての地位は、ラヴィロアが遠縁の貴族を取り持つてくれたおかげで手に入っただけだ。単なる身分を手に入れるための政略結婚なので、実際は挨拶をする程度の関係でしかない。

ラヴィロアとは、彼が王女様と結婚する事を決めるまでは、挨拶がわりにディープキスを交わす仲であったが、それ以上ではなかった。それは、思春期の暴走として、ありがちな思い出である。

その食事の席で、ラヴィロアは珍しく仕事の話をした。

いずれファームール王国が、エストリダ緩衝域か、シエルダル星域かのどちらかに侵攻して来るはずであると。

侵攻をはじめた段階で、すべての命令を無視して、エストリダ緩衝域なら直接急行し、シエルダル星域なら、ハバドル星域から二日の距離にあるNN3Bワープホールを使い、敵が国境線を越えたらタイミングを計って敵の側面に出ると、正確な座標データのメモを手渡してきた。

「不確定な情報で、私の首をかけるというのは」と抗議すると、

「命令如何より実績だよ。実績は、今のファームールにおいては何よりも武器になる。」

国境線に侵攻を許したという事は、派閥争いで指揮系統が一元化できていない事の現れだ。いくら敵でも、侵略戦において、こちらが有利な立場で防壁を敷くことができたなら、侵入はして来ない。

今、ファームール王国は孤立している。本来は、自国軍で侵略戦を行うだろうが、体面というものがあるだろう。傭兵組織を使うはずだ。

そして、彼らは勝てる戦争しかない。圧倒的に強いけどね、消耗戦は絶対やらない。

だから、指揮系統さえ整っているなら、キミの出る幕はない。

だが、侵攻を許したのであれば別だ。

その局面において、五連編成の完全体のキミの艦隊がどれだけ有効か。

そして、この瓦解した指揮系統において、戦局を優位にした者に、軍規の適用も何もないだろう。

以上のことはキミの判断次第。

別に動かなくても、本来この件に関してはまったくキミには無関係だ。

その代わり、成功したら最大のパフォーマンスになる。

国軍にもカリスマは必要だ。

上層部の腐敗に、最も失望しているのは現場の将兵だから、彼らの求心力となる者が必要だとは思わないか」

その言葉は、発せられた時に、すでに叶うべく運命付けられている。

言葉にした時に、すでに勝算があるのだ。

死の報告を受けた時、若いのに、やたらキスの上手い男だったことを思い出した。

恋心を、意識しなかったわけではなかった。何しろ、相手が悪すぎた。

男女になってしまったら、それ以上にはなれない。

その背中を追おうとしても、女では騎士団には入れない。

こうして、立ち位置を異にすることで対等を得るしかなかった。

むしろ、ラヴィロアの圧倒的な権力に並ぶ事などは出来はしないが、対等に変わらぬ友情を示してくれる。

ラヴィロアの良いところは、一度、友人と見なした相手には、とことん誠意を尽くすところである。だから、その悪巧みをみんな許してしまう。

そして、死してなお、人を動かす。

目を閉じて、彼の姿を胸に描く。

「そうね、これは死の王国への餞別として受け取って。

それにしても、うちの艦隊は通常五連編成重火器艦隊。兵力五万五千はクリアしているけれど、これで限りなく互角に近づいた程度。軽編成高速艦隊がもう一個艦隊あればようやく互角かもしれない。総司令官閣下と軍務大臣の仲の悪さで指揮系統が混乱しているし、相手はアギールなのだから、数合わせだけで勝ちっこではないでしょうけど」

ベリア・エルダ提督は艦隊にワープホールへの突入命令を下した。

第20話 人の為の神々への祈り

アストレーデの諸国において、その基盤となるものがアストレーデ聖典である。

アストレーデ聖典は、修道会によつて解禁聖典とよばれる一般教書と、国王が持つ各諸国の名を冠した非解禁聖典がある。

アストレーデ教として、一般的に信仰の対象となつている神々は、人のための神々と呼ばれ、友愛、情愛、慈愛、美、叡智、勇猛などの、倫理的な美德をそれぞれの神々が具現し、信仰の対象となつて
いる。

アストレーデの神々を創世した神々として、ダーリィティザールの至高三神がある。

その三神は、ダーリィティザール聖典によつて語り伝えられる。

至高の神々は、もとより人の生業には興味を持たない、宇宙の法則を維持する秩序の神々である。

黒龍たる神々の皇帝ティザールラザールを全能神とし、その妃にして姿を定めぬ、糸紡ぎ娘の意味を持つアルファンダザリを創造の神とする。このアルファンダザリは、人の姿を以て人の世に干渉する際には、鬼神アヤキと姿と名を変え、愚かなる人の肉と情を喰らう。そして、その人の愚かさを身の内に取り込み、地上に様々に気紛れなる試練を与える。

そして、三番目に位置する至高の神がティザールラザールに仕える宰相、『時の神』シエルである。

シエルは、至高の神として、宇宙の法則を守る一方、アヤキが引き起こす気紛れを修正する役を負う。

人の世にある諸々の悲しみと愚かさを愛するがゆえに、創造の神アルファンダザリは人に祈りの対象であるアストレーデの神々をもたらし、そして死の王国を立てた。

人は、人として他者を愛し、憎むゆえに、その心の平穏と安らか

なる暮らしを神々に祈る。祈りによって、人は心を和らげることができる。

ラーフェドラス国王シーヴァエドナ十二世カーレルは、王妃、王女とともに、東宮のプライベートな小礼拝堂で、修道会の慰霊の礼拝の時間に併せて、王宮付きの司教の祭礼のもとに礼拝を行った。

司祭の読む詠歌は、死の王国に至る道にある者の解放を解く。地上に残された者たちの、悼みの祈りのなかで、その失われた魂を、地の底の王宮へと導く。

国王は、あの時感じた危惧に対して、何の警戒も払わなかったことを悔いた。

あの時、カーレルの心情を汲み、テロで死んだ者たちへの礼拝を行った。

そして、今、彼を失ったことの悲しみに呆然とする。

自分の協力者を失ったことが悲しいのでは全く無い。

かけがえのない友人の父の命を奪った。

それが必然だったとはいえ、この宮廷に彼を招いたのは自分であつたから。

ラヴィロアの命の痛みと、そしてギルの為に祈る。

そして、自分に力のない悔しさに、奥歯を噛みしめる。

王妃のすすり泣きが、全身に突き刺さるような痛みとして聞こえる。

礼拝の後、国王は司教が去った後にもその場に残った。

そしてもたらされたのは、ファーマムール王国が国境緩衝域を越えつつあるとの報告であつた。

「ファーマムール王国とは、そのように非道な国か」
と思わず口から出てしまった。

国軍最高司令官は云った。

「混乱に乗しての派兵でございましょう。

抜け目のない男でございます」

「対応措置は、どうなっている」

「先日のご命令により、シエルダル星域には現在、二個艦隊が配置されております。

もう間もなく、第三艦隊によって敷いた防衛ラインに到達するでしょう。」

そして、もう直に援軍四個艦隊も当該星域に到着する予定ですが、かの艦隊は、軍務大臣直属の艦隊でありまして、我が指揮の下には恭順いたしませんので」

国王は、青ざめた顔で、国軍最高司令官を睨み付けた。

「一枚板でない指揮系統に、何の意味がある。」

なぜ軍務大臣は、卿に艦隊の指揮権を譲らぬ」

「軍務大臣は、王太后様のご機嫌を気になさっておられる。

軍の職務の経験はあまり無い方でございますから、自分のやっている事の意味がご理解できないのです」

「なら、何故、その事を報告して来ない。」

代替の案を諮り、早急に善処すべきが筋であろう。

我が国の国防は、かように腐り果てていたのか。

国防大臣を呼べ。直接、話を聞こう」

「お待ち下さい、陛下。」

この宮廷内は、現在、ルーサザン公爵の死によって、不穏な空気が漂っております。

率直に申しますなら、一旦はルーサザン公爵によって恫喝され、危機感を感じた一派を始め、そして、陛下への忠誠心を新たにした者たち、処分を恐れ、逃げる算段を取る者、そして、王太后様への忠誠を捧げる者、各人が己の利のために動いております。

あまり追い詰めますなら、牙を剥くやもしれませんので」

国王は、冷徹な目で国軍司令官を見て問うた。

「それで、卿は、どの立場だ」

「ファームムール王国の意図に反し、修道騎士団は冷静に事を進めております。」

早朝のうちに騎士団に弔問に伺いましたが、総司令官職の移譲も

昨日のうちに済ませ、指揮系統の停滞は殆どないように見受けました。

恐らく、あの方のなさった事です。

王国教会の再建の件も、殆ど停滞はございますまい。

この身の立場は、陛下あつてのものでございます。

元帥杖を預かりながら、誠に恥ずべきことですが、軍の指揮系統の混乱を収拾するのは、全軍の統帥権を掌握なさる陛下のお力に頼るべきと考えます」

「信頼しろと申すか」

「もはや、陛下の統帥権をもって、直々にお命じいただければと。勅命に従わぬのであれば、その時は処分するまで。」

そして、この身も、信頼に足らぬと判断なさるなら、いつでも任を解いて戴いて結構です」

「判った。卿が命令書を作成せよ。我が名をもって、勅命を下す」

「御意。」

それでは、こちらに国璽と王印をお願いしたく存じます」

国軍最高司令官は、書類を取り出した。

「用意がよいな。早速印を押してやる。執務室へ」

国王は、礼拝室を出た。

廊下で、国軍司令官に聞いた。

「これで間に合うのか」

「現状では間に合いません。」

第五、第七艦隊には、盾となりいくぶん時間を稼いでもらいます。援軍の四個艦隊総数十二万。

それで第二の防衛ラインを敷きます」

「修道会への援軍は要請できないか」

「騎士団は、人の生活のないところには派兵しないと返答してきております。」

恐れながら、国防は国の要。国防に破綻を来したのは、我が国の責任でありますれば、修道会の態度は、誠に当然の事と」

慌ただしく執務室の扉を開くと、国王は秘書官に国璽を出すように命じた。

「第五、第七艦隊は見捨てると」

「現状では、致し方ないかと」

机上に置かれた国璽に朱をつけて押す。

そして、指輪をはずし、王印も押した。

秘書官が薄紙を載せ、朱を吸い取らせる。

「もうよい。さつさと命を下せ」

完成した書類を差し出すと、国軍最高司令官は恭しく受け取る。

「それでは、これにて」

国軍最高司令官は出て行った。

第21話 シエルダル星域の攻防戦 2

アギール艦隊の国境緩衝域突破より二時間が経過していた。

第三艦隊は、散開して迎撃する体勢を整えていた。

第七艦隊は、その前方に位置する。

その時、第七艦隊ソーラス黒貴爵ファザム・ファンバイア提督の端末に個人メールが入った。

極めて濃厚なラブ・メールに偽装されたそれを、ファザムは互いに取り決めた解読法で変換した。

『ベリアより、ファザムへ。』

アギールを騎士団の敷くベルドール・ファラード防衛ラインまで誘い込みなさい。

修道会は、人の生活のないところは守らないのが教理。

なら、いつそ巻き込んでしましましょう。

当艦隊は、シエルダル緩衝域R2200地点に居ます。

第五艦隊にはそのまま散開布陣で囷を。

騎士団との防衛ラインに達した時点で、私が側面から包囲します。その気になれば後背も突くことはできるけれど、この戦いは相手を撃退することであって、殲滅することではない。

ラヴィはそうさせる為に、修道会をあの位置に布陣させたと思うのが妥当だわね』

ファザム・ファンバイアも、学年は違ったが予備学校ではラヴィロアとそれなりに交流を持った一人である。

「どうしてベリア姐さんがあそこに居るのは知らないが、確かにここで無駄死によりはマシだな」

ファザムは、第三艦隊サリユール提督に通信回線を開いた。

再度王命を前線に発信してから、国軍最高司令官ベリード元帥は

再度思案した。

間に合わないとしても、自軍を失うことは極力避けたい。それは、軍人としてというよりは、人としての感情である。

シエルダルに援軍として派遣を命じられたのは、第二、第四、第九、第十一艦隊であった。いずれも、本来は国軍として最高司令官たるベリード元帥の麾下におかれてはいるはずであるが、実権はラーフェドラス王国の古家、ダール公爵家に連なる軍務大臣ガールベル伯爵の支配下にあった。

ダール公爵家は、ミスチア王太后の婚姻に関わり、以後、王太后の権勢を支えてきた一門であるが、六年前に先代の当主を失ってから家督を継いだ当主は、王太后の権勢を傘に、軍部の勢力を握るべく、ガールベル伯爵を軍務大臣として送り込んだ。

国軍最高司令官ベリード元帥は、軍として国政のうえでダール公爵家の影響力からは中庸を守り抜きたい気持ちが高く、宮廷内の派閥争いにはやや引いた観はあったが、むしろ軍を守る者という立場を守るためにも、自分の立ち位置には非常に気を遣わなければならなかった。

よって、ベルドール・ファラード星域から王都までの途上の、ダール公爵領のあるフロベール星域、マーガット星域、ルシドラ星系の付近の方面軍を中部星域方面軍として、ダール一族の一人を総司令として立て、それを軍務大臣直下に置いたのは、宮廷工作上的の妥協の産物である。

今回、派兵をわざと遅らせているのは、先に国軍直下にある第三、第七艦隊が総崩れとなった後、圧倒的な戦力をもつて応戦し、手柄を軍務大臣の側で独占する意図があったからで、このままでは、当然、軍務大臣の思惑通りに事が運ぶことは必至。

最高司令官ベリード元帥は、苦い思いで王命を前線に送った。

国軍としては、騎士団に援助を断られた以上、建前として、防衛ラインを死守せねばならない。

しかし、防衛ラインが瓦解して、後退し、騎士団の防衛するライ

ンまで敵の侵入を許したとしたら、その時は当然、騎士団の戦力を頼ることができる。

本来は、後者の意図で、ルーサザン公爵はあの時、わざわざ強調したのではないか。

出来るなら、ベリード元帥は、中央星域方面軍に手柄を立てさせることは避けたかった。

そうなれば、軍務大臣の前線への発言権が拡大し、軍が軍として機能しなくなる。

現状、各艦隊への編成の適正化も行えず、変則的な編成の状態で、その機能にあつた配置さえ難しくなっている。

国としての建前上、騎士団への助力をおおっぴらに乞うことは難しいが、実質、そのほうがずっとましである。今後、修道会が国政に介入することを鑑みれば、その助力はむしろ軍規の肅正につながる。

防衛の任はお任せ下さいと、たしかにあの時、彼は云った。

幾度、考慮しても、最善の策というか、苦肉の策というか、自軍の損害を最小にするとしたら、手は一つしかない。

元帥は、開戦間近いであろう第五艦隊と第七艦隊に向けて、メールを送った。

「緩衝域防衛ラインは死守するに及ばず。

そこで援軍の到着を待ちながら戦力を温存しつつ深部へ誘導せよ」
建前上は、作戦司令書に騎士団と打つことはできない。だが、その意図を汲んでほしかった。

どの道、その時間稼ぎで援軍が間に合えば、軍内部の勢力関係はともかく、国防という用は果たす。

「太陽の神ライドと、戦の神タルラの恵みのあらんことを。

いや、タルラはアギールの神であるな。せめて、水の神、慈愛深きルーリアのお情けにおすがりしよう」

ベリード元帥には、あと祈るしかするべき事がない。

第三艦隊は散開陣形にて、アギール軍の第一派を迎えた。

敵は高速中型攻撃艦を中心とする軽編成遊撃艦隊であり、散開した陣形を波状攻撃によって攪乱しはじめた。

アギール艦隊は、本来はアギール族として商船を護衛する傭兵であり、通常は高速中型艦数隻による船団を組み、商船を護衛することを生業としており、艦隊規模で行動することは希である。

しかし、ひとたび族長であるアギール公爵の命が下れば、このように艦隊を組織し、公爵とその息子たちの指揮下に入り、民族の誇りをかけて戦う。

第七艦隊ソーラス黒貴爵ファザム・ファンバイア提督は、麾下の軽編成高速攻撃編成の特性を生かし、敵の先陣艦隊に対応する。

どちらも高速運用に特化した艦隊同士の戦闘である。

この間を利用して、ロルム・サリユー提督は、小型機動母艦を展開し、戦術機動編隊により壁を作りつつ、第三艦隊全体を徐々に後退させてゆく。

第一派の攻撃のあと、後続には十万の通常編成艦隊が控えている。いかに、第七艦隊が機動性に優れていようと、敵の能力はそれを上回る速度で攻撃してくる。一撃離脱の鉄則で対応しても、無傷でいられるわけがなかった。

「姐さん、待ち合わせ場所まで行くの、俺、無理かもしれない」

ソーラス黒貴爵ファザム・ファンバイア提督の呟きは、戦闘の轟音にかき消された。

こうして、シエルダル星域の攻防戦は幕を開けた。

第22話 アギール公爵の事情

その頃、ファーマムール王国の宮廷では、アギール公爵が長男ルーディージ候爵バレルによるシエルダル攻略の報告に、自らの君主の許に足を運んだ。

一人の貴婦人がこれを迎えるが、アシャの中からわずかに見える顔にやつれは隠せない。

アギール族君主トランザール大公の母、ルーリアである。

「バレルにシエルダル緩衝域に突入する命を下しましたので、報告に上がりました。」

リン＝ルーレンシア

アギール公爵は、君主に対する跪礼を捧げた。

「族長、サラディン殿下は、また不幸な星の民を産もうとしておられるのか」

ルーリアは、立つことを許し、自分は椅子に掛けた。

「シエルダル星域には人は居りません、が、サラディン殿下は、ベルドール星域の攻略を望んでおられる。」

もし、騎士団が介入せねば不幸は免れませぬが、食べぬ男がラーフェドラスの愚王に付いたとなれば、我が軍に容易に明け渡しはしないでしょう」

アギール公爵の地位は、実際はアギールという部族の長である。

アギール族は、龍の卵とも呼ばれるトランザール大公を君主とし、国土を持たず流浪する民として生きる。

帝国三百年の連邦支配の時期に、エストリダ緩衝星域に自治星域を許され、アギール族の長をアギール公爵として古家を構え、一時そこに定住していたが、エストリダ内乱によって、また国土を失い、傭兵組織として流浪の暮らしへと戻っていた。

そして、七年前、内乱で命を落とした前トランザール大公の妹、ルーリアを半ば拉致する形でファーマムール王国に招き、そしてそ

の息子である現トランザール大公を、建前は保護、その実は人質として、アギール族の傭兵組織の勢力を我が物とした。

「食えぬ男などと、不遜なものの云いはお止してください。」

あの方がおられなければ、エストリダはもつと悲惨な事になっていた。

我々は、あの方に戦を仕掛けてはなりません」

「ですが、トランザール大公がサラディン殿下の手元にある以上、我々はその意志に逆らうことはできません。

騎士団がルーサザン公爵の死によって混乱するものなら、今がラーフェドラス領内への侵出を図る好機である事には、私も同意致せざるを得ない。

もし、騎士団が、それほど脆弱な組織であり、そしてルーサザン公爵が、狡猾な策略家でなければの話ですが。

あの策略家が現在存命であれば、我が軍の損失は計り知れない。

リン＝ルーレンシアのお言葉がなくとも、その時は正面切つて戦うなどあり得ません」

アギール公爵は云った。

「存命であれば、と申しましたか」

ルーリアは問い返した。

「ルーサザン公爵は、自ら命を絶たれたようです。

エル・シドが、サラディン殿下より暗殺の命を下されたのですが、その罫を知りつつ、自ら踏み込んだと」

「何と。それは本当ですか」

「リン＝ルーレンシアには、サラディン殿下からのお話はありませんでしたか。

最も、自ら命を絶たれた件については、エル・シドには殿下に口止めしてあります。

殿下はご存じありません。

あの男のする事です。それなりの意図あつての事でしょう。

ルーサザン公爵とサラディン殿下の間の抗争に、我々は関わる必

要はありません。

ですが、今の状況下で、サラディン殿下にシッポを振る云われもない。

それより、クラウサリ様のご容体はいかがです」

おもむろに、アギール公爵は問うた。

ルーリアは、奥の部屋への扉を見ながら応えた。

「大公は、痛みに耐えかねておられる。

族長、私は、もう不憫で見てもおれませぬ。

青龍の名を名乗らせんがために、大公には自然戒律が掛けられておる。

青龍の卵に、シエルⅡダルⅡシャハールの聖典が揃えば、すべての国のアストレーデは、青龍帝の名のもとに支配される。

その権勢を求める野心の許に、我が子クラウサリは、トランザール大公としての身分を引き継いだ。元氣な子なら、それで良かった。エストリダ内乱の最後、大気変成弾から命からがら生き延びたルーリアであったが、内乱中に使用された特殊兵器の影響からか、内乱の後に産まれた息子には、先天性の疾患があり、そして、現在はかなり危険な状態であった。

アストレーデ諸国には、自然戒律という、延命に対する厳しい掟がある。

それは、人は自然にあるがままの寿命を神々から与えられており、その寿命の期間を曲げてはならないという掟である。

現在、外傷に関する医事行為は全面的に解禁されているが、延命そのものに関わる補助装置の体内への埋め込みは禁止されている。

そして、疾病に対する医療活動も、古家の血が多く入り、そして王族に近くなるほどその戒律は厳しくなるが、民間に対しては、現在、極端な延命でない限りの医療行為は施される。

ルーリアの息子クラウサリは、産まれると同時にトランザール大公として、龍の卵の名乗りを上げた。その後に疾患が発見され、医療行為が制限されたまま、現在に至る。

「十にも満たぬ子どもに、この苦しみはいかな試練であらう。

痛み止めすらもう効かず、それでも日の半日を薬の作用で意識がもうろうとして過ぐす日々。本を見て楽しむ事も、子どもらしい遊びで笑う事も何も出来ぬのに。

私には、もうそれが辛い」

嗚咽混じりの声である。

「帝国領内より、艦艇のエンジニアに偽装して連邦医を連れてきておりますが、ご決断なさいますか」

「決断しては、いけませんか」

「龍の卵としての価値と、トランザール大公の身分を失います。

そうなれば、サラディン殿下は、貴方と、クラウサリ様をご処断なさるかもしれません」

ルーリアは、いくぶん安らいだ声で応えた。

「この苦しみに比べれば、身分など、命など、いかほどの値打ちがあらう。

私はただ、苦しみに歪まぬ、我が子の安らいだ笑顔が欲しいだけ」
沈痛な女主人の痛みを知るアギール公爵は、再び跪礼した。

「一族の存亡をかけて、お命はお守り致します」

アギール公爵は、控えの間に待たせた従者を呼んだ。

第23話 シエルダル星域の攻防戦 3

フロベール星域惑星ドリにあるラーフェドラス王国中部星域方面軍において、作戦総参謀長ノアイユ候爵ユーラ・エランドラ准将は、方面軍総司令官カドル・ジェイド中將に対し、猛然と反論していた。「中將閣下に申し上げます。

これは明らかな王命違反でございます。いかに軍務大臣の命とはいえ、全軍の最高統帥権は陛下にございます。

現に、国境は突破され、緩衝星域の防衛ラインでは戦闘が開始されておりますのに、なおも宮廷の覇権争いなどのほうが大事だとおっしゃるか。

宮廷の腐敗に対して、最も憤っているのは誰かご存じでいらつしやるか。

現場で命をさらす兵卒をなんと思っていらつしやるのか」

二時間ほど前、緩慢に艦隊を進めていたフロベール星域駐留第九艦隊と、マーガット星域駐留第十一艦隊の両艦隊が、カドル・ジェイド中將の命令に違反し、速度を上げてシエルダル星域の防衛ラインへと急行を開始した。

第九艦隊作戦士官セリエル・ファンガラル作戦参謀と、第十一艦隊提督補ジェルガン・ダヴィーダ大佐が呼応して両艦隊の提督を拘束・監禁の後の仕業である。

カドル・ジェイド中將は、当然のごとく両名の拘束と両提督の解放を命じたが、両艦隊の將兵は、その命令に応じず、ことごとく造反者の指揮下に入ったのである。

断固とした処置をとるべく第二、第四艦隊に指示を出そうとした矢先、ノアイユ候爵ユーラ・エランドラ准将が造反者の弁護に回った。

「ノアイユ卿は、この造反者を許すことが、軍としての統率力の低

下を招くとは思わぬのか」

「それでしたら、現状がそうでございますか。」

本来、全軍の指揮権は陛下の統帥権を代行する最高司令官閣下が掌握するもの。

前線とは無縁の軍務大臣の下に置くべきではございません。

一つであるはずの国軍に、二系統の指揮系統がある事こそ、すべての混乱の元ではございませんか。

艦艇の補充序列すら付けられない現状を、最も苦慮しているのは、現場の将兵であることをお忘れ無く」

「それ以上は、上司に対する造反とみなし、卿も処罰するぞ」

「では、私は陛下に直訴申し上げるまで。」

わが一族が、王妃様の家系に連なる家柄であることをお忘れ無きよう」

ノアイユ候爵ユーラ・エランドラ准将は、ずっと腹にすえかねていた事柄を一気にまくし立て、すっきりした顔でほくそ笑んだ。

それは、宮廷貴族たちの狭い世界の勢力争いに倦んだ若手貴族・エリート軍人たちの本音でもあった。周囲の将校たちも、両名のどちらにつくとも、現すのを避けているようである。

対するカドル・ジェイド中將は当然のごとく苦い顔である。

「さて、両造反者にメールをしてくれ。」

両名の造反に対し、作戦総参謀長ノアイユ候爵ユーラ・エランドラ准将が支援すると」

「了解しました、ノアイユ卿。さっそくメールを送ります。」

それでは、私も造反組で宜しく願います」

副参謀がそれに賛同した。

すると、幾名かが手をあげ、ジェイド中將を取り囲み始めた。

「誠に、恐縮ですが、総司令官室に軟禁されていたきたいのです
が」

ノアイユ候爵の言葉を待つまでもなく、ジェイド中將は、作戦司令部から総司令官室へと連れ出された。

「第二、第四艦隊に告ぐ。

当中部星域方面軍の指揮権は、私、作戦総参謀長ノアイユ候爵ユーラ・エランドラ准将が兼任するものとする。なお、これは、総司令官ジェイド中将及び軍務大臣両閣下の賛同を得るものではなく、現状では、あくまで私個人の造反である。

我が指揮下に入るのを良しとせぬなら、強要はしない。

だが、前線の状況は非常に憂慮すべき状況にある。

王国としての将来を真に憂うなら、即刻シエルダル星域に急行して欲しい。

そして、これは王命でもある。

少なくとも、諸卿らが急行し、第五、第七艦隊の援護を行うとしても、それについて処分される事はないと解釈する。

むしろ、急行せぬ場合、王命違反として軍務大臣閣下以下が処分される際には、罪に問われることもあると覚悟されよ」

強要しないと云いながら、造反の強要であることは明白だ。

シエルダル星域の戦場では、なおも第一派による攪乱作戦が続いていた。

戦場域を投影するスクリーン上に、アギール軍の本隊が捕らえられ始めた。

余計な小型艦を持たないアギール軍先遣隊の速度に、第七艦隊は苦戦を強いられ、波状隊列を乱されつつあった。

ここに火器に重点を置いた敵本隊から、遠距離照射能力をもつファランクス・バースター砲を喰らえば一網打尽になってしまう。

第七艦隊ソーラス黒貴爵ファザム・ファンバイア提督は、各艦に射程距離を計測しつつ、射程に入れば、敵艦隊と混在するように通達した。

ファランクス・バースター砲は、単門で大型重攻撃に主砲として搭載され、それを複数隻並べ、斉射することで連槍射撃を行う。帝国工廠により五年ばかり前に開発された兵器であるが、ファーマム

ール王国にはまだ一般に配備される状況ではなく、有力貴族の下にある艦隊にのみ飾りとして配置され、本当に必要な辺境星域へは全く未配備であった。

アギール艦隊は、そのそれぞれが民間であり、兵器の購入からメンテナンスまで、部族としての最低限の管理はするが、それ以上は個人の責任によって任されている。そして、その兵器のメンテナンスにかかる費用は、契約する商船主よりいくらかの援助があるので、良い船主に恵まれれば、最高の装備を常に配備していられる。

よって、中・小型艦の費用がかからないアギール公爵は、艦隊の重艦船に惜しみなく投資できる。加えて、宇宙海賊などの実戦遭遇が最も高いことから、フランクス・バースター砲の半数は、実戦データを取るために帝国工廠から貸与を受けたものだった。

統制のとれた修道騎士団ですら、艦隊形態をとったアギール族との戦闘は避けたい所以である。

それゆえ、第五艦隊の後退速度に、敵本隊が追いついてはいけない。

ここは、第七艦隊がどうしても時間を稼がねばならなかった。通達はしたが、如何せん、敵艦隊の速度は圧倒的である。混在など出来ないかに思われた。

その時、スクリーン後方より高速度で味方の認識カラーの一団が接近してくる。

『こちら、第十一艦隊ジェルガン・ダヴィーダ大佐であります。』

ソーラス黒貴爵ファザム・ファンバイア提督、援軍にあがりました』

その音声に、張り詰めていた艦橋司令室の空気は一変した。

「大佐、提督はどうした」

『王命違反につき、私が軟禁いたしました。』

中部星域方面軍は、作戦総参謀長ノアイユ候爵ユーラ・エランドラ准将が掌握なさっています。ノアイユ卿は、国王陛下と、最高司令官閣下のもとに、軍務大臣らに造反したのです。

直に第九艦隊も追いついてきます。

この場合は、当艦隊が繋ぎます。

ソーラス卿におかれては、一旦後退して、陣形を立て直してください。』

第十一艦隊は、軽編成変則機動攻撃艦隊である。

高速機動母艦を多く有し、小型艦載機による乱戦を得意とする。

素早く戦場に展開された小型艦載機は、敵の高速攻撃艦を取り囲む。

いかに高速艦といえど、速度でいえば艦載機のほうが勝る。

第十一艦隊総数二万六千、第九艦隊総数四万弱。

装備の差はいかんともしがたいが、これで数の上では対等となる。潜伏している第五艦隊を含めれば、勝機は充分見込める。

ソーラス黒貴爵ファザム・ファンバイア提督は、深く安堵のため息をつき、第七艦隊の全艦を後退させた。

第24話 シエルダル星域の攻防戦 4

第五艦隊レムルス伯爵夫人ベリア・エルダ提督は、シエルダル緩衝星域に自軍の艦隊が集結しつつあるのを見守っていた。

当該星域にて援軍に入るのが妥当と判断し、小ワープを繰り返し、急ぐ。

何度目かのワープのあと、目標星域に到達したとたん、第五艦隊を太い光槍の束が襲った。

フアランクス・バースター砲の斉射である。

前衛の数隻の高速攻撃艦が犠牲になり、レムルス伯爵夫人ベリア・エルダ提督は、艦隊の進軍を止めた。

敵の本隊は、全面のファーマムール王国軍の本隊の壁ではなく、潜伏していたはずの第五艦隊にまともに撃ってきたのである。

「どうして。」

「私がこちらから来るのを、知っていたとでも」

ベリアは思わず口にした。

アギール軍ルーデージ候爵バレルは急襲してきた第五艦隊の行動を事前に察知していた。

実のところ、第五艦隊が通ったワープホールは、宇宙海賊や密輸業者には密かに知られていたルートだったからである。

もちろん、アギール族も、エストリダ緩衝域周辺の現在の居住地からファーマムール王国内への監視のつかないルートとして重宝している。

このため、不測の事態に備えて、出口星域に見張りを立てていた。前面では軽編成高速艦隊同士の派手な乱戦が展開されていたが、その向こうの敵本隊に対する攻撃のタイミングを計っていた。

「強行突入できない事はないが、どうしたものかね」

バレルは、背後にいた弟、ロアイユに訊いた。

「まあ、無理すれば行けないこともないけどな」

弟は応えた。

兄は艦隊の作戦運用を、弟は艦船の経済的運用をそれぞれ担当する。どちらも二十代半ばである。

「先鋭艦隊はどっちにしろもう下がらせたほうがよくないか。」

これ以上損害喰らうと、商船警護の受託先の契約に違反しちまう」
損失概算の金額が表示されているモニターを睨みながら続ける。

「やっぱり無理か」

兄はまた問う。

「あのワープホールが開いていることがバレてるって事は、騎士団も直接ここまで来れるって事だよな」

弟は、別の運用表を入力しながら云った。

「つまり、帰れと云ってるわけだ」

兄が言った。

「そうだよ。」

そっちの方から来た艦隊は、五連編成の完全装備。

ワープホールは川の流れのように一方通行だから、こっちからあつちに攻め込めるわけじゃないしね。

出鼻挫いたから、止まっているうちに引つ込むべきだろう。

正規軍とちがって、俺たち、艦船は各船主の個人所有だから、損害が大きくなると、組合でプール金を保証金として拠出しなきゃならないが、それには限度がな。

ファーマムール王国にとっつかまっているせいで本来の護衛船団での収入が減益なのに、これ以上どっから金持ってくる。艦隊編成に編入されている間は、保険が利かないんだ。

銀行も、一旦利子全納しないと、もう金貸してくれないぞ」

モニターに一気に、今回の艦隊行動で契約を一旦打ち切った仕事の一覧が流れる。

「あと、高速艦五隻ダメにされたら、今期は赤字だ」

「そんなに酷いのか」

「普通に国に雇われていたら、それなりの報酬もあるが、サラディン殿下はトランザール大公の身の代の代価として、俺たちに献身を求めているわけだ。最低限の実費、燃料代程度の額しか出さないよ」
「つくづく非道い男だな」

「だから、大気変成弾なんか平気で使うんだよ。」

これ以上、俺たちが頑張る意味があると思うかい、兄さん。

ま、あと二、三発、フアランクスを斉射して、そのデータを持って行ったら、帝国工廠がいくらか修理代は割り引いてくれると思うけどな。

それにしても、損益が出ていることを知らなかったの、兄さん」

「久々に艦隊指揮任されて、すっかり舞い上がっていたよ。」

しかも、今回はオヤジの監視もなかったし」

「だめだよ、兄さん。もつとしつかりしないと。」

次期族長には絶対選出されないよ、このままじゃ」

弟はため息をつき、父親に撤退の許可を願うメールを打った。

周囲の相談役の年寄り連中は、ほのぼのと二人を見守っている。

ルーディージ候爵バレルは、先鋭部隊を後退させ、威嚇のためにフアランクス・バースター砲を前面と側面、二方面に斉射した。

一方、ラーフェドラス王国軍は、第二、第四艦隊が合流し、三個艦隊による防衛壁陣形が完成した。

その前面に、体勢を立て直した第七艦隊と、第二、第十一軽編成艦隊が展開する。

理想的な陣形のうえに、敵の側壁に第五艦隊が迫っている。

総戦力二十万を越える理想的な状況である。

当該星域の全艦隊の総指揮権は、集結した全艦隊の提督のうち、階級が最も上位のロルム・サリユー提督に委ねられた。

第三艦隊のロルム・サリユー提督は、相手の進出が止み、先鋭艦隊が後退したのを見極め、全軍をフアランクス・バースター砲の射程範囲の外まで後退させ、攻撃中止の命令を下した。

数の上では充分すぎる内容であり、今やるべき事は、この場所を守ることである。

敵を殲滅する事ではない。

あくまで、傭兵艦隊相手である。経済的損失の大きい戦闘はしない。

そのまま、二時間ほど対峙した後、アギール艦隊は、ラーフェドラス王国軍に対して、通信回線を開くよう申し入れた。

ファーマムール王国との契約の打ち切りにつき、当艦隊は撤収するというものだった。

第25話 戒律と遵守の狭間

ファーマムール王国の宮廷。

アギール公爵は、奥の部屋へと入った。

小さな男の子が、輸液装置を装備したベッドに横たわり、深く眠っている。

先に入った子どもの母、ルーリアは、筋肉が削げて細く頼りない小さな腕を取り、云った。

「トランザール大公、もうお役目は終わりです。

私のクラウサリに戻っていいのですよ」

優しい声で呼びかけた。

アギール公爵は、廊下を行き来する侍女、侍従らに目で合図すると、その者たちは、音もなくベッドを取り囲む宮廷侍医と看護師らを拘束した。

「リン＝ルーレンシア。ドクターです。

一切の処置を担当して戴きます」

ルーリアは、医師を迎え、略式の挨拶を受けた。

「よろしゅうございますね」

医師の問いに、ルーリアは答えた。

「どうぞ、この苦しみから、私たちを解放してください。

おねがいします」

ルーリアは、立っていた位置を医師に譲った。

「それでは、ドクター、打ち合わせの通りに」

アギール公爵は、ドアのスイッチに手をかけた。

「私はサラディン殿下のところにご挨拶に。

穩便に逃げる手段を講じてまいります」

そう言い残して出て行った。

サラデインは、執務室に居た。

アギール公爵を待ちわびていたようだった。

「何処に行っていたのだ。この肝心な時期に」

「わが主のご容体がすぐれませんでしたので、見舞ってまいりました」

「何も、このような時に」

サラデインは嘆息した。

「それで、現在の状況はどうだ。

ラーフェドラス王国軍の援軍は、まだ到着していないようだが」

「指揮系統の乱れは事実のようです。

もう少し、統制されていると思いましたが。

王太后の元に遣わしたエル・シドの報告でも、最高司令官と、軍務大臣の仲は、表だって険悪なわけではございませんが、内情はそうとう亀裂が入っている様子でございます」

その時、アギール公爵の端末にメールの着信音が届いた。

懷より端末を取り出し、内容を一瞥するとメールと添付資料をメインモニターに投影した。

「我が軍は、そろそろ引け時のようでございます。

側面から、完全装備の通常編成艦隊が出現、敵本隊も、援軍四個艦隊で十分な防衛壁が出来ているとの事。

我が軍の経済的損失は、開戦前の八パーセント。十二パーセントを超えますと、実質、組織としての各人への補填費用の限界を超えますので、もしいくらでも勝算があるのならともかく、これ以上は単なる浪費。

生産的行為に繋がらない戦争は、意味がありません。

国家が行う戦争は蕩尽と破壊を惜しみません。しかし、実質として、国際的な経済活動を支援する側の我々がそれを認めることは、自らの存在意義を見失うというものでございます。

これにて退却致します」

「戦費なら、いくらか負担するが。

「一応契約だからな」

「誠に恐れながら、それは契約中の話でございます」

アギール公爵は、恭しく頭を下げた。

「我が主、トランザール大公は先ほど身罷りました。

今日まで、トランザール大公の保護を戴いていた我々でございます。その代償として、殿下の個人的な兵力として、お役にたつことに務めてまいりました。

ですが、トランザール大公亡き今、我々は殿下のお役目を戴く謂われも無くなりました。

よって、アギールと殿下の間には、もういかなる契約もございません。

リン＝ルーレンシアともども、この宮殿からの退出をご許可いただきたい。

アギールの者はアギールとして、一族で葬儀を行いたいのです」

充分に時間を稼いだと見たアギール公爵は、サラディンにそう告げた。

「トランザール大公が亡くなったというのは、事実なのか」

「どうぞ、ご自身でご確認を。」

リン＝ルーレンシアが、痛みに苦しまれる公を見かねて、認定医師を呼び安楽死をお選びになりました。

元々、細い命を無理矢理引き延ばしていたのです。

これ以上は自然戒律に違反する。違反すれば公はすべての称号を失う。

自然戒律を遵守しても、もういくらも命は長らえることは叶いませんでした。

そのことは、充分ご承知だったのでは」

サラディンは、鬱積した表情だが、感情を堪えて静かに云った。

「わかった。

ひとまず我が目で確認しなければ。だが、私は、リン＝ルーレンシアの身柄も保護していたつもりであるが」

「我々は、アギールでございますれば、トランザール大公にお仕えするものであります。」

いかに、前トランザール大公の妹君であり、無き公の母上様でありまして、トランザール大公への忠誠を越えて、その方自身をお守りする義務はありません。

もし、リン＝ルーレンシアの身柄をこのまま殿下がお預かりしたいと仰せなら、どうぞご随意に。

それでは、私は、即時停戦と退却の命令を出します。

そして、艦隊をファームール領内を通ってタリアンファットへ向かい、そこで解散させます。

さすがに、現状でラーフェドラス王国内は通れませぬから。

それくらいは、ご許可して頂けますね」

アギール公爵は、サラディンの無言を了承として、サラディンを伴いルーリアらの幽閉されている部屋に伴った。

ベッドの上の少年には、もはや血の気もない。

サラディンは、少年に手を触れ、そして心臓の音を聞いた。

そして、すでに拘束を解かれた周囲の宮廷侍医らに状況を訊いた。

「はい。」

そちらの医師が、我々が拘束されている間にトランザール大公に何やら輸液を」

「お前たちも確認したのか」

「はい、現在のバイタルモニターでは、生体反応はございません」

「それでは、致し方あるまい」

サラディンは、腰にした儀礼用の剣を抜いた。

そして、少年に突き立てようとする。

ルーリアが小さく叫んだ。

その剣を、アギール公爵が素手で受け止める。

「何をなさいます、殿下。」

いかに身罷られたとはいえ、我が主の身体に傷をつけますのはお控えいただきたい」

制したアギール公爵の手の中から血が滲み、少年のブランケットの上に滴った。

「古代であれば、首を切り落として確認したものを、ただ剣にて貫くのなぜそう慌てて止めねばならぬ」

「お母上の前でございます。リン＝ルーレンシアの気持ちを考えれば、かような真似は出来ぬはず。」

それとも、サラディン殿下は、人としてのお情けはお持ち合わせでいらつしやらぬか。

とても慈悲深きエストリダ大司教の兄君とは思えぬ所行でございますな。

我々は、この葬儀を、わが同胞の本拠を置くタリアンファットに行つ所存でございますから、当然葬儀はエストリダ大司教にお願いするべきと考えておりました。

もし、この幼い我が主の身体のお見止めになり、その所以をお尋ねになられたら、私は真実を申し上げるが、よろしいか」

弟の事は、サラディンには大きな弱みであった。

アギール公爵は、その事を良く知り尽くしているので、交渉材料にはなる。

「仕方あるまい。」

あいつの名を出されてはな」

「それでは、退出のご許可を」

「手荒な死亡確認は赦してやろう。」

その代わり、二十四時間宮殿内にて留め置き、再度死亡を確認した後、退出を許可する」

「では、リン＝ルーレンシアの処遇はいかがなさいます」

「好きにするが良い」

サラディンは苦い顔で部屋を出て行つた。

アギール公爵が連れて来た医師、彼の名はオズといい、修道会が示した自然戒律の違反の境界を認定することのできる医師である。

自然戒律を犯し、延命治療を行う、あるいは、行ってしまった場合、その身分に留まることが出来るか否かの判断をする。

彼は、アギール公爵の依頼を受けて、自らここまで来た。

そして、今、少年を仮死状態までバイタルサインを落とし、死を偽装した。だが、この状態で長く置くことはできない。

サラデインは、仮死偽装の可能性を考慮して、二十四時間の時間を設定したのである。

そして、周囲には本来の宮廷侍医らがあり、工作は難しい。

「さて、宮廷侍医の方々」

ドクター・オズは云った。

「さすがに、私を売るような輩はおらぬようじゃな」

ドクター・オズは、少年の身体に別の措置を施すと、一時間ほどでバイタルサインは元に戻り、安定した。

そして、侍女に変装していた者が押してきたワゴンの下の、引き出し部分をゴトツと外した。そこには死体とおぼしきものを取り出した。

「これは、連邦領内から手に入れたバイオロイドで、顔だけすぐ替えた」

ルーリアは、それを見て、顔をそむけた。

「アギール公、これをお持ちくだされ」

ドクター・オズは、バイオロイドをアギール公爵に手渡した。

そして、ベッドで眠る少年を抱き、箱の中に入れた。

「少々きつうございますが、暫くの辛抱でございます」

少年は、薬によって深く眠ったままである。

小さくなっている少年はすっぽりとその中に納まり、ドクター・オズはワゴンを元の形に戻した。

一方で、アギール公爵は、バイオロイドをベッドの上に寝かせた。

宮廷侍医たちは、一連の事をただ見守るだけであった。

なぜなら、ここで通報すれば、ドクター・オズが捕らえられる。

宮廷侍医らも、王族、古家の診察にあたるので、認定医が何名か

いる。

彼らは直接でなくても、ドクター・オズの弟子でもあるのだ。そしてまた、医師として、現在のトランザール大公である哀れな少年に、真に同情する気持ちもあるのだろう。

ドクター・オズは、変装した侍女の数名にワゴンを押させ、退出させようとした。

「廊下には、この部屋を見張る監視がいるでしょう。」

私が一緒にします」

宮廷侍医の一人が名乗り出た。

「さすが、いい心がけであるな。それでは、お任せしよう」

ドクター・オズは彼らを行かせた。

そして、後を追おうとするルーリアを止めた。

「さて、リン＝ルーレンシア。」

貴方は時間ぎりぎりまでここに留まらなくてはなりません。

その間に、トランザール大公をできるだけ遠くまでお逃がしします。

あなたは、いうなれば囃。

ここに大公がいるという証であります。

あのバイオロイド、いささか気色の悪いものではありませんが、あれを大公と思つて大切になさるのです。

どこまで逃げられるか、それは貴方にかかっています。

大公は、宇宙艇まで逃げ延びたら、私の部下が早速延命処置を致します。

絶対に、またお引き合わせしますので、どうぞ我々を信じて戴きたい」

ルーリアは頷いた。

アギール公爵とドクター・オズが見守る中、ルーリアは母としての務めを果たすべく、ベッドの横に座った。

六時間後、アギール公爵の端末が鳴った。

一同は、バイオロイドを置いたままその場から脱出した。

第26話 パラダイムの瓦解

シエルダル星域においての危機的状況は回避され、国王はようやく緊張から解放された。

執務室において、国軍最高司令官より中部星域方面軍の造反組の話を聞き、自分の国政の正常化への未来を感じた。

大きな危機が、むしろ国の膿みをそぎ落とす自浄作用を招いたのである。

積極的な援軍を拒否した修道会、その方針を決定したラヴィロアに、そこまでの計算があったかどうかは知るよしもないが、修道会が国境線の緩衝域にまで援軍の手をさしのべていたら、軍の造反は無かっただろう。

国王は、造反者たちの立場を守り、王命に違反しようとした者たちを処分しなかったが、宮廷はまだ若輩の国王に対して服従しているわけではなかった。

むしろ、今回の後から発した援軍の催促は、国王を補佐する任に当たる摂政と、諸大臣をないがしろにする独善として、王太后派の格好の攻撃対象となった。

まして、中部星域方面軍の指揮権を持つ軍務大臣の頭越しに行われたことは、国軍最高司令官の進言があったにせよ、看過されるべきものではないとして、造反して援軍に向かった者たちに対する処遇に対する配慮も、思うにまかせない状況であった。

国王は、造反組が軍務大臣によって処分されるのを黙って見ているわけにもいかず、王命違反をした者たちの処分を保留にする代わり、造反組の処分も保留という、宙ぶらりんな状況のままを余儀なくされた。そしてそれは、現実的には、軍務大臣が大人として折れたという形になり、若い王の独断の浅はかさをアピールする格好の材料となった。

ひとまず、国王にできる事は、修道会が正式に元老議会に介入し

てくるまで、現状の保留を続けることである。

だが、長く国政と議会から遠ざかっていた国王にとって、不用意な言葉の運びや、言い方につけ込むような議論の応酬はひどく緊張感と集中力を要するもので、時として逃げ出したいような衝動に駆られないわけではない。

今は、国軍最高司令官のベリード元帥をはじめとして、王妃の一族に連なる議員など、相談相手として信頼できる者たちがいないわけではないが、ベリード元帥は軍人なので宮廷内での人間関係などについてはともかく、政治そのものに対する相談役にはできず、また、多くの意見を聞いて回るようでは為政者としての威厳を確立する事は難しい。どうもいま一つ有力な片腕とできる人物が居ないことが弱点であった。

この不利な状況下で、どこまで出来るのかは自分でもわからなかったが、一度開いた扉である。今更、閉めることはできない。

せめて足場が固まっていたらと思う。

そして、国王は、忙しさの折々に、父親を失ったギルの事を考えていた。せめて、会って様子を見たかった。

掛けるべき言葉は、まだ見出せなかったが。

気がつけば、あの日、最後にラヴィロアに会ってから一週間が経っていた。

あと数日したら、ギルの公爵位の継承の承認式をする。

その日に会える。

その日まで会えない。

国王は、政争と嫉妬から彼を守るために、ある事を決意した。

次の王位の継承を現時点で明確にする事。

ギルに次王としてアストレーデが開示されていない事が明確であれば、彼はこのまま修道会にすることが出来るし、宮廷の政争は開示された者にいくだろう。

しかし、アストレーデ圏の人の寿命が五、六十年だったとしても、国王はまだ十七才であり、天寿を全う出来ないか、あるいはアスト

レーデを失う事態に陥らない限り、まだ継承者は明確とはならないだろうが。

現在、この国の王位の継承の序列は、第一位が王弟のランディラ公爵ガーレン・グレル、第二位が叔父のマルファル公爵グラノー・カレルナ、そして第三位がギルの順である。

王太弟のガーレン・グレルは、王太后が宮廷より遠ざけるために自分の領地にいる。そして、叔父マルファール公爵は王太后に追われるように宮廷を去り、現在は帝国大学でラーフェドラス王国史の教授を務めている。

もし、叔父に降りるものなら、そろそろ聖典は国王にそれを告げるだろう。

アールシャド皇太子の即位式と同時に、皇后が立つ。

そのために、叔父は皇帝家の差し向ける妹王女シェラを迎える一行に加わり、王宮に来る。

その際の一連の儀式には、弟、ガーレンも来るだろう。

ギルは、当分帝国教会の預かりとなることに決まっていた。その時期がいつからなのかは国王には知らされていないが、一旦帝国に行ってしまうば、簡単に会う事も容易ではないだろう。

ゆえに、国王は、承認式の日にはギルに現状でアストレーデが継承されていない事を確認した上で、他の二人を試すことにした。

それは、別の意味では、国王としての残りの時間を測る事とも同義である。

アストレーデの開示の時点は、継承が行われる十年程度前から直前、あるいは国王の死後の場合もある。

もし、次の者に継承されていたら、国王としての在位は十年が限度ということになる。

玉座にある時間としては少なくはないが、それが人生の時間だとしたら、少し短いだろう。

いずれにしろ、政争は当分続く。

ひとまず今は、目の前の事。

議会での議論の際に、できるだけ有利に論を展開するためには、より多くの現場の情報を必要とする。

王太后派に反発し、国王に恭順している議員らがかき集めてきた情報の全てに片っ端から目を通し、それを理解し、議論できるまでに消化することは容易ではない。入力した情報を頭の中で複数と関連づけ、整理する。

座って、考えている時間も、自分のために割ける時間は少ない。敵に囲まれた議会で、玉座に在って涼しい顔で王としての威厳を保つ。

地道に下準備を積むことがその一助になるのなら、努力を惜しんではならない。

その頃、シエルダル星域に集結した艦隊は、一旦ベルドル星域まで撤退した。

アギール軍が離脱し、ファーマムール王国との契約を解除した以上、サラディン元帥が個人的に派兵できる事はない。ファーマムール王国とて他国へ国軍を動かすとなれば、議会の承認を得、国王の承認を得るという一連の手続きが必要となるので、こちら側が国境緩衝星域へ過大な配備を敷かない限り、単純に攻め入ってくることは考えられない。

本来、こちらに来る命令が一切下りていなかった第五艦隊を除き、引き続き他の艦隊はベルドル・ファラード星域での待機となった。レムルス伯爵夫人ベリア・エルダ提督は、命令違反を問われ、第五艦隊とともにハバドル星域に帰還後、单身王都に赴き、一連の行動の釈明をせねばならない。

ハバドル星域に向かう前日、ベリアは第七艦隊ソーラス黒貴爵ファザム・ファンバイア提督の訪問を受けた。

「上手く乗せられてしまったわ。あの男に」

ベリアが愚痴ると、ファザムは云った。

「姐さんがあそこにいるとみんな知っていたから、造反なんて事が

できたんだろう。

馬鹿な宮廷人らのおかげで、本来重要な国境線の守備軍にまともな補充がなかったんだから、姐さんの通常五連の完全装備の艦隊の存在は、士気の維持には重要だったと思うよ。

きつと、査問会になったら、中部星域方面軍のノアイユ卿が弁護してくれるよ。

少なくとも、しばらく降格、謹慎として地上勤務を余儀なくされたとしても、国王陛下が宮廷の膿みを掻き出した後には、きつと立場は回復するさ。

陛下も、いつまでも子どもではいらっしやらないし、いままで迷っておられたのだとしても、十七才の男子なら、普通は世の中に反発するか、趣味に傾倒するあまり引きこもりがちな年頃じゃないか。大人になる覚悟をなさったのなら、我々は手足として、それにお仕えするのみ。

降りかかる火の粉をよけるためにかざした手に、多少のやけどを負うくらいなら当たり前だと思うよ」

「そうね、そう思うことにするわ。」

予備学校時代の問題児としては、陛下の若さゆえのご心情も痛いほどに理解できる、と」

相手を揶揄しながら、ベリアは思った。

少なくとも、軍内部は、砂上の楼閣ながら安定を保っていた基盤が露わになった。当分は統制を失い、混乱するかもしれないが、いずれは再編されるだろう。

「ところで、今回のことで、貴方の奥様もご心配でしょうから一度お伺いするつもりだけど、お渡しするものはない？」

「そうだね、今はない。」

ただ、ソーラス黒貴爵家としては、現状は中立の立場を保つべきだろうから、社交は考えて行動してほしいと。

貴族の立場としては、レムルス伯爵家と連携はしたいが」

「私の立場は、今回の件で国王派になってしまう。」

我が夫としても、事態の静観をしたいところでしょうけど、今回の独断の件、我が伯爵に何と釈明しましょうか。

軍務を拝命した家系なのに、誰も軍人にならなかったで私を嫁にしたのだから、一連託生という事にしていただくしかないかしら」今まで、レムルス家の一員としては放任されていただけに、軍事法廷よりもどちらかといえば気が重い。ここ三年ほどは、挨拶以外のまともな言葉も交わしていないのだ。

軍人としての立場、貴族としての立場。

守るべきものは多い。

普段は意識しなくても、お互い貴族の一員である以上、背負っているものは自分個人ではない。

とりわけ、候、伯爵家は、上に古家の当主である公爵家を戴く。

レムルス伯爵家は、ルーサザン公爵の下にある。

単純にルーサザン公爵に従えば問題はないが、当主であつたラヴィロアは死んでしまった。

後を継ぐガルディア・ジャザイルはまだ十五才。

貴族としても、宮廷内での立場なども確立はされていない。

誰が後見として付くのか、それ次第である。

ラヴィロアは、十五の時にはもう後ろ盾など必要はしなかった。

うかつに私利私欲を持って近づく大人を、持ち前の狡猾さで叩き落とした。

まだ少年と呼べる年頃で、暇を持て余した上流貴族の貴婦人たちのたちのアイドルになっていたのは伊達ではない。持って生まれた能力のひとつ、その類希なる容姿を利用していたに過ぎない。

だが、彼は、自分の子にはそういう彼の貴族としての生き方を全く継承させなかった。

平民の子どもの親としてはまともな行為である。

ラヴィロアは、それくらい深く我が子を愛していたのだらう。

彼は、骨の髄まで、最も古家の当主らしい生き方をした。

だが、それは誰よりも古家の全てを憎んでいることの証でもあつ

た。

ベリアはそれを見てきた。

ラヴィロアは、ベリアに対して自分のそんな一面を晒すことによって起きるであろう一つの価値観にさえつけ込んで、利用した。

そして、それをベリアが赦すと確信している。

「ねえ、ファザム」

ファザムが席を立ったとき、ベリアは云った。

「ラヴィが、おとなしくお墓で眠るかしら」

「…………… そうだな、それは無理だ。」

死の王国を制圧するかもしれないね」

小型高速艇に乗り組むファザムは、その時に浮かべたベリアの複雑な顔に何を感じただろう。

笑顔を作ろうとしたが、出来なかった。

去り際にファザムは、ベリアの手の中に真新しいハンカチを押し込んで行った。

友人として、ベリアの心情を理解しているのだろう。

王都までの帰路のただ一人の時間のためのプレゼントであった。

第27話 継承式の前日

そして、少年は、半ば夢の中にいるような状態で日々を過ごした。慰霊の礼拝の最中も、その後、弔問客への応対も、自分の中では遠いところでの出来事のように感じた。

父の遺体はまるで作り物のように美しく処理されており、それが生きていたものとは信じがたかったし、お互いが修道士であり、毎日顔を合わす生活ではなかったせいたからなのだろうか。

国王は、慰霊の礼拝に出ることを望んだそうだが、それは叶わなかった。

そして、その最中にシエルダル星域への侵攻が始まり、騎士団はにわかに慌ただしい気配があったが、それもじきに落ち着いていた。

遺体は三日の間大聖堂に安置され、一般の弔問を受けたあと、一旦ホージュオン島のルーサザン公爵家の屋敷に移された。

その後、一族によってルーサザン公爵としての葬儀が行われたが、それは一族の流儀に従って、粛々と行われ、少年はただそれを眺めているだけだった。

それでも、いつもと違う時間の流れは、少年を必要以上に疲れさせ、そして、はじめのうちは気持ちが張り詰めて眠るどころではなかったように思うが、そのうち深い眠りに就くことができるようになった。

そして父の死後から十日後には、少年は王宮に赴き公爵位の継承の認定式を受け、そのあと少年は総教主の許に行き、騎士団の継承を宣言する。そして、修道騎士団に行き、騎士団長として、騎士団員の前に立つ。

その前日、家令のザリムが、少年に制服を差し出した。サイズの確認のために、その服に袖を通した時、少年は初めて涙を流した。

その制服を着る者が、自分である事が、全ての現実の象徴だった。

修道騎士団、その古き名は黒龍騎士団という。

最初、まだトレア星にラーフェドラス王国があった頃、王位の篡奪を危ぶんだラーフェドラス国王は、王弟エリンラーデ公爵カーラギルスに七万二千の兵を与え、大陸の反対側にある、当時勃興しつつあったタルラード帝国に援軍として派遣した。その際にエリンラーデ公爵が王より与えられた自らの軍団に与えた名前が黒龍騎士団であり、その後に組織された聖アムルテパン修道会を守護する任をエリンラーデ公爵が自ら負った。

騎士団が修道会の麾下に入るのは、これよりずっと後のことであり、騎士団は、修道会の麾下に置かれるようになって、エリンラーデ公爵家の持ち物であり、そして、公爵家の名前がルーサザン公爵家となった今もそれは変わることなく守られている事である。

ゆえに、当主は、その地位を守るだけでなく、修道士として、軍人としてすらも一切の資格を持たなくても、騎士団長を名乗ることができる。長い歴史のうちには、ルーサザン公爵家のうちの多くの当主が、ただ立っているだけの騎士団長であり、一介の古家の貴族に過ぎなかった。

ラヴィロアが王女と結婚し、その立場を守るために規範の古家の因習や、アストレーデの戒律と戦わなければなくなるその時まで。

少年は、有能すぎる父の後を継ぐ自信はない。

父は、少年の年には、貴族としてそれなりの足場を確立できていた人だった。

少年には、何もない。

生涯を修道士として生きるように、父が定めたものを当然として受け入れてきた。

だが、次のルーサザン公爵を誰が継ぐのだろうか。

少年は、王位篡奪の意志の放棄としての、修道宣誓なのだと思っていた。

一族に連なる候家、伯家の中から選ぶのか。

少年は呆然とした。

古家の貴族としての生き方の何一つを、受け継いでなかったからである。

総教主は、自由交易惑星タリアンファットにあるエストリダ教会への恒星間通信を開いた。

対応したジョーイ・ルイスに、総教主は尋ねた。

「エストリダ大司教の具合は、どうだ」

「先日のおちらへの旅でお疲れなのでしょう。あまり思わしくありません」

「マブリック大司教の葬儀の件だが、何か申しておったか」

「ご出席にならないそうです。」

「この件に関しては、一切の慰霊も、服喪もなさらないと」

「詳しい次第を存じておるのだろうか」

「いえ。」

ですが、あの方を一番ご存じなのは、ユーリです。

おおよその察するところがおりなのですよ」

「親友のエストリダ大司教が来ないとは。」

いぶかしく思う向きもあるだろうな」

「宇宙船での長旅は、普段の生活には大した支障のない程度の病でも、それなりに体力を消耗するものです。無理はできません」

「ユルジサンドは通信には出られぬか」

「祈洞に籠もっておられます。」

あの方の罪は、己の罪だと。

出てこられたらお伝えします」

「頼む」

総教主は通信を切った。

本当は、ラヴィロアの死について真実を問いたです気持ちがあつた。

恐らく、エストリダ大司教ユルジサンドは、真実をある程度把握

しているのだろう。

そして、大司教には、あの事件についての王宮近衛隊からの報告書が来ていた。

事件の首謀者を突き止めた。

このごろ雇われた庭師が、顔も見知らぬ宮女から金を渡されて仕掛けた事だとなっている。

地雷を仕掛けたのがこの者であったとしても、複数の仲介者をたどればいずれ、それなりの貴族の名が出るだろう。

いずれにしても、その末端の者には、目先の欲以上の罪はない。

国王に対する嘆願書を作成した。

どうせ王太后派が絡んでいる事である。

当事者である修道会が、地雷を仕掛ける行為のみを裁き、ラヴィロアの死、それ自体は神の意志であるとして国王にラヴィロアの死自体の罪の不問を望めば、その件はそこで終わらざるを得ないだろう。

だが、以後、同様の事件の誘発を招くことにも成りかねず、処遇は誠に難しい。

総教主は、嘆願書の文面に今暫く悩まねばならなかった。

第28話 聖典の啓示

国王は玉座に在った。

古家である公爵家の継承式となれば、それなりの格式のある慶事であり、通常の宮廷であれば、それなりの華のあるものであるが、その日の宮廷はやや華やぎを欠いていた。

わずか十日前、この宮殿の中で起こった悲劇によりもたらされた継承に、華やかさを求めるのが無理なのだろう。

現在、ファーマムール王国には五つの古家がある。

序列順に、国王自身の古家であるランディラ公爵家、ルーサザン公爵家、叔父が婚姻により婚家から引き継いだマルファル公爵家、王太后派を束ねるダール公爵家、そして、王妃の実家のエイオラ公爵家である。

先の戦役での軍部内での造反や、事件で差し障りがあるらしい王太后派の古家に連なる一族は出仕せず、役務上、やむなく出る者や中立を守る者たちも多くは夫人の同伴を控え義理ばかりとの体裁を繕った。

ルーサザン公爵に連なる貴族らも喪章をつけ、色を抑えた装束であり、華美すぎず、かつ場に相応しい色彩を添えているのは王妃の一族のみである。

それは、国王カーレルにとっては最も親しく、大切な友の門出の儀式としては、誠に不本意なものだ。

あの日、アストレーデ聖典が変じた祝祭書が王の傍らの書台に置かれている。

国王にとって、聖典に次の継承者を問うことは初めての事だった。

継承の宣誓の際に、ギルが祝祭書に手を触れただけで、国王にはその聖典が触れた者に開示されているのかどうか知ることができるはずである。

聖典が何も告げぬ事。

それを祈るしかない。

たわいもない噂話にさざめいていた広間に、修道騎士団の制服を着た少年が姿を現すと、一同は中央の道を空け、左右に控えた。

亡きルーサザン公爵ラヴィロアと同じ服ながら、その表情は天と地ほども違う。

この突然訪れた事態に戸惑い、やや疲れた様子の少年の心中を思うと、早々にこの場を終てやりたい気持ちになる。

少年がまっすぐ国王の前に進み、そして跪礼を捧げる。

「我が父、ラヴィロア・ジャザイルの逝去により、我、ガルディア・ジャザイルが国王陛下に申し上げます」

少年の声は、最初はややぎこちない様にも聞こえたが、充分張りのある声だった。

「私、ガルディア・ジャザイルは、父、ラヴィロア・ジャザイルの後を受け、国王陛下のご承認のもと、ルーザザン公爵の位、およびその任務と領地を継承いたします」

やや気持ちが落ち着いていたのか、詠唱隊において鍛えられた声は、玉座の間に心地良く響く。

「今後、一切を国王陛下に仕える者として、陛下の名代として修道会に帰衣し、代々ラーフェドラス王家の職分である黒龍騎士団の維持者として、ラーフェドラス王国教会修道騎士団の職務を守ることを、我が王国の守護神たる黒き龍、ティザール＝ラザールの前に宣誓するものであります」

国王は、しきたりどおりの少年の口上が終わるのを待って、祝祭書を手にし、玉座より立ち、段より降りた。

「面を上げよ、ルーサザン公爵の家名を継ぎし者」

国王は、祝祭書を片手に持ち、少年の前に差し出した。

「ここに手を置き、汝が忠誠を」

少年は、祝祭書に手を置いた。

その瞬間、国王の周りの時間が凍り付き、祝祭書が本来のアスト

レーデ聖典の形に変化した。

国王の周囲の情景が消え去り、漆黒の空間に、少年と、ただ国王が居る。

そして漆黒の空間は夕刻の朱色の砂丘となり、少年と国王も朱に染まる。

カタリ、カタリと古代の戦車の音がする。

カタリ、カタリと幾たりもの戦車の音がする。

砂塵を巻き上げ、軍団が駆け抜ける。

干からびて朽ちかけた馬が引くのは、ミイラとなつた戦士が駆る戦車。

死の王国の軍勢が、大地を駆け抜け、国王と少年の周りを駆け抜けてゆく。

その中で、ただ一つ、ミイラでない者に乗せた戦車が国王の前で停まった。

漆黒の髪、漆黒の瞳、生者を嘲笑するような笑みを浮かべた青年が、凍り付いたように固まつた国王の手と少年の手の間にあるアストレーデ聖典に触れた。

聖典は姿を変え、漆黒の表紙に黒龍の紋章の書物となつた。

ダーリィティザールの書である。

「王よ、汝が王国はいずれ消え去る。

汝が国は、黒龍紋印を持つ者の国となる。

この者、黒き龍への供物。

鬼神アーヤキがこの者の命を喰らい、魂を喰らい、この者が心を失ったとき、時の神はこの者の内に依り、この者は神の物となる。

心得よ、汝が王国は、この者の手に引き継がれたる

そして、汝に、我が名を明かそう。

死の宰相、カーラギルスと」

次の瞬間、周囲の色は元に戻った。

「我はラーフェドラス王国に属する古家として、我が王国と、国王陛下に永劫の忠誠を」

少年の声が、国王の耳に届き、国王は現実へと引き戻された。手の中にあるのは、元の祝祭書である。

「汝の継承を承認する」

国王は、不思議と幻影を見る前と同じ気持ちでその言葉を発した。少年には、表情の変わった気配は全くなく、今、何が起こったのか気づかぬようである。

そして、国王は、祝祭書を胸に抱いて、少年にだけ聞こえる言葉で言った。

「少し時間がある。きみの時間が許せば、余の書斎へおいで」

国王は、玉座に戻り、少年は退出した。

危惧していた事、それも最も悪い形での。

国を失うと告げられながら、国王はその予言を、とうの昔に知っていたかのように動揺無く受け止めている。

継承が国王に告知されたからには、国王はそれを聖典継承開示書として修道会に提出しなければならない。継承者を明示することによって、要らぬ継承争いを避けるのが目的である。だが、見せられた啓示は、とてもその全貌を明らかにする訳にはいかない。

そして、国王は、少年と会う機会もいくらか残されていない事を悟った。

継承権が少年に在ると王太后に知られたら、少年は無事では済むまい。

修道会に届けるのは、少年が安全な場所、帝国教会に移籍して落ち着いてからが良いと判断した。

『いずれ』の日。

その時がいつかは分からないが、十年以上先ではあり得ない。願わくば、戦禍の無い国の変化であれば良いと思う。

この国を引き継ぐ者となる大切な友が、少しでも安寧に国を治め

ていけるように。

せめてこの腐敗した官吏と貴族たちを一掃していくのは自分の仕事だろうと思った。

そして国王は、それまでの日々と変わらぬ態度で、少年を書斎に迎え、王妃とともにひとときを過ごした。

「ギル、いや、もうルーサザン公と呼ばなければならぬな」

国王が云うと、少年は、

「いえ、公的な場でなければ、今まで通りに及び下さい。

あの、僕は、ほとんど宮廷の事もわからないし、古家の当主として、どう振る舞っていいものかも知りません。

父の真似をしようにも、僕にはその器量が無いし」
と云った。

「亡きルーサザン公爵の跡を継ぐとは思わないでいい。

ギル、きみは、きみのままであるべきだ。

きみの父君が、なぜきみを貴族として、古家の当主として、何も教えなかったのか分からないかい？

ギルを、あんな者たちには、したくなかったんだよ。

きみには、修道会がついているじゃないか。

優秀な家令も。

彼らは、きみを守る義務がある。

何も心配はいらない」

国王がそう励ますと、少年はようやく寛いだ顔になった。

まだ着心地が悪そうな上着を脱ぐ事を勧め、ささやかなお祝いにと王妃が手ずから作った焼き菓子とお茶を運んでくる。

つい、この間まで、こうしてお茶を飲み、語り合っていたのに、ずいぶん久しぶりのような気がした。

限られた時間が進むことが惜しまれる。

少年が退出する前に、国王は云った。

「きみにも、私にも、その前途には苦難が伴う。

私が、人として心を許す友はきみと王妃だけ。

だから、君たち二人が苦難に在る時は、私はお前たちの心の中で君たちを守る。

そして、私も君たち二人の心を胸に刻み、苦難にあるときは支えよう。

我々は、君主と臣ではない。

きつと、もつと尊いもので結ばれている。

私はそれを信じたい。

だから、ギル、生きることと怖れてはいけない」

それは、啓示を受けた者として、少年に対して掛ける言葉であった。

心を失うほどの苦難。

その言葉を告げる国王の気持ちと、少年は悟るだろうか。

第28話 聖典の啓示（後書き）

あと二話で終わります。

第29話 王国教会の再建

マーブリック大司教ラヴィロアの騎士団葬に際し、国王は私人とし参列することになった。

その席が、騎士団長として、実質的に少年が騎士団員の前に立つ日でもある。

教主の隣の席から見下ろしたところでは、数日で気持ちも落ち着いた様子が見てとれ、国王はひとまず安堵した。

その後、総教主と別室において、王国教会の再建に対しての会談の席が設けられた。

「この度のことは、総教主猥下、並びに修道会に対して、深くお詫び申し上げます」

国王は、総教主に対して跪礼を捧げた。

「どうか、陛下。」

私はただシエル・ダル・シャハールによりこの座を任されただけの、神々の下僕でございます。

ですが、信徒としての陛下のお気持ちを尊重し、この場はどうか対等ということで、お互いに儀礼は省きましょう」

総教主は、国王を立たせ、会見の席に座らせた。

「我が配下の士の不手際により、国王陛下には余計な心労をおかけ致します。」

あの男は、事を急ぎすぎる性質がありましたな。

争いを諫める立場の修道士たる者が、宮廷を無駄に騒がせたのは、あの者と、それを戒める立場にあるこの身の不手際。詫びなければならぬのは、こちらでございます。

さて、陛下も今は一刻も惜しい立場であらせられる。

これ以上、余計な時間をとる必要はございません。

早速でございますが、王国教会設立に関しての確認事項にとりかかりましょう」

総教主は、国王に資料を一通渡し、自分もそれを見ながら云った。確認事項の内容は、以下のようなものだった。

王国教会の本体をグランヴィル大聖堂に置くこと。

それについての現状での大聖堂の改装は必要無いこと。

マーブリック大司教の喪の期間を、騎士団葬終了の日をもって終わるものとし、その翌日より、マーブリック大司教とともに王国教会の設立に動いていたロムルス副教主に王国教会教主を任命し、それをもって王国教会の設立とすること。

現行、進行している大聖堂内へのオフィスの用意が整い次第、王国教会としての実務を開始すること。

ロムルス副教主の王国教会教主就任より、できるだけ早い時点で元老議会議員として任命すること。

そして、王国教会の実務が開始されて最初の礼拝の際に、総教主の名で帝国教会の設立宣言を行うこと。

具体的に、実務の開始は一週間後と定められた。

そして、設立宣言の礼拝は、その翌日とされた。

以上の件は、前もって王国議会に案として打診されていたもので、日取りの決定は、元老議会にすでに諮られていたものだった。

一通りの確認が済んだところで、総教主は云った。

「これは、文書として明らかにせず、ひとまず国王陛下のお気持ちをとお尋ねしたくて申し上げるのですが、陛下は、摂政陛下について、今後どのように処遇なさるおつもりでしょうか」

国王は、その問いに対して、明確な返答を持っていなかった。問われることは承知していたが、気持ち而定まっていなかった。

「この国の荒廃は、我が母ばかりに責任があるわけではございません。

国情を知らながら、自分は無力と投げ出していた我が罪でございます。

ルーサザン公爵、いえ、マーブリック大司教の死に関しましても、予見できながら、制することができなかった」

「陛下。私は、その事をおとがめする訳ではございません。

大司教の死に関しては、その前に私は彼に警告致しました。物事を急ぎ過ぎると。

その上で起こった事に関しては、どこまでも大司教の責任でございます。

本人も、自分の投げた石が、自らに返ってくることは覚悟の上でありました。

しかも、修道会と信徒を守るべき騎士団長が、自らを守る事すら叶わないなどあるまじき事でございますれば、もし、犯人が判明致しましても、罫を仕掛けた以上の罪を問うことはなさいませんように、切にお願い申し上げます。

それと引き替え、と申しますか、王国教会として、元老議会に参与する以上、宮廷の健全な運営を節にお願いする所存でございますれば、いまし、摂政陛下の政治的なご参与をお控え願いたく、国王陛下に希望するものであります」

「摂政の退陣を要求しておられるか」
「いかにも。」

国情の不安定に関しては、修道会は陛下の責を問うことはできません。

今、国王陛下が摂政陛下と同じ位置に立つならば、国を憂える心ある者たちの心は誰に従えばよろしいかと。

国王陛下には、新しい治世の象徴として、今後とも施政に務めていただかねばなりません。

しかし、宮廷の腐敗と、国情にもたらした不利益に対する責めは、これまで現実に施政に関わっておいになった摂政陛下に負っているただかねばなりません。

ですが、我らが立場で、この時点で摂政陛下に退位を要求致しますのは、いたずらに事を荒立てましようゆえ、ひとまず陛下のお立場で、お母君として、摂政から降りて頂くように求めているかがでございましょう。

国家の改革を目指しておられるなら、障害は先に取り除いておくべきでございます。

摂政陛下の退位の他は、修道会は求めておりませぬ。身分も、お暮らしもそのままです。

総教主は、国王のためらいを見抜いていた。

国王が、王太后に対して、深い思慕の念を抱き続けている事を。親子として全く交わることがなかったゆえに、その関係に正当な位置づけを取ることができない国王の心情を。

全くの拒絶や、無関心、諍い、憎悪など、立場を明白にする関係が確認できず、幼い頃より抱き続けてきた思慕のみがある。

そして、その情を大切にするあまり、正面から対峙する機会を失っているのだと。

国王も、その事についての自覚があった。

「向き合わねばなりませんか、我が母と」

「陛下が、良き陛下となられる為に。この国を真に憂いますなら、お覚悟を」

国王の中で、少年のあの日、グランヴィル大聖堂の天井裏の聖典の間で、父の手がそのまぶたを覆った感触が蘇った。

あの日から、国王は目を閉じたまま、母に関しては現実を見ない事にした。

そして、その目を開く時が来る。

「承知しました。陛下。」

ただ、その日を慎重に選びたいと思います。

あの母のことです。

また、いかなる事をしでかすかわかりません。

せめて、我が妹王女が、アールシャド帝国への輿入れを済ませてからでよろしゅうございますか」

「リオン皇太子の即位式まで、あと二ヶ月足らずでございましたな。よろしいでしょう。」

せつかくのリン＝レーゼタークの晴れの日。

兄君としては、心から祝福したいでしょう」

「猊下の寛大なる処遇に、感謝致します」

国王は、総教主に謝意を述べた。

宮殿に戻る車に乗り込む時、騎士団長の制服姿の少年が見送りに出てきた。

国王は、少年に微笑みかけた。

深夜。

国王は久しぶりに夜の宮殿を彷徨っていた。

ルーサザン公爵の死は、国王の中の何かを確かに変えてしまった。魂の中にある慟哭は、悲しみではなく、己れに対する怒りなのだ。父を失ったギルの為に泣くのではない。

志半ばにして散った公爵の為に泣くのではない。

頼みとしていた宮廷の変革者が居なくなつたのを泣いているのもない。

状況を憐れみ、そして嘆くことしか出来なかつた自分への苦渋である。

そして、総教主から突きつけられた事。

それはすなわち、子どもつばさを拭い切れない国王に対しての苦言である。

宮殿のホールの噴水の縁に座り、水の音を聞く。

心の迷いは無い。

そう信じていた。

今まで信じていたかつた事を切り捨て、本当のところを見つめなければならぬ。

王太后の、母親としての善意を。

「こちらに居られましたか、陛下」

凜とした声が響く。

天窓からこぼれる月の光の中で、ふわりと降りてきた光の精のように浮かび上がる少女の姿を見た。

「そのように薄いお召しものでは、寒くはございませんか」

王妃は携えてきたストールを国王の肩に掛けた。

「お前たち、さがりなさい。陛下がいらっしゃいます。私は大丈夫」

王妃は、付き添ってきた女官を部屋に下がらせた。

「お部屋にいらっしゃらなかったなので。副女官長にお尋ねしたら、こちらではないかと仰いました。陛下の事を良くご存じね」

いつもと変わらぬ王妃の声に、国王は不思議と落ち着くものを感じた。

「陛下のお部屋にまいりましょう。」

私も眠れませんの」

王妃は国王に優しく微笑み掛けた。

「そうだな、僕には、もうきみがいたんだ」

王妃の笑顔が、愛おしくて堪らない。

国王は立ち上がり、王妃を抱きしめた。

「ねえ、ライラ、僕はね」

国王には、その感情を言葉にすることができず、王妃にそのままキスをした。

そして、ある事を決意すると、耳許で囁いた。

「一緒に来てくれないか。大事な事をお願いしたい」

国王は、そのまま王妃の手を引き、一旦中庭に出ると、グランヴィル大聖堂の隠された部屋への通路に入った。

そして、聖典の隠された部屋に伴った。

王妃は、あまりの暗さに、少しおびえたので、国王は小さな室内灯を点けた。

「国王として、王妃であるライラに、この聖典の間を覚えておきたい。」

余がここに、継承者を伴うことが叶わない時は、王妃がその者をここに連れてきてくれ」

王妃は、事情が飲み込めず、ただ頷いた。

「そして、僕はもう怖れない。」

きみを、僕の運命に巻き込むことを」

そして、もう一度、耳許に口を寄せた。

「それから、この部屋には当然のごとく、一切の監視装置が無いんだ。

だから、いい？」

そして、そのまま、首筋にキスをする。

王妃は、何も云わずにそれを受け入れ、身を委ねた。

第30話 リバーサー（再生者）

アーサー・レイノルズ三位修道士は新型指揮専用艦シンラのシステムを稼働させた。

シンラは旗艦ではない。

中型高速攻撃艦を特別な目的だけに改造したものである。

この艦はアーサーのみの為にある。

アーサーは、指揮専用ポッドの中に身体を沈め横たわった。

視神経がロックされ、シンラのサーバーに接続する。

四肢の運動神経も同時に別の感覚に切り替わる。

電脳神経の接続を感じると、麾下の第八番艦隊の全ての艦のシステムに侵入し、それを四肢の運動神経とリンクさせる。

今回の派遣のもう一つの目的。

それは、修道騎士団においてただ一つの無人化艦隊のテストである。

連邦においては、この手の無人化艦隊は通常配備されている。

だが、自然戒律の縛りがあるアストレーデ諸国においては、いまのところこれが唯一であろう。

アーサーは、電脳を持っていながら、自然戒律のある修道会において修道士となった。

修道会として、その電脳をどのような形でメンテナンスするのかは、アーサーが電脳を保持している事を知る上級修道士の間で議論がかわされた。

そして、結論は長いこと先送りされていたが、五年ほど前に電脳の本格的なメンテナンスを要する段階に来て、ラヴィロアが無人化艦隊の組織を提案、その部品の一部がとりついているのがたまたま人間であった、という事にして、無理矢理メンテナンスを受けられるようにしてしまった。それで、修道宣誓を認可されることが出来、それから正式に修道士となった。

アーサーは、再生体の生活年齢が十五歳になった時に、オリジナルの記憶の注入を受けた。

だが、再生体の持つ意識と、注入された記憶内の人格が乖離を起こし、その人格を統合するために支援電腦を備えた。

太陽系連邦も、特殊なケースを除き、再生人も含め、完全電腦化はあまり用いられない。

アンドロイドとの区別の問題もあり、そして何より、完全な電腦化では『心』が維持できないのだ。よって、事故などで損傷を負っても補助電腦を埋め込む程度で、完全電腦化はなく、また補助電腦さえも特殊なケースである。

再生は記憶も再生されるが、データとしての記憶だけでは、『心』および『人格』は形成されない。それは生体が生活年齢を経ることによって育成されるものである。

アーサーとしての人格の本体は再生体としての人格である。

だが、記憶の集積として行動を選択し、支配するのは、後から注入された記憶である。

エドワードは、どちらの人格も近かった、あるいは、後からの記憶が若い人格を取り込んでしまったというのが正しいのかもしれないが、意識の統合が上手くいった成功例だ。

だから、外部に意識を統制し、行動の選択の指針となるものが必要ない。

しかし、アーサーは、二つの人格が拮抗するがゆえに、多くの事柄においての選択肢のトラブルを抱えてしまう。

その意味で、神と宗教、そしてそれが統制する修道会という組織に身を置く事自体に、一定の行動基準が生ずるので、意識内での葛藤が減る。

いふなれば、行動の指針を自分の内部に設定することを放棄できる。

それが、アーサーとエドワードの、修道会における立場の相違である。

現実には、エドワードはかつての人格とほぼ同じ人格を得て、アーサーは別人になった。

だから、エドワードは本来の意味での再生体といえるが、アーサーはそうではない。

いや、どちらの場合にせよ、現実の肉体の死は、それは死である。アーサーにこの場を与えた男は、それを理解して、『死んだ』のだろうか。

有事には、戦略・戦術思考システムに占有される意識の空間で、そんなことを思う。

そしてアーサーは、全てのテストを終え、艦隊の運用システムと自分とのリンクに問題が無いことをチェックした。

データを保持し、そして、艦隊の上位指揮官にしか知らされていない演習を終える。

広大な宇宙空間に広がる感覚が切断され、アーサーは意識を浮上させ、目を開けた。

感覚が正常に戻るまで数分かかる。

その間、短い夢の断片が意識の中に広がる。

電脳から強制接続されたシナプスが遮断される際に起こる現象で、昔はいい感じのものではなかったが、今はそれほど悪くないと思う。情報システムにリンクしていた記憶野から、雑多な情報とともに、宮廷でのいくつかの噂やニュースが飛び込んでくる。その中に苦心する国王の姿が垣間見え、それが気になる自分を不思議にすら思う。エドワードからの恒星間通信が入ってきた。

アーサーは、通信士官が気づく前に、回線を電脳に直結した。

内容は、いくつかの噂話。

そして、修道会、および騎士団の中に張り巡らされた、いくつかの秘密の集団。

それらは、出身も組織もまちまちで、誰がどの組織なのか判別するのも難しいほど。

これまで、修道会としての組織が安定していたから、そういった

者たちも判明しがたかったのだろうが、このところの急激な変化が、彼らの活動をやや表立たせることになったのだろう。

本来の調査の指示者であったラヴィロアが居なくなったので、エドワードはこの件を総教主に報告したという。

来る者は拒まぬ修道会であれば、こういった事は仕方のないことなのだろう。

要は、その中の者たちの中で、害をなすものをあぶり出し、監視する事だ。

回線を遮断し、そして、意識を平常に戻し、目を開ける。

そして身体を起こして、ポッドから出る。

何も異常はない。

アールシャド帝国領内の辺境にあるタリアンファット自由交易惑星。

アギールのギルド・オフィスにおいて、アギール公爵の次男、サルファ伯爵ロアイユが艦艇の修理のスケジュールと、仕事依頼の割り振りに忙しく働いていた。

一方で、暇そうにしている長男ルーディジー候爵バレルは話しかけた。

「で、どうなの、修理のほうは」

「帝国工廠のサントアグネス星の新工場で一手に引き受けてくれるよ。」

新しいスタッフの研修も兼ねているから、割安にしてくれるそう

だ。

支社長が、ローランド家のエリア嬢らしいよ」

「エリア嬢は兵器関係やらないんじゃないかなかったのか」

「本来は、商船のメンテナンス工場だよ。オレらのはオマケみたいなもんだ」

「で、護衛船団のスケジュールは」

バレルは、袋入りのスナック菓子を開け、雑誌を広げながら尋ねた。

「大規模船団は当分無い。だから、兄さんの仕事も無い。

小船団の注文なら引く手あまただから、兄さんも高速船で行ってくれば」

兄の態度に怪訝な視線を送りつつ、指はキーボードの上を高速で動く。

「あー、ジェアばあさんちのアレックスの艦が全壊したから、オレ手伝いに行くって云っちゃったよ。

ところで、シドに連絡ついたか」

バレルは、視線を上げた

「いや、もう何度も帰還命令のメール打ってるけど、返事が無い」
「オレもおんなじ。

なんでシド、帰ってこないんだよ。ババアにたぶらかされたか」

「もう三年潜入しているからな。情が移っても仕方ないだろうな。

兄さんみたいに単純に生まれてきたら、苦労しなかったのに」

「オヤジは行くなって云ったんだよな。あいつはなんで潜入なんかしたんだ」

「養子として引き取ってもらった義理立てだろう。

自分がサラディン殿下の命を受ける事で、少しでもファーマムール王国に対してアギールの立場を良くしようという浅はかな配慮」

「毎日オレたちとポテチでも食いながらこうして駄弁ってりゃ、それでオヤジは満足だったのにな」

「だから、兄さん、ここはオレの仕事場だと何度云えばわかる。

いい年をして、どうして、ここで駄菓子なんかかじって雑誌読んでるんだよ」

「だって、ほら、オレ、暇だし」

「オヤジと営業行くんじゃないかったのかよ」

「オヤジは、リン・ルーレンシア様のところに、お見舞い。

クラウサリ様も大分良くなってきたし」

「で、本物のほうは」

「本物のトランザール大公は、現在就職活動中。

デビー・マイヤー社の二級商船あたりにめでたく見習いで決まるんじゃないだろうか」

「デビー・マイヤーというと、客船だな。妥当な線だな。

それじゃ兄さん、三名ばかり、うちの若手を押し込んでくれ」

「ああ。オヤジが手配済みじゃないのか」

「だから、そこんとこ確認するのが兄さんの仕事。

あんまり役立たずだと、本気でルーディジー候爵の地位から降りてもらおうよ」

ファーマムール王国によるラーフェドラス王国への侵攻にまつわる一連の出来事は、こうしてひとまず幕を下ろした。

アールシヤド帝国に正式に即位する新皇帝、そして皇后を送り出すラーフェドラス王国、さらに頑なになってゆくファーマムール王国は、その他の国々を巻き込みながら、波乱の時代を迎えるのである。

第30話 リバーサー（再生者）（後書き）

第一幕、終了でございます。

ここまで読んでいただいて、ありがとうございます。

第1話、改稿しました。（2月5日）アールシャド帝国は二幕で絡むことになりましたので、下げました。

代わりにミスチア王太后のあの性格の原因をはっきりさせてみました。

諸悪の根源は、ルーサザン公爵とその嫁でした ってことで。

→

この人が一番悪い人

いくつか作品世界についての設定を明示しておきます。

この宇宙、太陽系連邦は不明ですが、アストレーデ教圏の全人口を併せても、現在の地球と同等、あるいは若干少ない程度です。

地球と同じように、防護装置無しで生活できるのは各王国の首都やら、主だった星のみです。大半の人の住む星は、閉鎖型ドーム、あるいは地下都市などの形で、住める人口に限りがあります。

なので、テロリズムなど起き、それがライフラインを直撃すると、多くの場合、ドームごと、死あるのみです。

また、星と星との移動は、艦船が自分で行う小ワープの他に、ワープポイントと呼ばれる自然にできたブラックホールのようなもので行うので、（高速道路、というか、地下鉄、というか、そういうもの。穴を通る間は時間が流れないので、瞬時）距離と実際に移動する時間は比例するものではありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6723f/>

vermilion 第1幕

2011年6月4日02時40分発行